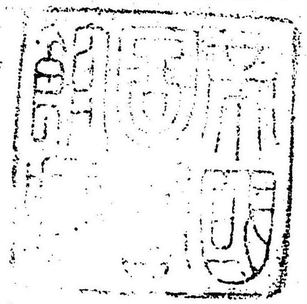
94-783



中外商業新報社

中外商業新報社寄贈本

情緣雙全集

含雲山莊公開下屋詩

情景全題

侯山陽方敎授
宜的見之既於此
絶筆矣閒相與
的所稱陽春之
冷閑所作
春春雪人

金堂清浦子爵下題詩

依山樓閣雲歇淡
空餘見定親往功
德隆來問將軍
祈敬跡楊雲敬
冷月明中

臺灣學人

男體岩峰小彌太氏世當早苗子題歌

序

我中外商業新報曾て諸廻國記を連載す。編は古譚曲に因める各地の紀行に係り。城和兩州を主とし攝播江勢尾濃駿遠の各地に及ぶ。記過ちて大方の激賞する所となり。之を一冊子として編成せんことを求めらる。書成りて之を一閲すれば牛洟馬勃また棄て難きの感なしとせず。江湖の愛讀を得ば幸甚也。

明治辛亥五月下澣

汲古庵主

野崎廣太

羅生門の一節を抄出して

論廻國記の緒言に代ふ

花月

此羅生門遺址の濠の中に家鴨多く泳ぎて啾々と叫ぶ有様は恰かも予を見て道路の所を痴氣にも尋ね來りしよと嘲るが如く思はれて腹立しければ、コレ家鴨、能ッく承はれ、論廻國は作者が那邊に迄心を揺きたるかを探らんが爲めなり。多少論曲家又文章の勢をも知らんが爲めなり。

に趣味をも持たせんが爲めなりと罵れど、家鴨は一向平氣にて予の顏を眺めて矢張啾々と叫びぬ……。

諸國記目次

(其一) 清水寺……一頁
(其二) 小鹽山……一四
(其三) 松尾神社……二二
(其四) 寂光院……二五
(其五) 逢坂山……三一
(其六) 小野隨信院……三七
(其七) 加茂神社……四四
(其八) 北野天滿宮……五〇
(其九) 江州義仲寺……五七
(其十) 東北院……六九
(其十一) 大阪四天王寺……七一
(其十二) 河內國道明寺……八一
(其十三) 大神神社……八八
(其十四) 宇治平等院……九六
(其十五) 三井寺……一〇五
(其十六) 奈良……一一三
(其十七) 嵐山……一三二
(其十八) 清閑寺……一五三
(其十九) 夕顏の墓……一五八
(其二十) 神泉苑……一六三
(其二十一) 高野山……一六六

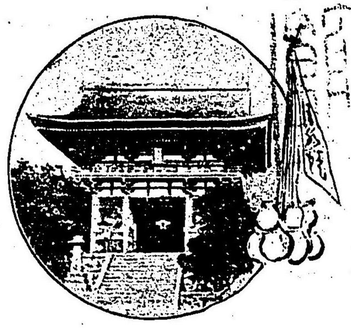
目次

(其二十二) 羅城門……一七八
(其二十三) 泉涌寺……一八五
(其二十四) 新京極誓願寺……一九一
(其二十五) 松原橋……一九九
(其二十六) 生田の森……二〇四
(其二十七) 根殺邸……二一六
(其二十八) 雲林院……二二四
(其二十九) 雪の嵐山……二三一
(其三十) 男山八幡宮……二三六
(其三十一) 女郎花塚……二四五
(其三十二) 尾張熱田神社……二四八
(其三十三) 鬼界ケ島行……二五六
(其三十四) 摂津國處女塚……二六九
(其三十五) 須磨の浦物語……二七三
(其三十六) 鞍馬山……二七九
(其三十七) 賀船神社……二八六
(其三十八) 播州幸壽院……二八八
(其三十九) 大和當麻寺……二九二
(其四十) 伊勢阿漕ケ浦……二九九
(其四十一) 駿州三島神社……三〇二
(其四十二) 駿州清見寺……三〇五
(其四十三) 三保の松原……三〇八

以上

(其一) 清水寺『田村』『熊野』

……經書堂……子安堂……金色水……地主權現……
……音羽の滝……田村堂


(清水寺樓門)

洛陽第一の靈場と稱へらるゝ清水寺は、四時の眺め疎からねど、別けても陽春櫻花の美と晩秋紅葉の艶とを以て、其名世に顯る。而も此の靈域は謠曲の「熊野」「田村」なんどに謠はれたる名所となるを以て。斯道の人の渇仰する所なり。時は四月の初旬、花も早や咲き綻びぬと聞くもの、いでや此の御寺に詣で、謠曲作者の捉へたる靈地の景趣を探らばやと、支度も匆々、牛車ならぬ自轉車に跨りぬ。能にては熊野御前が平宗盛に強ひられて、心も進まぬ牛飼車牽かれて行くや六波羅の地藏堂を横に見て、頼むは大悲の觀世音、母の病を守れかしと、且つ願ひ且つ愁ひて、力なき花見の庭に伴はるゝ所なれど、末世の能弟子と生れたる予は、名所見たしと逸る心をサイクルに托し、鳴らす鈴の音に道行く人を驚かして、粟田御殿の門より

真一文字に、智恩院をも馳せ抜けて、急げば程なく、圓山にこそ着にけれ。此處にて自轉車を茶屋に預け、徒歩路清水あれぞと志しつゝ、東大谷の前を過ぎつゝ、高臺寺を抜けて、三年坂といふを登ればこゝぞ早や清水坂なりける。

此の邊清水燒を鬻ぐ店軒を並べて、往來の人を喚ぶ聲喧しけれども、予はさる方を顧る遑なく、何がな由緒をもやと四邊を左視右眄して行く途次不圖「熊野」の道行を思ひ浮べつ、諸流いづれも此道行の所は、脇座に置かれたる牛飼車の作物の中にて、シテなる熊野は立ちながら面を遣ひ、地御法の花も開くなる、シテ「經書堂は是かとよ、地其慈母を尋ぬなる、子安の塔を過ぎ行けば」と謠ひて、其心持を細かに表すがゆゑ、殊に趣味深く覺ゆる所なり、予は先年寅生九郎の「熊野」を見たるが、老手の妙技、今尙ほ眼に殘りて忘るゝ能はず、其時の面は節木增といふ面にして、裝束は例の赤地の唐織なりしと記憶す。

遠き昔の熊野御前は花見車の中より、此の堂を打見たるのみなれども、予は脊廣半ズボンといふ打扮にて、手帳片手に街立ち上りて、堂內を見込んだる形何に喩ふべしや、堂の軒には經書堂と書きたる額を上げ、其側には第四十一番弘法大師、三十三所觀世音菩薩の文字を

刻みたる立石あり、正面には毘沙門天辨財天、不動明王、子安地藏菩薩の諸佛儼然と控へ給ひ、右手の方には弘法大師の木像さへ安置したれば、いと尊く拜まれぬれど、慨むらくば間口二間奥行二間の小堂にて、堂守の坐すらも見出されぬほどなれば賽錢箱も常に空乏を喞ち顏に見え、不動明王は誰が爲めに眼を瞋らせ給ふかと疑はるゝばかりなり。猶ほ堂の前なる衝立には、左の文字あり。

十句觀音經

觀世音南無佛　與佛有緣
與佛有因　常乘我淨
佛法僧緣　暮念觀世音
朝念觀世音　念念不離心
念念從心起

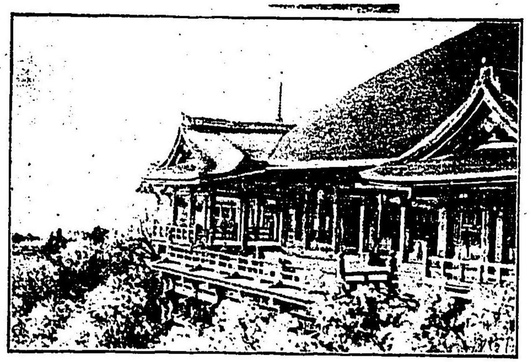
宿坊　成就院
願主　松村九右衞門

文政四歲辛巳二月吉日

因に記す。經書堂はその昔聖德太子の、經文を書きたまひし所と言ひ傳ふ。されば經文そのものゝ意にあらざるゆゑ、キョーショ堂と讀まず、キョーカク堂と訓むなりとぞ。但し經書堂は俗稱にて、本名は來迎院なり。

經書堂を去りて、坂を登り行けば、急ぐ心の程もなく、南

無や大慈の觀世音清水寺に着きにけり。花ならなくに、丹朱の樓門は漠氣四方に散して、宛然身は極樂世界に在る感す。その傍に古色を帶びたる一宇の塔の立てるは、是なん阪上田村麿の娘春子が嵯峨天皇の女御となりて懐姙の時、其安產を祈る爲めとあつて建立したる子安の塔にて、今なほ靈驗あらたかなりとて、此處に詣づる善女多しとかや。見付の榜には洛陽子安觀世音菩薩と書きたる扁額を掲げありて、清淨幽靜塵を留めぬ廻廊には優しき欄干を廻したるなど、



（清水寺舞臺）

實にも女性の建てたる塔なりけるよと思はれて、いとゆかし。「安產御願卯之年女」などゝいふ札の數多く掛りたるは、さもこそあれと諾かるれども、「出世軍人午之年湯淺重吉」と記されたるに至りては、予其意を解するに苦みぬ。また楣間には大なる繪馬あり、うら若き妻が手を合はして居る所を畫き左の歌を書添へたり。

たいないにやどりしよりも頼みつる
　　子安の塔のほとけなるらむ

謠曲を嗜む人の妻君にて懐姙り給ふ方あらば、一度は此塔に詣で給へ。無事安產は疑ひあるべからず。あなかしこ。

さて樓門を入り、普門閣に上りて、徐ろに眼を喞れば、西山一帶手に取るが如く、双眸の内に集り、屹として聳立する峯あり、摺鉢を伏せたるが如き巒あり、起きて輾びて寢て伏するが如き丘あり、又千戸萬戸井然と甍を並ぶる京都の市街は脚下にありて、四顧の風光頗る面白し、加之も又此閣の下に今を春べと咲き出でたる櫻の軟風に誘はれて翩々として散る風情の美しなんどいふばかりなし。其れより本堂の方へ行く途に、額堂あり、左方の額に金文字以て記されたるを見るに、

十六番　清水寺

まつかせや音羽の瀧の清水を
むすぶ心はすゞしかるらむ

とあり、すが〳〵しき歌の心を味ひつゝ歩めば程なく本堂の前に來りぬ、此處は千古の靈場とて、御燈の光輝く、此方には賽錢の音絶え間なきまでに、信心の瑞鷹集して、合掌禮拜に餘念なき有樣を見ては、今更に佛德の洪大無邊なるが偲ばれて、隨喜の涙の零るゝ。かし、御

本尊は云ふまでもなく十一面千手觀音の立像一度之を拜せば、御佛虛空に飛行しつゝ千の御手ごとに放ち給ふ大慈の光は、雨霰と振り注ぎて、有難くも又勿躰なしと參詣の老人は語りぬ。

堂の楣間には例の納め額あまた懸れり、中にて最も人の目を惹くは、狩野縫殿助の筆なる駿馬地を走るの圖大に見るべきの値あり。更にまた、かの田村麿が鈴鹿なる妖魔と戰ふ折から、不思議やな、味方の軍兵の旗の上に、千手觀音の光を放ちて虛空に飛行し、千の御手ごとに、持たせ玉へる大悲の弓には智惠の矢をはめて、よッびき兵と放ちたる其矢は、雨霰と鬼神の上に振りかゝるといふ、彼の「田村」の謠の文句を其儘の繪額掛りたるぞ尊き、明暦三年仲冬二十八日海北友雪齋圖と署せられたる文字の跡も、ほの暗き所とて定かには見へ分かねども、此處に詣でたらん人はゆめ見落すまじきものにこそ、本堂を出でゝかの有名なる清水の舞臺の上に立ちて又も外面を眺むれば、前面には阿彌陀ヶ峰高く雲に峙ち、松柏參差たる間より白き華表の見ゆる景色、頗る詩的なり、而かも程近き音羽山は新綠の粧ひ濃るばかりにて、盛り上げたるが如き山勢、亦た頗る奇なり、猶は遙か彼方の八幡山に隣りて、西山の連巒の盡きたるあたりこそ、大阪の街なりと物語る人わり。「熊野」の

本文にも「南を遙かに眺むれば、大悲擁護の薄霞、熊野權現のうつります、御名も同じ今熊野、稻荷の山の薄紅葉の」とある如く、如何にも觀世音が大慈大悲の御心を以て、衆生を擁護し給ふ御力は、此處數里が間に紫雲と現し、或は霞とたなびきて長に明滅すべしとぞ思はれたる。然れども此處より今熊野は見え分かず、又稻荷山に至りては阿彌陀ヶ峰に隱されて、中々に眼も及ばぬ事なるぞかし。ましてや「薄紅葉の青かりし葉の秋」の文句においてをや。さはさりながら謠曲はもと是れ實景を主とするものにあらずして、眼目とする所は其曲の精神を現はすにあり。卽ち魂が主にして彩文之に次ぐものなれば、實地に副はずとても深く咎むるの要なし、舞臺を降りて本堂の橫手を過ぎむとすれば、堂の軒に又金泥にて「慈眼視衆生、福聚海無量」の文字を表したる大額あり。按ずるに這はかの「誓願寺」のクセにも「慈眼視衆生顯はれて、娑婆示現觀世音」とある如く、觀世音は慈悲の眼を以て衆生を見る可く、又福の聚まる事は洪海も啻ならずといふ意味なるべし。予はあら尊しと一禮して本堂を離れ、大黑堂、阿彌陀堂を過ぎりて、奥の院に詣る、こゝぞ當山の開祖たる延鎭法師が始めて草庵を結びたる跡とて、幽靜此上なく、堂下に迸る音羽の瀧の潺々たる調は、宛ら心耳を洗ふが如き心地す、堂内には千手

観音を納めありとぞ、軒に掲げたる額を見れば、左の御詠歌あり、

洛陽　十一番

瀧津瀬は妙にながるゝ清水を
結ぶちかひのおくはしらなみ

又左右の柱には次の偈あり、

福海波澄萬象森羅齊仰影
慈雲光映四生九有盡蒙恩

此堂の前にも亦た舞臺あり、されど數多の星霜を閲したると覺しく、頽敗甚しければ、上らずして堂の背後に廻りしに稍々離れて瀟洒の小宇あり、額の文字に「金色水」とあるに、こは必定由緒こそあらめ、如何にもして人に尋ねばやと思ふ折しも、奥の院の堂守ともおぼしき人が、今し畚鍬を終りたると見えて雜具をば御手洗の傍にて洗ひ居るを見出でたれば、仕合せ好しと近寄りて金色水の所由を訊ねしに、其人語つて曰く「さん候彼の金色水と申すは、當山とは淺からぬ因縁あるものにて、昔延鎮法師が始めて此所に彼の水を見出したるにより、其れを便りにして此の奥の院をば建立したるなり。傳へ言ふ、其水始めは金色の光を顯はしたりと、實にも尊ふとや、彼の金色の水こそ、當山開基の本源にて候へ」と、予は此時花月のクセの文中に、

「ある時此瀧の水、五色に見えて落ちければ、それを怪しめ山に入り、その水上を尋ぬるに、こんじゆせんの岩の洞の、水の流れに埋もれて、名は青柳の朽木あり、其木より光りさし、異香四方に薫ずれば」

とあるを思ひ出で、瀧の水の五色に見ゆるといふも、畢竟かゝる傳説を取りて金色を五色に潤色し、音羽の瀧に附會せしものにわらずやと推測しぬ、それとも日光を反射して五彩の光を放つといふ物理學上の現象を應用したるものか聞かまはし。

（清水寺音羽の瀧）

斯くて再び所由深き金色水の所に立戻り、仔細に見てあれば、祠の下にはいと清氣の水湧き出でゝ、柄杓さへ添へられたり、此處にも善男善女の歩みを運ぶものありと見え、羽目板に安産御願などの落書多く、又參詣の證にや、格子窓に結び付けたる紙は其數幾百といふことを知らず、殆んど格子の目も見え分かぬばかりなり。それより本堂の北なる地主權現に詣づ。此處は一段高き小山にして、洛陽二十一社順拜所、地主神社の札を掲げ、拜殿の天井には、狩野法眼元信の筆にて蟠龍を描きわれ

ど、其大部分は剝落して、さだかに見えず恨みなる。もと當社は阪上田村麿の創建にて、德川家光の再建に係り、大己貴命外四柱の神鎭座あり、能の「田村」は實に此處を以て前半の舞臺となせり、されど惜しい哉、古來歌に詠まれ、謠曲に謳はれて有名なる地主櫻は二十年前に枯れ朽ちて、今は若木の櫻を植ゑ、其木に地主櫻といふ札を建てたり。「御覽候へ、音羽の山の嶺よりも、いでたる月の輝きて、この地主の櫻にうつる景色」といふ文はさもこそあれと感ずれども、此處は鬱蒼たる叢林中にてもあり、而も前には魏然たる本堂、朝倉堂の大棟ありて展望を遮りたれば、「塔婆の見えて候」或は「あれこそ歌の中山清閑寺、今熊野まで見えて候へ」等の句は、筆の運びに重きを置きて、實景に伴はぬ憾なきにしもあらず。

地主權現にも參拜しつゝ、いざ是よりは音羽の瀧の方へ行かばやと、石磴を下れば、花見の客の三々伍々連れ立ちて來るあり、中には孫の手を引く翁、姑の杖持つ手を扶けていと忠實だちたる嫁御寮或は又由ある人の娘ともおぼしきが母に伴はるゝもあり、見れば雲の鬢花の顏、釧合金釵普ならず、しかも輕風來りて眞紅の羅裙を飜へす度に、嬌として力なきの有樣是れをしも翠華搖々行いては復た止まるといふべきか、實にも京都

は美さ上膓の產れます地よと思へば有繫に床しくぞありける。程なく音羽の瀧に至りて見れば、三箇の瀧口より落下する飛泉は三條の白絹となりて、玉と瑩き、雪と飄り、花と舞ふ有樣、よなく面白し。予今此の美觀に接して、「音羽の瀧の白糸の、くりかへしかへしても、面白やありがたや」などゝある語の盜美にあらざるを知りぬ。瀧口の下には不動明王を安置せられたる小祠あり、こは水行をなす人の祈誓を掛くる御本尊なりとぞ。瀧の傍に掲示あり。

當音羽瀧水ニテ水行又ハ水浴ヲナサントスル者ハ裸體ノ儘ナスヘカラス必ス看守人ヘ申出浴衣ヲ借リ之レヲ着テ水行又ハ水浴ヲナスヘキ事

但浴衣借料ナドハ更ニ要セズ

清水寺寺務所

又此掲示に隣りて大聖不動明王の御圖歌を掲げあり、たれば、左に錄す。

第一　吉

正直をこゝろにこめて願ひなば
我もちからをそへて守らむ

第二　半吉

おそくともかけし願ひはかなふらむ
朝夕はこゝ心つくしに

第三　吉

願ふ事今はたへなむおりからに
また思はざるたよりもとむる

第四　凶

けふよりはあすを大事にこゝろえて
しばしのうちもゆだむいたすな

第五　大吉

何事もおのが心の素直にて
雲の上までのぼる道あり

第六　凶

わがおもふ道をばすぐに立たずとも
人のなさけをうけてゆくべし

第七　吉

思ふ事いまはのぞみのごとくにて
かなふ時節をえたるうれしさ

第八　凶

いそかずと時の至るを待つならば
やがて花さく春の來るなり

第九　吉

常ならぬおもひを胸にいだけども
願ふかひあるのちのよろこび

第十　凶

何事も心のまゝになりぬれど
道はかゆかぬ老のあしもと

第十一　半吉

けふまでは花のつぼみもわすはまた
おもひのまゝに開くなりけり

第十二　大吉

はれわたる雲井にねがひかけ橘の
わたりそめたる身こそ樂しき

予試みに御圖の筒を振りみたるに、二度とも第五番目の大吉を抽き出でたり。さては近き未來に青雲の志を遂げさせんとの御告かゝさりとは嬉しやと獨り心に打ち微笑つゝ此處を辭しぬ。

斯くて、もと來し境内の方に引返せば、嶺には風に散りぬべき運命を枝に托して殊勝らしくも咲き綻びたる櫻花少なからず、中にも清水の舞臺の崖際に樹てる一本の櫻は、色香一入めでたく、いつまでかこゝに心のあこがれむ花し散らずば千代と經ぬべき思ひせられぬ。

其れより普門閣の下の田村堂を覗けば、正面には彌陀如來、右には獅子に跨りたる文殊菩薩、左には白象に乘りたる普賢菩薩あり、又田村麿と行叡居士の木像もあれど、此處は參詣の徒少なき故にや、堂内寂として、何一つの調度とて無く、明家同然の姿なり。殊に田村麿の直

衣の袖はいたく破れて、宛然某に衣を一重賜り候へ」と物申さるゝが如くにて淺猿し、さるにても能にては「田村堂の軒もるや月のむら戸をおしあけて」とさへあるものを、あはれ御痛はしの御姿と漫ろ涙ぐまれける。

(其二) 小鹽山『小鹽』

……業平の墓……鹽竈の跡……花の寺……西行櫻……

小鹽山と稱するもの京都に三ケ所あり、其一は京都の北の盡頭、愛宕郡魚山なる寂光院の西北にある小鹽山是なり、又方角を西南に取りて乙訓郡に入り、向日町停車場を過ぎたる先にも、小鹽山、勝持寺、小鹽山十輪寺といふ二山あり、て、頗る紛はしされど予は向日町

なる二山のいづれかゞ「大原や小鹽の山」の其れなんめりと思ひて、先づ十輪寺へと志せり。

時は四月の十四日、朝風清き都大路を自轉車の一散走り、いつしか四條の西の小橋を打渡りて、壬生の御寺伏し拜み、松の千本を左に見て、流笛耳を劈く向日町の停車場も一氣に走せ過ぎて、早くも小鹽山十輪寺に着きにけり。

此日は恰も十輪寺より程遠からぬ、善峰寺の命日なりければ其方に歩みを運ぶ信徒引きも切らず、予が小鹽山の道を尋ぬるを怪訝なる顏して打眺めつゝ、「小鹽山なぞに何しに行きなはる、彼んな詰らぬ所へ、貴方は善峰はんに行きなはるのやらう」と答へて、只何がなしに善峰をのみ難有がるも道理、善峰は小鹽山の西方なる高地に在りて、風景の優れて好きが上に、毎月十四、十五の命日には寺にて前日より參詣の群集を通夜せしめ、説教を聞かせ、風呂にも入れ、又御供水さへ振舞ひて、いと懇ろに優遇するがゆゑ、此邊の老若男女は此兩日をば指折へて待ち設くるなりとぞ、其れは佛を念ずる身、是れは諸山を友として、浮世を渡る風雅者志す所は異れども心は同じ一蓮托生、彼は遙かの善峰寺、我は此方の十輪寺にと足を向け、大慈の石段を登り盡して、靜かなる寺内に入り、先づ物問はんとて方丈を音訪へば、聲に應じていとも尊氣の御僧出で來たれるにぞ、丁寧に一揖し、某は諸國一見の者にて候が、當寺には業平の御墓所の御座候由承り及び候、又業平に所縁あることいも委しく御物語り候へ」といへば、「さん候、業平に深き所縁のある事は存じ候はねども、墓は此山の背後に御座候、花山法皇の舊跡を御通り候ひて、一際森の茂りたる處に、いと佗びし氣に、只五輪の塔のみ立ちたるが

業平の御墓所にて候が、固より言傳への儀に候へば、さだかには申し上げかたく候、猶又其墓より程遠からぬ所に、同じく業平の鹽竈の舊跡も御座候」と答ふるにぞ、こは難有しと一禮述べ、上の山へと直走りに走せ登りぬ。

既にして山上に達すれば、鬱蒼たる森ありて、四大空に歸せる人の墓標の、そこはかとなく樹てるさま、哀れ深く、實に北邙の夕煙、一片の雲と消えし跡は、色も形もなくなるぞ怨みなると、そゞろに人生の無常を感じぬ。斯くて坂を降れば、如何にも僧の物語りし如き五輪の塔ありさまぞいかにも龜末にて、是ぞ右近衛中將業平朝臣の御墓所なるかと呆るゝばかりなり。而も苔蒸す墓石は風雨に苛まれて、梵字さへも消えて定かならず、却つて是と並びたる出家の墓の「信敎院惠隆和尙靈」と刻まれたるは、文字も鮮やかに手向の樒さへあるに、當の業平の墓邊には、花も無くて只だ落葉の離々と亂れたるを見るのみ、いとも佗びしき景色なり、あゝ御身は阿保親王の第五子にして、淳和天皇の天長年間に生れ兄行平と共に在原の姓を賜はり、長としては和歌の道に優れ、殊に肩目秀麗なりしかば、人皆な見ぬ戀にあこがれたるにわらずや、御身卒りて後茲に一千餘年世は幾變遷ありしといへども、後人悉く御身の歌をたゝへ、また

其風流を愛せざるなく、殊に又能樂にては尤も多く御身の裝をなし、透冠をつけ、綉をあて、狩衣差貫などつけ些かも其當時に違ふまじとぞ勤るなるに、其の御墓前には花一つ手向くる人のなきぞ返す〳〵も口惜しきと、懷古の涙に咽びぬ。折しも木蔭を洩るゝ葉風は瑟々として物淋しく、宛然秋の野分の跡の如し。

予はこゝに昔男の靈魂を吊ひて後、さらばとて墓邊を辭し、其より僧の敎へたる鹽竈の跡を見ばやと、道もなき森の中に踏み入り、叢を掻き分け〳〵進めば、木立の斷えたる所に果して十坪程の大なる穴あり是なん、そのかみ業平朝臣の鹽を燒かせつゝいと優雅たる遊し給ひし處よと思へば嬉しけれど、さしもの遺跡も其風流を繼承する人なかりしため、今はしたゝか荒れ果てて、只だ狐狸の跡を印するのみ、四邊は陰欝なる木下闇にして、月光すら射し入らぬ狀態なれば、さこそ地下の中將殿も怨めしく思召すらめと、今昔の感に堪えざるものあり。歌聖貫之朝臣は、融の大臣の鹽竈の舊跡を見て、「君まさで煙絶えにし鹽竈の浦さびしくも見え渡るかな」と詠せられしが、業平朝臣の鹽竈の跡も亦た此歌の心と同じなるぞ淺猿し。

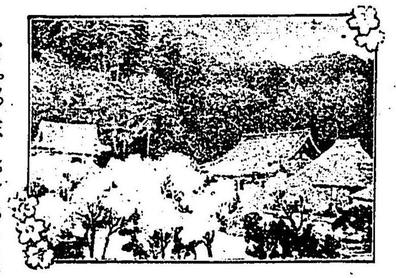
程なく元の方丈の前に戻れば、寺内の櫻の梢を拂ふ風にハラ〳〵と落ち散る風情までが、いとゞ哀れに覺え

き、偖々諸曲の小鹽の本文を想ひ廻らすに「げに〳〵妙なる梢の色、うつろふ陰も大原や」まか「とり〴〵にめぐる盃の天も花にや酔へるらん」とありて、いと華やかなるに、こゝは又餘りに寂しければ、墓こそ正しく此山なれ、和光の影に業平の花に詠じて衆生濟度の姿を顯はしたるは、勝持寺の方なりと曉り、いで其方に急がむと思ひて山門を出でぬ、されど、此處まで來たりし次手なればと、其れより山上の善峰に詣り、境内を一巡して坐禪石、遊龍松等を寫生し、再び元來し道に引返し、前に休みたる茶屋に立ち寄りて、預けたる自轉車を受取るや直ちに車輪の勢を借りて、蕊然に小徑を馳せ、やがて大歳神社の鳥居を潛り抜くれば、眼界頓に開けて、見渡す限り一面の曠野麥圃菜園の渺々たる上を春風ゆるやかに流れ、清香面を掠めて、爽快言はん方なし、而も前面一帶の山脈疊々として相連りたるが中に、花の叢立ちて宛然白雲の山腰を繞るが如きを見出でしかば、さり氣なく人に問ふに、あれこそ勝持寺、又の名を花の寺とも申す御寺にて候へと云ふ。さては同じ名の小鹽山なるべし、花の色の十輪寺のよりも一際立ち勝りたるぞ賴母しいざ疾く花の影踏まんと急げば、程なく小鹽山の麓、大原野神社に來たりけり。

大原野神社は春日明神を祀り、官幣中社と崇め奉る程

ありて、宮居玉垣の莊嚴なる、老杉古松の神寂びたる、又なく尊とく、加茂の神域に比し、又格別の眺めあり、此社の横手より小鹽につゞく通路に入れば、磽确の小徑の到底自轉車を進むべくもあらねば、餘儀なく擔ぎて玉の汗流しつゝ、曳々聲して辿り行く程に、急ぐ程に早くも勝持寺に着きにけり。花の寺にぞ着きにける。

見れば實に花の寺なりける。滿山花に埋れて絢爛の光彩目を奪ふ許り、殊に一本の枝垂櫻の其枝振りの美事なる、宛然花傘を擴げたりとも見るべく、花影雲に似て艶麗名狀すべくもあらず。また其梢より飛花の霏々として零れ落つる樣の却々に面白く、古へ僧月舟が此山の花を眺めて。



（寺持勝）

洛陽盛春在此中　七百餘年古梵宮
莫向花前久留滯　紛々帶雪鬢成翁

と詠じたるも宜なりとこそ覺えたれ。其より本堂へと志して石磴を上れば、不動明王の祠あり、御詠歌の額を掲ぐ。

まゐるより願ひをかけよ小鹽山

き、備々謡曲の小鹽の本文を想ひ廻らすに「げに〳〵妙なる梢の色、うつろふ陰も大原や」また「とり〳〵にめぐる盃の天も花にや酔へるらん」とありて、いと華やかなるに、こゝは又餘りに寂しければ、墓こそ正しく此山なれ、和光の影に業平の花に詠じて衆生濟度の姿を顯はしたるは、勝持寺の方なりと曉り、いで其方に急がむと思ひて山門を出でぬ、されど、此處まで來たりし次手なればと、其れより山上の善峰に詣り、境内を一巡して坐禪石、遊龍松等を寫生し、再び元來し道に引返し、前に休みたる茶屋に立ち寄りて、預けたる自轉車を受取るや直ちに車輪の勢を借りて、毅然に小徑を馳せ、やがて大歳神社の鳥居を潜り抜くれば、眼界頓に開けて、見渡す限り一面の曠野麥圃菜園の渺々たる上を春風ゆるやかに流れ清香面を掠めて、爽快言はん方なし、而も前面一帯の山脈疊々として相連りたるが中に、花の叢立ちて宛然白雲の山腰を繞るが如きを見出でしかば、さり氣なく人に問ふに、われこそ勝持寺、又の名を花の寺とも申す御寺にて候へと云ふ。さては同じ名の小鹽山なるべし、花の色の十輪寺のよりも一際立ち勝りたるぞ頼母しい、いざ疾く花の影踏まんと急げば、程なく小鹽山の麓、大原野神社に來たりけり。

大原野神社は春日明神を祀り、官幣中社と崇め奉る程

ありて、宮居玉垣の莊嚴なる、老杉古松の神寂びたる、又なく尊とく、加茂の神域に比し、又格別の眺めあり。此社の横手より、小鹽につゞく通路に入れば、磽确の小徑の到底自轉車を進むべくもあらねば、餘儀なく擔ぎて玉の汗流しつゝ、曳々聲して辿り行く程に、急ぐ程に早くも勝持寺に着きにけり、花の寺にぞ着きにける。

見れば實に花の寺なりける。滿山花に埋れて、綸爛の光彩目を奪ふ許り、殊に一本の枝垂櫻の其枝振りの美事なる、宛然花傘を擴げたりとも見るべく、花影雲に似て、艶麗名狀すべくもあらず。また其梢より飛花の霏々として零れ落つる樣の却々に面白く、古へ僧月舟が此山の花を眺めて。

（勝持寺）

洛陽盛春在此中　七百餘年古梵宮
莫向花前久留滯　紛々帶雪鬢成翁

と詠じたるも宜なりとこそ覺えたれ。其より本堂へと志して石磴を上れば、不動明王の祠あり、御詠歌の額を掲ぐ。

まゐるより願ひをかけよ小鹽山

岩よりいづる水のれいけむ

さて本堂に上りて見れば、正面には小野道風の筆になれる「勝持寺」の額ありて、藥師如來を安置せり。喜ばしきは左右の梁に掲げたる極彩色の額、圖は正しく大原野の御幸に、在原業平朝臣の供奉したる所なるに、さては能にてなす小鹽山は、最早此山に疑ひなし、わら尊やと思ひて堂を下れば、其筋よりの保護と見えて「修繕費金百圓內務省」「修繕費金二十五圓宮內省」と掲示の札のあるなど、愈々此寺の尋常ならぬを知り得たり。

斯くて再び枝垂櫻の下に戻り、前面を眺むれば、前に過ぎ來し畑道もおぼろげに見るを得、また善峰寺の白堊も指呼の內にあり、尙ほ又離々たる草家の門邊に八重櫻の咲き綻べる景色も愛らしく、而も此邊は人里遠き所とて、雜人蹤の姿も見えねば、心靜かに風景を賞し得らるゝぞ嬉しとも嬉し。さるにても謠曲に、シテ「小鹽の山の小松が原より、煙る霞の遠山櫻」ワキ「里は軒端の家櫻」とある文の善く其眞情を叙したるに服しぬ。予は先年、寶生會にて、野口政吉氏が尉髮小尉の面茶の水衣にて、此能の前段を演じたるを見たるが、其時氏は「煙る霞の遠山櫻」と常座より體を斜めにして、優かに面を使はれたる氣色得も言へぬ妙味ありしよなど想ひ浮べて、獨り興に入りぬ。

なほ此山にて名高きは、昔し西行の櫻を植ゑて歌を詠せしといふ事なり。其櫻は前に記したる枝垂櫻と相對して、名木の跡を留めたれども、哀しいかな、今は只朽木のみ殘り根の邊より一面に笹生ひ茂るぞ遺憾なる。まことに其かみ西行櫻とて時得て榮えたる花も、終には色香消え失せて、殘る朽木となる事は定業とは云ひながら哀れにも又た痛はしきことにこそ。傍らに近頃植ゑたりと覺しき若木の櫻あり、掲示の札を見るに左の文字あり。

西行櫻

一後鳥羽院天皇建久九年二月十四日駿河國大井驛南鍋山麓竹林庵に於て八十四歳にして寂す。

一文治年中當山庵室に現存の自作木像を安置す。

一建久九年より明治三十七年迄七百六十二年となる。

一山深久左右曾心者通登毛住天命者知奴毛加那。

掲示の意といひ、又歌といひ、少し首肯き難き節ありと思へど如何にや、此より十歩程隔てたる花の下に三人ばかり一團となりて、瓢簞の酒を献しつ酬しつ睦び合へる者ありしが、頻りに予を先生と呼びて、一つ献じたき由を云ふ。わな難有き志、否むは却つて無禮なり、一樹の蔭に酒酌み交はすも何ぞの緣なるべければとて、

快く猪口を受くれば、何處ともなく風渡りて花一輪、ヒラ〳〵と手に宿るに、好き下物よと花諸共に舌打ちして飲み干しぬ。此所能狂言なればロクに座り、次第々々に面白うなつた。濱松の音はさゞんざゝと唄ふべきなれど、予は尚ほ行く處ある身なればとて、やがて辭退すれば、先方は田舍人とて情も厚く、某は丹波の者にて候へば何卒一度は訪ひ給へかしとて委しく氏名を告ぐるにぞ、後の思出にもと手帳に書き留めて、名殘惜しき袂を分ちぬ。

折から暮色の漸くに迫りけれど、なほさのみたゆたふに及ばずと、紅うつむ夕霞、かげろふ花の御寺を去りて松尾神社へと向ひぬ。

（其三）松尾神社

『松尾』

……奉納の酒樽……相生松……紅葉の峯……

松尾は京都の西嵐山の峰續きにして、山の姿、神館の景色雨つながら凡ならず、常に實相の聲滿ちて、聞法の便絶ゆる事なく、大堰川の水の音亦た常樂我淨の結緣をなすとかやゝに鎮座ます松尾の明神は

酒造の神として諸國の酒造家の詣するもの多く或る時は又唐土かね金山の麓、楊子の里よりも願ひを掛くる者ありと聞けど、そは未だ詳ならず。まづ鳥居を見れば、「日本第一酒造之神、松尾社、願主京都酒屋」と刻まれたるすらあるに、其側には又河州、江州の釀造家よりの献燈もあり。更に境内に入れば左手に危末なる能舞臺あり、此上にも亦數十の酒樽積み重ねありて、尾州、攝州、京、大阪等國々の願主の札を立てられたるぞ面白き。猶神殿の扉の前には京都酒造組合西部有志者よりとして、菊の御紋を染め抜きたる紫縮緬の納め幕を掛け渡し階段の下には「美盛」「商戰」なんどゝ銘打つたる數多の酒樽あるに、神もさぞな酩酊し給ふらんと思はれて可笑し。況して凡俗の予、見たばかりにて早くも醉心地となり、足元しどろに境内をさぞらひ歩きしが、ふと御手洗の水に心づき、一口頂けば、神氣頓に恢復して五衰の睡忽ちに覺めぬ。

（松尾神社）

神殿の前には直立數百尺にも及ぶべき相生松わり周囲に墻を繞らし、注連を張られたるを見れば、いづれ由緒のあるならん。畔に松の綠の世に秀でたるのみならず。朱の玉垣の外玉の扉の前にも八重櫻の今を盛りと、咲き匂へるあり、また西山一帶に楓樹の峯つゞきなれば、錦織りなす秋としもならば、嘸ぞや美しからましと思はれぬ。實にかの「松尾」の謠曲に

ワキ「昨日は薄き紅葉ばの シテ「今日は濃染の色深き

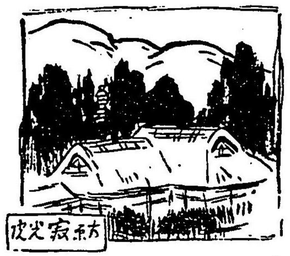
ワキ「西紅の峯つゞき シテ「さながら四方の二人「錦なれども地松の尾の、山は梢の秋ならで、唯時雨のみ年ふるや、霜の後、雪の冬木になるまでも、時しらぬ常盤木のいく久し神松の、落葉ばかりは塵の世に、交はる塵ひ賴もしや。

とある文は、能く此の實景を盡して遺憾なしと謂ふべし。

「松尾」の能は先年金太郎政吉の兩氏が實生の舞臺にて演じたるを見たることあり、もと是れ神事能なれば際立ちたる妙技とてはなかりしも、其の際立たぬ所に兩氏の凡ならざる藝風を認め得てゆかしかりしよなど回想に耽けるうちに、日全く暮れ果てゝ空いと暗くなりしかば、今日は是れ迄なりと、例のピアスに跨り、わが草庵にと駈け戻りぬ。

（其四）寂光院『大原御幸』

……建禮門院大原西陵……閑居の跡……朧の清水……



五月十一日、天氣もいとゞ好し、いざゝらば今日こそは後白河法皇御幸の跡を訪はんとて、午後より大原の奥の寂光院へと志しつ。時しも初夏の日の燦くが如きを物ともせず、例の自轉車を走らして、鳴の河原の東の緣より葵橋に出で、山陽が詩にて名高き山端といふ街を過ぎ、松崎山を横に見て音も高野の川傳ひ、岸の彼方の藪陰に、老鶯の鳴き囀るを聞き流して、野橋幾つとなく渡り過して行く程に、彼方よりかの大原女が薪を頭には載せで荷車にて運搬し來るもの引きも切らず、幾度か前途を遮るさへあるに意地惡くも砂利道なれば自轉車を下りて、恐かしくも此のお荷物を曳摺り〳〵、漸つとの思ひにて八瀬の大橋に來りぬ、行く〳〵眼を上流に放てば、遙かの空に翠微一抹を畫し、次第に迂回し來れる川の岸には竹藪密なるあり、叉疎なるあり、栗園の黃なるも見ゆ、蹴つて下流を眺むれば、川床の一段凹める所ありて奔流此に落

下するさま、頗る壯觀なり、其より坂を上り、漸くにして大原在に入りしかど前に倍したる惡道なれば、愈々捨鉢になり、悠々と樒へたりければ、目指す寂光院に着きたるは、早や夕靄の下りる頃なりき。

（大原女）

さても寂光院に來て見れば、まのあたりなる翠黛の山、綠蘿途を埋めて、實に草深き境なりける、石段を登れば、玉垣の前に標の石ありて「高倉院天皇中宮、建禮門院大原西陵」と刻まれたり。元より歷朝の御陵の如き莊嚴はあらずして、さゝやかに物寂びたる有樣こそ却々に過ぎし昔の壇浦の戰に、大方ならず心を痛め給ひし當時の事の偲ばれぬるぞかし、此御陵に續きて立てるいと物古りたる二棟の草家こそ、即ち寂光院なるが、是ぞ中宮の住み給ひし御跡なるかと、寧ろ驚かるゝばかりなり。大原御幸の謠曲に曰く「住みよかりける柴の扉都の方の音信は間遠に結へるませ垣や、憂きふし繁き竹柱」とある文章に少しも違はざる侘びしさなり。さて其より柴垣に沿ひて境内に入れば、廣くもあらぬ庭ありて、汀の池、汀の櫻の今尙は殘れるは往時を偲べとてか、床

しさ限りなし。同じく御幸の謠に曰く「寂光院の有樣を見わたせば、露むすぶ庭の夏草しげりあひて、青柳糸をみだしつゝ」とある、これも面白けれど、更に又「岸の山吹咲き亂れ、八重たつ雲の絕間より、山時鳥の一聲も、君が御幸を待ち顏なり」の文に至りては今の寂光院の形容して妙と云ふ可し、また池の正面には汀の櫻の今は朽ちて殆んど藍の如くなりたる、青蘿の枝といふ枝の至る所に匍ひまつはりたる、一つとして幽寂びたる趣ならぬはなし。又此櫻の後の岸には山吹の今を盛りと咲き亂れたる、是れも又棄て難き風情あり。なほ奥深く進むに、柴垣の邊には躑躅咲き亂れて燃ゆるが如く、しかも其傍には青苔蒸せる老松ありて、配色の妙を極めたるものをかしく、誠に幽靜無塵の境と謂ふべし。程なく五十餘りの尼公に行き逢ひたれば、此寺の由來を訊ねしに、本堂は聖德太子の二十三歲の時に建てられしものにて、太子が自から刻まれたる地藏菩薩を安置せり、其後人皇八十一代安德天皇の御母建禮門院此處に閑居し、髮を下ろして、壇の浦の役に非業の最後を遂げたる人々の追福をなし給ひしとなり。さるにても源平兩家の合戰の有樣は、思ひやるだに慘憺たる限りなるが、別けて一度海に沈みし門院が範賴義經の爲めに救ひ上げられて、心ならずも都に上り、三十路に充たぬ御身な

るに、無慚や黒髪を剃り落して、此寂光院に入り給ひし時の御心根はいかゞわりけむ、まことに平家は世に時めくこと二十餘年、槿花一朝の夢さむれば、秋の木葉と散り〳〵になりたるぞ哀れなる。平家物語にある門院の歌の

思ひきや深山の奥にすまゐして
雲井の月をよそに見むとは

といふを讀みて、此寂光院に訪づるもの誰か袖を濡らさゞらんや。

大原御幸は能樂の道にては至難のものにて、謠としても容易ならず、諸流いづれも奥許しの分に入れあり、又此の能は人數を多く要するがゆゑ、人少なの流にては演ずる能はず、先つ年梅若の舞臺にて萬三郎が此能を演じたる時も、シテ方は門院の外に阿波内侍、大納言局、まつた御白河法皇まで揃ひ、ワキ方は萬里小路中納言を始めとして供奉の官人其數三四、或は五六にもやと記臆せり。凡て斯く重々しき能は所作少なにて、位をわらはす事を專一とするものなるが、取り別け是れは門院と云ふ所より萬三郎も持前の大音聲を深く秘して低調に謠ひ、且つ能く其品位を保ちたる妙技、今なほ思ひ出さるゝなり。其時の裝束は花帽子、厚板着流しにして珠數を持ちたりと覺えぬ。

能の大原御幸の事を思ひ出つるに付けても、此の儘空しく歸るは口惜しければとて、手帳を擴げて寫生の折から、芳紀十七ばかりの尼公後に立ちて頻りに予が寫生を覗ひ給ふにぞ、何氣なく顧みれば、いと清らなる顔に微笑を含み、「お上手の事よ、さるにても斯る山寺に遙々御入りありしは、奇特の事に候へば、いざ御案内仕つらん」と宣ふものから續いて堂内に入れば、痛く荒れ古びたる内陣の正面に、身の長八尺の地藏菩薩を安置し、其背後の柵には三寸ばかりの地藏の尊體堆積して、其數幾萬といふを知らず、又後白河、安德二帝の御肖像及び建禮門院、阿波内侍の像も安置せられたりき。殊になつかしく感じたるは、京都諸曲家の甲乙は折々此處に來りて謠講をなすものと見え、大原御幸外二三番の謠の番組を記したる額わることなり。此時までも彼是と說明の勞を執れる若き尼公は、肅然として物言ひも嚴かに、いと〳〵崇高き景色なるにぞ、いかなれば、かくうら若き身を浮世離れし山寺に入りて行ひ濟し給ふかと、不思議に思ひしが、歸途里人に問へば當院には三人の尼公あり、老ひたるは隱居せられ、其次の五十餘りなるが、當時の院主にて此人十二の年より當院にて勤行し給ひし由、又若き尼公はお小姓にて此頃來られたるなりとぞ。堂を出づれば、四邊の風物物寂びしく、殊に

此院の周圍を翠巒簇々として環れる景色は、彼の朗詠集にある「紫蓋の嶺嵐疎にして雲七百里の外に收る」といふ句を想起せしむるに足るものあり。

やがて此處を辭して麓の道に出で、此の諸曲に因みある臨の清水といふを尋ねしに、漸くにして、只ある村家の離落につゞく石壘の下に、少しばかりの水溜りある を見出でつゝされど有るか無きかの景色にて、是が彼の「芹生の里の細道、おぼろの清水月ならで、御影や今に殘るらむ」とある、其清水とは思はれぬ程なり。されど此の清水の傍に立てる掲示を見るに

さびしさにやどを立ちいでながむれば
いづこもをなじ秋の夕暮

良遍法師

とありて、千古に響く名歌を詠み出でられたる舊蹟なることそ嬉しけれ。

時しも夜の幕落ちて、四邊既に暗ければ、若皇車輪を走らせたるに、人稀にして凄いと凄まじく、利鎌の如き夕月は岫を離れて前山の松の梢に懸り、遙に聞ゆる牧笛も轉た哀れを添へぬ。

（其五）逢坂山『蟬丸』

……蟬丸神社……關の清水……走井の餅……

十七日、此日は逢坂山に向ひぬ。朝まだきに蝸廬を出でゝ、先づ三條の蹴上を登り、粟田口より山科に出で、山城と近江の境なる追分を過ぎて所も走井の足速かに、行くも歸るも一筋道、知るも知らぬも袖觸れて、別れては復た逢坂の關にありといふなる蟬丸の御社にぞ急ぎける。

蟬丸神社は三社あり、いづれも大津街道に屬す。即ち其一は大谷停車場の傍にある蟬丸神社、其二は其れより二町ばかり下りたる片岡町にある蟬丸神社、其三は又其れより三町程下りたる清水町にある關清水蟬丸神社是れなり。而も三社いづれも大同小異にして、其いづれが本社なるかを辨ふる能はずと聞けり、さはれ予は三社悉く參拜せんと思ふものから、初め大

（關清水蟬丸神社）

谷停車場の傍に蟬丸大明神とある燈籠の立てるを見て卒然石段を駈け上りしが、丘上には只麁末なる華表と拜殿とが在るのみにて、神社としては甚だ見すぼらしきものなりき。されど社頭に立つて展望するときは逢坂山に續きたる亂峰に白雲の來去する景色、さては滿山相競うて青葉を翳せる姿を眺め得て、爽快いはん方なし。尙又崖下には始めて西下する旅客の膽を寒からしむべき大谷代のトンネルあり。又軌道の附近には巖殿倒に垂れ、君子をして其危きを恐れしむるものあり。

抑も我國には其昔三關と稱ふるものありき、一を鈴鹿の關といひ、一を不破の關といひ、一を逢坂の關といふ。不破の關は美濃の大垣にありたるにて、牧田川の左岸に沿ふたる坂路、俗に所謂大木戸坂が其跡なり。人皇四十代天武天皇の御宇に大友皇子の兵を拒ぐ爲めに備へたるものなりとぞ。又鈴鹿の關は、人皇五十八代光孝天皇の御時に、近江より伊勢に通ずる新道を開き給ひし時に設けられしと、然るに獨り逢坂の關のみはいづれの書を見ても起原甚だ不明瞭なり。桓武天皇が始めて都を平安に定め給ひし時に起したるものならむとの說もあり、又文德天皇の天安元年に相坂關を復して新に大石龍華二關を置きたりとの說もありて、未だ審

かならず、それは兎もあれ天武天皇が即位の元年に始めて不破の關を置き、尋いで七年十一月に又も龍田山、大江山の二關を置きしより以來、關なるもの頻りに起るに至れり。下つて後鳥羽の朝に至つては、頭巾篠懸に縞水衣を着たる辨慶が、大汗をかきて勸進帳を讀み上げ、漸々越したりといふ安宅の關もありさるにても逢坂の關の跡はいづこならんか、口碑に依れば、今の大津街道に沿ふたる山の上にありたる由にて、通行の人は手形を出して示したりとの事なるが果して如何にや、學者の垂教を待つ。

蟬丸神社の境内に休みて、圖らずも關の因緣を考ふるに時を移したりしが、折から落葉を掃き掃ふ男ありければ、就いて問ひ試みしに、是亦た蟬丸神社は三つありて、いづれが本社なるかは知らざれど、其知られぬ所が却つて面白きなりと答へき。いざさらば是より跡の二社を尋ねむと思ひて街道を下れば逢坂山巡査駐在所のある邊より勾配急になり、腕車貨車の急轉直下する有樣さも忙がはし氣なり。

〔蟬丸〕の文に曰く〔行人征馬の數々、上り下りの旅衣、袖をしをりて村雨の、振り捨てがたき名殘かな〕と、さても善くぞ書かれたる、寔に此街道は上るかと思へば又下り、下るかと思へば又上るといふ坂路にして、一方には緣

樹蓊鬱たる山岳を控へ、遙かに琵琶湖の青海波を望む風景得もいはれず床し、道幅もさして廣しとにはあらねど、古へは江戸より京、大阪を上下するには、必ず此處を通らざるを得ざる要地なりしといへば、往時はさこそ人通り繁かりけめと、開けぬ當時の驛路の有樣を偲ばしめぬ。

能にては、此邊は蟬丸が今やツキの清貫に別れむとする所にて、舞臺の中を彼方此方と歩み、いとゞ名殘りの惜まるゝより謠も靜まりて其心持を表すなり。故に此處を謠ふ時には、餘り高調子にならぬやう善く心を用ぬ、松の嵐、鶯の聲、驛馬の音をも聞くが如き心地にて謠ふてそよけれ。

さて其より坂を下り切りて、片原町に出でしに、町の左側に御本宮關大明神蟬丸神社と云ふがありける故、急ぎ石段を上り行けば、是れも前の社に異る事なく、庵末なる宮居にして、拜殿も荒るゝに任せ、後山の半腹に喬木の生ひ茂る外に、是れぞと心を留めて見るべきものなく、頗る物足らぬ心地したれば、此社をも跡になし、やがて清水町に至れば山側に添ひたる方に一社あり、近寄りて見れば、「關清水蟬丸神社」といふ石の標立ちて、鳥居などもありけるにぞ、さては傳へ聞く紀貫之が歌の名所ならけると、なつかしく思ひて境内に入れば、拜

殿の前に石窟ありて、中に澱みたる水少しばかりあり、實に是も彼の關の清水と同格にて、案外の感なきを得ず、清廉子が得意の明調子にて「逢坂の關の清水に影みえて、今やひくらむ望月の」と朗々と謠ふを聞く時は、ら堪え難し、關の清水とは如何なるものにやと焦れたりしが、實際を來て見れば名にも似ず、いとも飽氣なき有樣なり。然れども此處は關の清水よりは少しく勝りて、其名を刻みたる石も立ち、石窟の上には楊を植ゑて其風致を助けたるなど、なか〳〵に氣が利きたり。社殿は前の二社と同じく見るべき價値もあらざれど、本社の由緒を記したる制札を見れば、朱雀天皇の御宇に詔を奉じて在來の關の明神に更に蟬丸の靈を合祀せりとあり、想ふに是ぞ本社なるべし。

其れより引返して、大谷の停車場前を過り、先に見落したる走井の舊跡へと志しつ、予、曾て神田の實生會にて松本長氏が逆髮を勤めたる時に「水も走井の影見れば、我ながら淺ましや」と清泉を覗く心持にて舞臺の框の所まで乘り出し、扇を高く上げて凝と下を見込み、ピクリと扇の先を動かしたるを見て、同氏の表情の巧みなるに感服し、實にも實生流の美玉なりと思ふと共に、又其走井なるものを究めたく思ふこと久しかりしが、今ぞ其機を得たる嬉しさよ。

抑も此の走井は街道名うての立場茶屋にて、ひかし京阪へ上下する旅客は足輕始め大名までも必ず此家に立寄りたるものなりとか、店は間口十間の餘あり名物走井の餅を招牌とし、お掛けやす〳〵の聲頻りなるに、立寄りて見れば、結構數寄を凝らせる庭あり、山の上より一條の清流落ち來りて泉水に注ぐもの、是れ走井の名水なりといふ。松本長氏も斯かる所を水鏡とせられたればこそと、彼此思ひ合せて感興湧くが如し店の主人に就いて質せば昔時瀧車の通せざる頃は往來の旅客より走井餅を買はんと忙しく呼ばるゝために、常に店頭には餅の臺を列べ、多くの女中共其前に立つて隨つて千切れば側より其れを竹の皮に包みて旅人に渡したるものなれど、瀧車が出來て以來は殆く寂びれて旅客の押合ふが如き事なしと云ふ。あはれ何事も世につるゝぞ是非なき、予亦た名物といふ名に愛でゝ其の一包を購ひ家土産にしたるが、普通の餡餅と異る事なくして、形は豌豆の如く味亦たゝしからず、西行列車にて下向する人は、大谷驛より約一町も行きし頃、窓を開きて氣を注けられよ、走井の茶屋こそ眼に留るなれ。

（其六）小野隨信院『通小町』

……小町の化粧水……少將の通ひ路……文塚……

二十八日、此日は山科村なる隨信院に往きて小野の舊跡を弔はんと、丸太町なる寓居を立出で、鴨の川瀬も變る名の下白河を打ち渡り、粟田口、日向岡を過ぎ、仕置場の跡と聞く邊も後に見て、路傍の崖側に殊勝らしくも皷子花の花の匍ひ纏はれるさまを見て暫し歩を止め、さて急ぐ程に早くも山科の村落に入り、小野といふ地に在る眞言宗の本山隨信院にぞ辿り着きにける、寺内に入りて先づ堂宇を見るに、僻陬に似ず規模の宏壯なるには案外の感をなせり。予は例の臆面もなくッカ〳〵と方丈の土間に入りて案内を乞へば、雛僧出で來りて「何方よりのお入りぞ」と訊ぬるにぞ、某は諸國一見の者にて候が、此御寺には小町の化粧水、少將の通ひ路等有之由若し御存

し候へば委しく御物語候へ」といへば、雛僧は暫らくお待ち候へとて、予が名刺を持ちて奥に行きたりしが、やがて又來りて、此方へと招ずる儘に跡に從ひて行けば、只ある一室に案内して、茶菓をさへ出だされ、いと懇ろの接待振なり。予も是迄多くの寺を訪ひたれども、斯の如き待遇を受くるは始めてなれば、内心安からず思もひ居たるに、待つ間程なく袈裟の折目正しき御僧、足音静かに出で來給ひて、丁寧に一禮せらるゝにぞ、初對面の挨拶を述べ、來意を告ぐれば「よくこそ遠路を來たまひけれ」とて、いと親切に物語られ、其より話しは小野の事より端なく文學談に入り、果ては近松、沙翁にまでも及びたり、わゝ此僧を誰とかなす、早稲田專門學校の出身、玉島實雅と云ふ人にして、予が知人平尾不孤氏の親友なりき。故に一見舊知の如く話が合ひて後には、君、今日は悠くり遊んでいつて呉れ給へとまで碎けたまへり。やがて玉島氏は「いざ御案内仕らん」とて、坐を起たれけるにぞ、續いて予は供に立ちたる二名の雛僧と共に打ち連れて方丈を出で、先づ第一に小町の化粧水へと向ひぬ。

茲に一言す。元來謠曲中には根無し事をありし事の如く作り構へたるもの多くして、關寺小町、卒都婆小町、鸚鵡小町、草紙洗小町等いづれも皆架空の事ならざるな

し、彼の「葵の上」が源氏物語より出で、其又源氏も作り物語なるが如く、此等も亦た後人の作意に出でたること明らけし。此の隨信院に關係ある通小町とても其の如く、原作者は歌論義と云ふ物語より取りたるものゝ由なるが、其れが世の人の愛に觸て、遂には小町の化粧水、少將の通ひ路、文塚等の如き名所をさへ作り出すに至りたるにても、もと是れ想像上の產物なりとは知れど、さるにても斯かる名を殘せし筆の力を羨ふの餘り、假しや事實ならずとも、其れぞと名指さるゝ邊りを探らむと思ふものから、かくは隨信院にまでも歩みを運びたるなれ。讀む人予を以て小野の化粧水、少將の通ひ路を眞の事と思ひて駈け廻るはどの愚人と嗤ふ勿れ。さても玉島氏は先に立ちて寺の傍の竹藪の中に分け入るにぞ、予と雛僧とは其跡に從ひて、同じく蟻子多き藪の中に進擊せり。見れば此處は方幾町に亘る大竹林にして彼の嵯峨にある野宮の舊跡と同一輩なり。傳へ言ふ、此竹藪の中こそ古小野の邸宅にてありけれど、何樣其の風情なきにしもあらず。玉島氏もしか認むる由斷言せられき。漸くにして化粧水に達したりしが實にも是は古井戸なり。されども尋常の古井戸にはあらで、清水常に湧き出づるがゆゑ、里人は皮膚病に効ありとの迷信からなり〳〵來りて汲み去り行くとぞ。美人小野は常

に此水にて化粧したりといはるれど、四邊は簇々たる竹藪をもて繞まれ、その井の緣には一本の綠樹の佗びし氣に生ひ立ち、赤き實を結べるさまもいぢらしゝ。此水其古は美人の凝脂を洗ひて名あり。さるに今は只だ笹の枯葉を浮べて月も影を宿さず徒らに舊苔の鬚を洗ふのみ、水若し心あらば果して如何の感あらむ。唐の白樂天は楊貴妃が浴せし溫泉を其作る所の長恨歌に謠ひて、「春寒賜浴華淸池、溫泉水滑洗凝脂、侍兒扶起嬌無力」といへり。其水今有りや無しや知ずといへども、我が花の小町の化粧水は唯だ名のみ留めて終に長へに沒し去られむとす。吁。

名水の邊に立ちて、頻りに古を思ひ廻らせば、萬感交々至るにぞ、少らく去りもやらず見てありしが、玉島氏のいざとて促さるゝに後に從ひて同じく藪の中を分け行けば、蟬子はすはや善き敵御參なれとて襲擊愈急なり。省みれば御僧三人と予との影法師が森々たる藪の中を走せめぐるさまは正に是れ一幅の活畫圖の觀あり。やがて藪を離れて街道に出でし折氏は予を顧みて此處より西南に當り民家ある地ありそこより西に通ずる路こそ少將の通ひ路なれ、古は本望不成の道として人の往還を絕ちたりといへど、今は其事なしと言はるるに見れば如何にも、街道の向側なる藪と畑との間に

畦路あり。而も其の折曲りたる畦路の處々に大小の榧の木が或は二三間おき、或は半町おき、或は一町おきに立てるを見出でつ、是れ四位の少將が深草より小野の在所に通ふ時に目標の爲めに路の左右に植ゑ付けたるなりといふ。かくして九十九夜を小町の許に根よく通ひ詰めたりとは、さても執念き戀なるかな。

通小町の能は、ワキが僧、ツレが小町にて少將はシテに當るなり。此シテは諸流とも大差なく、例の黑頭を戴き、瘦男の面をつけ、鬚斗目に水衣の着流しにて、衣を擔ぎて出でゝ橋掛りに止り「いやお僧戒さづけ給はゝ恨み申すべし」と、始めより恨みを含むものにて、何とやらむ物凄き能なり。イロへの次に、シテ「あら暗の夜や、女上夕暮は、一かたならぬ、おもひかな」の邊は、少將が通ひたる所を演ずるなるが、猶も先に行きては「かやうに心を盡し〳〵て榊のかず〳〵よみたれば」と演者の少將は指を折りて數へる形をなし、やがて「九十九夜なり今は一夜よ、うれしやとて、待つ日になりぬ、急いで行かむ」の邊を思ひ浮べて、今此の路傍の榧の木を眺むる時は、戀に憧憬れし古人の面影の幻となりて眼

（通少將）

に映るを覺えぬ。もと此所は四面山を以て圍まれたる地にして、曠漠たる田圃の上を蜿々たる一條の鐵路走りて、山科の停車場に入るあたり、一道の小川あり、野橋之に掛りて、水車の緩々廻るさまの面白く、また陽炎の立昇る下に蓮華の花の美しき、さては畦路を飾る豌豆の花の殊勝らしきも見えて、實にも晩春の眺を擅にせり。京都の雅人は眞の風景は嵯峨に非ずして宇治にあり」と、言へるが、まことに此處は山城國宇治郡山科村字小野と稱する地なり。通小町を諸ふ人は少將が榧の木を立てゝ通ひたる執念を思ふと同時に、又此美景をも忘るゝ勿れ。

玉島氏は化粧水通路の案内を畢へて後いざ是より文塚に詣らんとて、寺院の後の森の中に伴はれぬ、

やがて歩を止めて見れば、亭々として天を衝くの概ある松樹の一本あり、是れこそ小町があなたこなたの男より送り來れる數々の玉章を塡めて、其跡に松を植えたるなりといふ。傍に五輪の塔の立てるは此の文塚を永遠に守

るが如し、われは此下には男の想ひの埋もれぬるよ、思へば女は五障の罪深きものよとつくづくと感じぬ、寺院の後は牛額山と呼ぶ高地にして、風景閑雅翠綠堂宇を繞りて、いとすがすがしさるにても此淨域に行ひ濟ます玉島氏の身の上こそ幸なれと思はれぬ、程なく本坊に歸りて後、氏は予を導いて何吳と示されぬ、見るに流石は九條家の寺とて美麗限りなく、狩野の描きたる極彩色の襖を始めとし、舞樂の圖の衝立もあり、擬ふ方なく又平の畵と思はるゝもあり、小町が雨と降り來る文を以て張り拔きたる地藏もあり、是等皆な當寺の逸品と稱す可し。

斯くて玉島氏とは堅く再會を約して、名殘の袖を振り拂ひ、山門を出でゝ例の自轉車を一二町も走らすれば、所は宇治の名所とて其處此處に茶摘女の佇めるあり、又彼の榧の木蔭を里歌うたふて脊子の通ひ行くあり、あら面白の眺めやと、見返り〳〵過ぎ行けば、いつかは廻る京の道、わが草庵にぞ歸り着きにける。

（其七）加茂神社『旨波』

……御手洗川……御菩薩池……糺の森……

六月十三日は蒸さるゝが如き暑さなれども、天氣なれば、心を安んじ、例の足早車を驅りて、河原町を一散に走せ過ぐれば早くも出で町橋を右に見たり。是れより先は松原堤にて地平坦なれば車輪意の如く廻りて、壯快限りなく、葵橋、出雲路橋も只一瞥を與へたるのみにて、忽ち上加茂神社

（上加茂神社）

前の御園生橋に着きたりけり。

斯くて直に社前に至れば、雲突くばかりの老杉は神寂びたる境内を圍繞して、翠色宛然烟の如く、芝生の清げなるなど、見るからにハヤ暑さを忘するゝの思ひせられぬ。

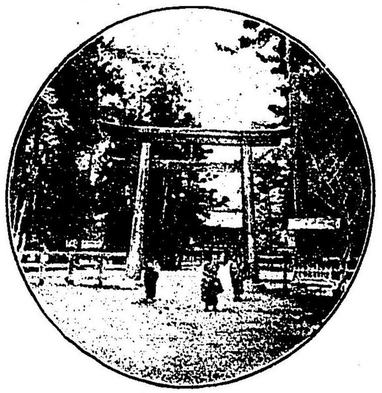
其より丹朱の色濃き一の鳥居を潜り、二の鳥居を入れば、官幣大社の例として皇族の下馬札あり、細殿あり、橋殿あり、御手洗川は其橋殿の下を流れて、淙々の音を絶

たず。予は謠に、「御手洗の聲も涼しき夏陰や、〜〜」とあるを思ひ出しつゝ此川の邊を徘徊すれば、景は愈幽邃なり、地は固より寂光淨土なり、而も己れより外に人影も無し。仰げば本社の樓門は高く、東西の廻廊は古色を帶びて、實にも威風天下に隱れなき別宮雷神の鎭ります宮所と覺えたり。樓門の前には玉の橋あり、渡殿橋あり、同じく下には御手洗川の流れ潺湲たるなど、傳へ聞く蓬萊山も斯くやとばかり思はれて尊し。加茂の能は神事能の中にても別して尊きものにて、また數々演ずるものなり、予は觀世清廉が今の牛込の舞臺を創立せざる前飯田町の舞臺に於て之を演じたるを見て以來、幾度か見たれど、いつも好ましく覺ゆるは此能なり。前段にありては二人の美人が水桶を携へて出で來り、御手洗の水を汲みて神に捧ぐる所、尤も優美なり。此處は水づくしの文を聯ねたるものにて名づけてロンギといふ。「朝日待ち居て汲まうよ」と增の面つけたる美人のシテが舞臺に立ちて悠然として東の空を見込む所に乘てられぬ味あり。殊に「濁なくぞ水むすぶの神の心汲まうよ神の御心汲まうよ」と返しの歌にて正面なる矢の作物の前に膝を突き、桶を前に置きて合掌する邊などは最も趣味深く、名人をして演ぜしむれば、木彫の能面なりとも、恰かも生くるが如く見えて、一層の妙味を

感ずる所なり。

さて予は御手洗川の流れを渉りて、川中なる納涼臺に上り、少らく涼を容れてありしに、下流に當つて童子の群の水泳するを見出でたれば、予も其方に走りて、水浴を試みしが、水は固より清冽なれば冷味骨に徹して、心地よきまゝ、われ知らず「いづくとか、岩根松がね凌ぎ來る瀧津ながれは白玉の音ある水や貴船川」と謠ひ出でたるも可笑し。而も石白き上を辷る水の調は「きくごとに賴む心ぞ澄みまさるかもの社のみたらしの聲」とある古歌の心にも副ひて、心耳を洗ふ心地せられぬ。暫らくありて陸に上りて先に汗に濡れたる襯衣を絞りて肌に着け、身の邊を調へて蹊路の邊を逍遙するに、境幽に地清ければ心地いとゞ爽かになりて、身は宛ら仙境に遊ぶの感わり。まことに當社は靜粛の淨地なるが上に、森々たる神木の間より叡山の嵐翠を仰ぐの景色亦た頗るよし。予は此の絶景に對して涼味を指まゝにしたる爲めか、頻りに眠氣を催したれば、本社の前なる片岡社の拜殿に仆れてグッスリと寢込みたり。然るに何やら耳の傍にて頻りと片岡大明神樣々々といふ人あるに、フト眼を覺して耳を傾くれば、家内安全、息災延命商賈繁昌、盜難火難水難劍難を救はせ給へと拍手して拜み居るなりき。折角の快眠を妨げられたりと癪に觸

りたれども喧嘩にもならず、起て拜殿を見れば、此片岡社は末社中にても信者多きと見え、額ども數多掛けられたり。しかも其奉納者は多く大阪人也。凡そ京阪に遊びて神社佛閣を廻りし人は知り給ふならむが、額を奉納する人は多く大阪にて京都の人は少なし。是れ京都は節儉を尊び、大阪は派手にて諸方に寄附若くば奉納するを好む風あるが故なり。然れども諺の額に限りて之を奉納する者は必ず京都人也。此社にも何年何月奉納、小諺、誰々、高砂、熊野、誰々と細かに姓名を記したる額あるは床しかりき。



（下加茂神社）

其より樓門を入りて中門に至りしが、千木高知れる宮居のさまも尋常ならず、尙ほ奥深く進みて透廊を過ぐれば本宮あり、權殿あり、若宮社もある由なれども常人は固より許さる可くもあらざれば、只表より伏拜みつゝかくて程なく境内を出で、東の方へと十町許り走せて、御菩薩池の畔に來りぬ。此池は周圍數十

町に亘るといへども、水濁りて蘆生ひ出で盆の如き山三つばかり相連りて其一角を圍めり、池の景色何とやらむ物凄きも道理や、鐵輪の道行にも「夜も糺のかはらぬは、思ひに沈むみぞろ池、生るかひなき憂き身の消えむはぜとや草深き」とある如く、沈鬱の水を湛へたる池沼の畔には夏草時を得て生ひ茂り烏の一羽二羽聲高く叫ぶもわはれなり、想ふに鐵輪の作者は善く此邊の風景を諳んじたるものなるべし。

みぞろ池より一筋の細道に出づれば、四顧たゞ廣漠たる田野にして農夫の彼處此處に集合して、麥の穂を叩くさま中々に忙はしく氣なり。其れより此の野路を行く事十數町にして下加茂に着きぬ。

當社は葵祭の本元にして當日は舞樂の催しあり、祭神は玉依姫にて上加茂の別雷の御母に當るが故、一名御祖神社といふ境内は上加茂に比しては遙かに小なれ

ども神域盡く蓊鬱たる杜の中にありて、老木天を蔽ひ、吹く風の音も神々しく聞ゆ、社地の北を流るゝ瀬見の小川に沿ひて本社の方に行けば、本殿の西にあたりて何を植ゑても枯になるといふ所あり、現に化けかゝりたる木の一二本あるも不思議なり、また社殿の東に糺の井戸あり、清泉地中より湧き出でゝ四時盡くる事なく、清冽舌に甘きも妙といふ可し。此糺の井戸の背後は所謂糺の森にて蔓猶暗し。能にては「御祖の神は糺の森に飛び去り〳〵」と舞臺の上に踞したる天女が立ち上りて幕中に入る事あり。是れ即ち別雷の御母が上加茂より下加茂に歸らせ給ふ所を演ずるものなり。雲霧を別けて虛空にあがらせ給ひし神の御姿は今拜し奉る由

（加茂神社の朝日影）

なけれど、其入らせ給ひし紀の森は神代ながらに十返りの色を籠めて、尊き神事を偲ばするも畏し。本社の前には橋殿あり、お詣へ通り三間四方の能樂堂あり、毎年五月十五日の葵祭の折には此處にて片山、金剛の兩家が交代にて能を勤むるを例とすとかや。

（其八）北野天滿宮『右近』

……櫻葉の社……一夜松神社……右近の馬場……

六月十七日、連日の霖雨止みて、一天限なく晴れ渡りたれば、今日こそ右近の馬場の舊跡を探らむとて、先づ古書を引出して地理を調べぬ。

右近の能は先年梅若の舞臺にて梅若新太郎が勤めたるを記憶せるが、先づワキの神官出でゝ「今日は右近の馬場の花をながめばやと存じ候」といひて其座に着けば、やがて櫻車の作物出でゝ常座に据ゑらるゝかくて唐織の裝束したる美人三人出で來り、一人は其櫻車の中に入り、餘は車の左右に立ちて春の景色を

（北野天滿宮正門）

謠ひ出づる事甚だ優美なりき。

既に能には斯く歴然と右近と稱するもの傳はれども、實地の右近の馬場は今は無しされど「山州名跡志」其他に依れば、今の北野神社の東南なる一條大宮に右近の馬場のありし事は明かなり「大内裏圖」（桓武天皇が始めて都を平安に遷し給ひし時の圖）を見れば右近の馬場はなけれども、當時の御所（今は監獄署）の東に當りて右近町と稱する所あり。又其後の「中古京師内外地圖」を見るに、是には北野神社の東南に右近の馬場ある事を記しあり。然れども應仁以後の「中昔京師地圖」には最早其形跡を省けり。更に「北野天滿宮緣起」を見るに、天慶三年、太宰府の菅神夢に京都七條の女人文子に告げて曰く、我は京都の右近の馬場に住はんと欲す、努々疑ふ事勿れと、ありければ文子は假りに吾家の側に離をしつらひて神靈を崇めしが、後ち天暦元年に至り、菅神又近江の或る神官に告げて曰く、我北野に一夜に松千本を建つ可し。故に其建つる所に一社を構ふ可しと、是れよりして北野の天滿宮なるものの起り、豐臣秀頼が今の本社を再築し、明治に至りて官幣中社に列せらる。又一夜に松千本生ひたるにより、今も千本通といふものあることを記せり。

考證も大方は屆きたり、いでやまづ北野に詣でんと、中

立賣を眞一文字に走れば、やがて北野の天滿宮、神の御館仰ぎつゝ能の實蹟を洩れなく、探り求めむと、自轉車を茶屋に預け、境内に入るに、神苑いと廣やかなる爲め、一層神威を高からしめて敬虔の念先づ湧くを覺えぬ、鳥居の前には蠟石の献燈あり、更に鳥居を潜れば、氏子の者が献じたる青銅の神馬あり、影向の松あり、其他幾百の献燈は星散羅列して中門に至るまで盡くる事なし。仰げば喬木高く蒼穹を衝くところ雲漠々たり、謠に「たゞ花ゆゑに北野の森にて、言葉をかはせば、みずもわらず、みもせぬ人や花の友」とある如く、當社は界隈に廣き松林のあるを以て誇りとせり、毎月二十五日の緣日には、此林の中に屋臺見世多く駢びて、貴賤の雜鬧一方ならず。其れより中門を入れば、左に御茶所ありて無數の額ども多く掛りたるが中に、まめ男なる鈴木松年翁の松、又道明寺の能の圖など目に付きぬ。

（北野天滿宮神前の梅）

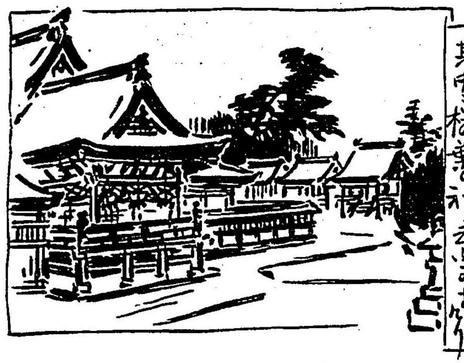
能にてはロンギより以下專ら北野の事を謠ふものにて、右近の馬場の花を見居たるシテワキどもが、そろりそろりと歩みを運び、さて霞みわたるや北野の宮居「御覽せよ時を得て花櫻葉の宮所」とシテの美人が正面に出て開く形あり。されば今も其櫻葉の宮所もわる可し。一夜松といふ社も見たし、朝日寺、紅梅殿、老松、御輿岡も聞かまほし、人もや來たると見廻せど、霖雨の後とて境内寂として人影なく、殆んど取付く術もなきまゝ、只だ徒らに手帳と鉛筆持ちて、ふらり〳〵と徘徊すれば、いつしか西の裏手に出でたり。見れば前は一面の曠野にして、遠くは愛宕山の頂屹然として峙ち、近くは衣笠山盆の如く蟠り、目の下には當社有名の梅林あり、而かも紙屋川は其裾を流れ、四邊の風物頗る雅趣を帶べり。此紙屋川の上流は竹藪相擁して兩岸を抱き、平野橋其間を繫ぎ、橋上には村娘一人、日傘を差して清き流れを打目戍るさま愛らしく、又橋下の淺瀨に立ちて鮎を釣る人二三あり是等一つとして畫中のものならざるはなし。

しばらく此邊の風景に心を奪はれしが、いつまでかくてあるべきにあらざれば、又元の境内に戻りたれども依然として誰に事問ふ術もなし。此上は詮方なし、社務所に就いて問はゝやと思ひしに、幸なる哉、白の御衣に白の袴つけたる神官一人、飄然として歩み來るにぞ、こ

は折好しと一禮述べしに、神官は予が尋ぬる事どもいと懇ろに敎へ給へり。

予は神官の敎により數々の事ども知り得たれば、喜び勇んで境内を見もて歩きけるが、彼の右近の謠の始めに「右近の馬場の木の間より、影も匂ふや朝日寺」とある其朝日寺は今はなし。又ロンギに「花のこぞめの色わけて、紅梅殿や老松の」とあるは、既に謠曲家諸子の知る如く、紅梅殿も老松も皆神の名なり。此紅梅殿其古は七本松にありしが、今は形なし、然れども老松神社といふは今も本殿の前向つて左側の二番目に鎭座ましませり、天滿宮に對しては末社の神なれども、心ある人は參拜を怠る勿れ。本殿の背後に行けば朱塗の神社あり、あまりに美くしければ立寄りて見しに、地主神社といふ額を上げたり。猶此處に十二の末社ありしが、其中に櫻葉の社といふがありき。此櫻葉の神こそ右近の能の本原なればいと〳〵畏し、能にては「こゝに北野の櫻葉の神といふべの空晴れて」と謠ふ件にて、先に記しゝ美人はワキに向ひてヒラキ、其儘前段を終り、又後段の「こゝにきた野の神の宮居に花櫻葉の神とあらはれ」にて增の面に、天冠を戴きたる神體が、長絹の紐を左右と取りながら舞臺に舞ふ姿はいと〳〵華麗なり。人は月の二十五日に只だ天滿宮を拜するのみにて、かゝる由緣ある

末社の神の在すを知らず、本殿を廻れる一の瑞墻を出づれば、松杉蟲として天に冲し、小鳥婆娑として梢をわたり、吹く風亦た枝を鳴らさずして、いと靜かなり。こゝにも末社三社あり、そが中に一夜松神社と稱するものあり。是れなん一夜に松千本生ねたりとの緣起に據つて建てられたる御社にぞありける。



謠曲の文の美なる事は今事新しく言ふまでもなけれど、右近の謠のロンギも又妙文の一つなり。「げに名にしおふ神がきや、北野の春もときめける、神の名所かず〳〵に」より以下緣よりわけそめて、ひとよ松もみえたり、日影の空もわかねさす」等の句に至りては、今人も及ばぬ彩筆と謂ふべし。

かゝりし程に夕陽西に落ちて松の木の間より茜さす景色言ひ知れず美しく、曩に寂しかりし境内も、倏忽として人影見え、本殿を拜するもあり、末社の神に拍手す

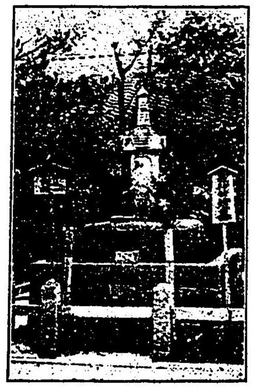
るもわり、また杉林の中に並び立てる石燈籠の間を、眉目妍き乙女が駒下駄の音輕く、神に歩みを運ぶ姿さへいと清げなり。誠に人は神に近づくものはど心の正しきにて、耶蘇の讃美歌「われらをきよめて、神の御住のとこしへのさちに、いたらしめたまへ」とあるをさへ思ひ出さしめぬ。

望みは遂げぬ。いざや罷らむとて、天滿宮を出で、其より當社の御旅所なる下立賣りの御輿岡に行く筈なりしが、疲勞を感じたれば後日に讓りて、直ちに歸途に就き程なく、大宮の一條なる右近の馬場の舊跡と聞く邊を通りて見れば、こゝは今普通の道路にて、四ッ辻のわたり少しく道幅の濶きが目に立のみなりき。かくて京都貯藏銀行大宮出張所一條郵便局なんどの前を疾驅し去りて、往來に群がる小兒を叱りとばしつゝ、黃昏の路をわが本山へと急ぎけり。

（其九）江州義仲寺『巴』『兼平』

……義仲公墳墓……手向の松……芭蕉翁の舊蹟……

……兼平の墓……湖上のながめ……



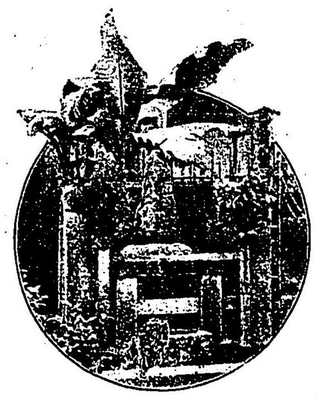
（義仲公墳墓）

六月二十四日の拂曉、空模樣は曇りたれど、後刻には晴れぬべき氣勢の見えたれば、義仲寺に詣でんとて、例のサイクルに跨り、近江の國へと向ひぬ。先づ日の岡より山科をすぎ、程なく逢坂山の坂路に差懸りたるに、轟然一發何者かわりて發砲せし如き凄まじき音しけり。往來の人は立ち止り、裏家の路次よりは人々駈け出でて其音を知らむと欲する樣子なり。予も始めは氣付かざりしが、須臾にして己が自轉車の護謨の破裂せし事を知り、是れはしまつたと思ひしが如何とも詮方なきまゝ近邊の茶屋に入りて車を預け、靴を草鞋に穿き替へて、トボ〳〵と歩み出でたる心の中ゞ哀れなる、悄くや小雨までそぼ降り出しぬ。引返さんかとは思ひたれど、儘よ何ともなれかしと、口の內にて小音に「行けば深山もわさもよい、木曾路の旅に出でうよ」と巴の

次第より始めて、頻りに謠ひ續くるうちに、いつしか逢坂山をも打ち過ぎて、大津の町に入りぬ。昔、浮世又平は此處にて畫を鬻ぎ、一錢二錢の代を得て僅かに夫婦の口を養ひしが、後には青雲の志を得て、末代までも其名を殘しぬ。同じ筆執る身なれば、いつかは予も又平の如くなれかしと、小供らしきことを考へながら歩む程に、やがて馬場といふ所に來り、やうやうにして義仲寺の門前に辿り着きぬ。

山門を入り、まづ傍の朝日堂に憩ひ、堂守の老女に就きて何くれとなく問ひ試みたるに、義仲の墓ある事、芭蕉の舊跡ある事など、具さに語り出でぬ。さて暫くして四邊を見廻しゝに先づ目に留まるものは「義仲公墳墓」の五字を刻みたる石碑にして、其周圍には石の柵をめぐらしあり。又墓前に義仲公手向の松といふものあり、されど今あるは先年當寺が火災に罹りし時、一度燒けたる跡に又植ゑたるものなりといふ。言はでも知るき、今井四郎兼平は激戰の中に主君の首を此處に納め、其の標にとて自ら手向の松を植ゑたるなりとぞ。實にも兼平は類稀なる忠臣にて、武士道の龜鑑にこそ。巴といふ能は二番目物にて修羅能に屬し、あはれにも又勇ましきものなり。此能の後段はシテの巴が小面をかけ、梨子打烏帽子に白鉢巻をなし、長絹、厚板、大口等の

裝束をつけ、長刀を持つて出で來り、「かゝりし處に、みづからかけよせて見奉れば」と床几を離れて正面に出で、脇座の方に義仲の居る心にて、腰を立て、重手は負ひ給ひぬ、乘替に召させ參らせ」と、愁然として義仲の手負ひたる、有樣を見る科あり、かくて又巴はともかくも、涙に咽ぶばかりなり」と、左の手にて泣く形をなして沈む邊殊に能師の技倆を要する所なり。



（芭蕉翁墓）

義仲の墓と並びて芭蕉翁の墓あり。猶芭蕉翁行狀之碑あり。又「旅にやみて夢は枯野をかけまはる、芭蕉翁」と記したる碑あり。一は源氏の大將軍、一は稀世の俳人、文武のたがひはあれど、なみなみならぬ此二人が、奥津城所を同じうしたるは、よく深き宿緣なるべし。老女の談によれば、斯程の名跡も明治二十九年琵琶湖の海嘯の時には、盡く水に浸りて、墓石も流るゝかと見えしが、人ありて舟に棹して此處に來り、辛うじて守り終せ、水退きし後に又善く清めたりといふ。其時の水は一時間に一尺餘も昇りし由に

て、見る〳〵中に床を浸し、襖障子を侵し、終に軒近くなる迄の量に及びけりとなり。

謠廻國記には相應しからねども、義仲の墓と並びたる芭蕉翁の事なれば、少しく記さまく欲す。そも芭蕉翁は俗の名を松尾金作と稱し、後甚七郎といひ、更に又忠左衞門と改稱す。生國は伊賀の阿拜郡にして藤堂家に仕へ、幼にして聰明穎悟なりしが、後遯世の心を起し、俳を學びて古今に秀で、末代までも斯道の鑑と仰がる。始めは江戸に下り深川に住し、髪を剃して天々軒桃青と稱せしが、天和三年の深川の火災に庵室も又灰燼となりければ、飄然として江戸を辭し、駿州に遊び、猶諸國を行脚して再び武藏に歸り、又出でて身を雲水に托せしが、其間此義仲寺に來りて庵を結び、無名庵と號して行ひすましたる事もありき。かくて伊賀より大阪に行き、それより奈良に赴かむとする所にて病にかゝりて歿す、時に元祿七年享年五十一、にして、即ち大阪にて歿せられたるなり。枯尾花芭蕉翁終焉記を見るに、翁は長月陰暦九月の事なり、晦日の夜より床に伏し、夢のさめたるはとて「旅にやみて夢は枯野をかけまはる」と口ずさみける中にも、常に此の寺の尋常ならぬ靜かなるを賞し、我とにかくになるならば必ず彼處に埋め「木曾殿と塚をならべてよ」との言の葉が苟且ならぬ眞となりしか

ば、其如く遺骸を川舟に乘せ、淀よりして伏見に着き、其より此寺に葬りけりとあり。長柄山田上山をかまへて、漣も寺前に寄せ、漕ぎ出る舟も觀念の跡をのこし、櫨路の鹿田家の雁遺骨を湖上の月に照しゝこと、實にもなみ〳〵ならぬ翁なりけり。

もと此寺は天文二十二年といふに近江の國司佐々木高頼が石山寺參詣の歸るさ、こゝに立寄りて義仲の古墳を拜し、源家大將軍の古跡を守る人なくては叶はじとて、やがて一宇を建て食田を寄附し、堂守を召かれしより以來義仲寺と稱し、此寺の住職となるものさへありしが、如何にせん無祿無檀なれば、朝夕の代にも事を缺きて、芭蕉翁の遺跡たる粟津文庫の土藏より翁の形見の品々を取り出して他に典じたる事もありしといふ、予は、此土藏を見しに、二十九年の洪水に洗はれて、表の壁の剝落せしが今尙ほ其儘にて修繕もせずに打棄てありき、去月夫を失ひしといふ、堂守の妻は此等の事を語り出でゝ、老の眼を擦りつゝ、世を恨み身を嘶ちしも實に道理とこそ覺えたれ。

堂守の老女の物語を聞きて後、此寺の本尊ともいふべき朝日堂を拜せしが、正面に觀世音菩薩を飾り、其兩側に義仲公の木像と木曾八幡とを安置したり。此堂と相對して一間四面の萱葺屋根の堂宇あり、軒には翁堂と

いふ額を掲げ、堂内にも正風宗師といふ額ありて、芭蕉翁を祀れり。更に無名庵といふ翁の居室を見しに、十七畳ばかりの廣き座敷に又附屬の小室二つありて、庭内には白藤の棚あり。聞けば此十七畳の座敷は今も俳諧茶花等の團居の爲めに席貸をなすとか。

（義仲堂）

思はず義仲寺にて時を費しゝが小雨も歇みたれば、蒼皇此處を辭して、湖畔を傳ひ行く程に早くも膳所を過ぎて粟津原に着きにけり。

思ひぞ出る壽永の昔朝日將軍義仲は五萬餘騎の御旗勢にて、信濃より打つて出で、破竹の如く攻め上りしが、天運盡きて引く方も渚に寄する粟津野の深田に馬をかけ落し、あへなき最期を遂げ給ひぬ。吁其時の有樣ぞ如何ならむと、追想の念止み難く、奈良漬の香の物にて竹の皮の握飯を噛りつゝ、松の根本にドッカと坐れば、煙波漂渺たる近江の海を取捲く四方の山々は默として物言はず、唯だ頭上の松に颯々の音あるのみ、廣漠たる田面のそこ此處に早乙女の佇めるさまも亦たこよなく寂びたり。

能にては「頃は正月の空なれば雪はむら消に殘るを、だ通路と汀をさして」と遠近の殘雪を眺る形をなし、其より「薄氷の深田にかけこみ」と義仲が誤つて田の中に蹄を踏み込む所を、能師はトントンと二つ荒く足拍子を踏みて、其と利かするが慣ひにて見るからにいと小氣味よきものなり。寔に此邊の殘んの雪の未だ消えざる時の景色は、嘸ぞ冴えかへりけむと思はる。さるにても今井四郎兼平の墓はいづこと人に問へば、石山停車場の前の畦道よりて其の如く田と田との間を疊束なくも辿り行きしに果して兼平の墓ありけり。世には野中の一本杉といふ例あれども、是は又田中の一ツ墓にて、四邊茫々又何物の影もなし。見るに今井四郎兼平といふ五字のみを刻みたる石を立て、周圍も同じく石にて圍みありしが、其には今井善兵衛、今井善次郎等の文字あり。顧ふに兼平の子孫の名なるべし。

（粟津原）

墓の側に一本の灌木あり、其名を辨へ難き故、一葉を撮み取りてポケットに入れ、歸りて後或る生花の師匠に

問ひしに是は梓なる可しといふ。予は始め桂の如くに思ひしが桂の木はさる畦道に生ずるものにわらずと、こは是れ後の事なり。

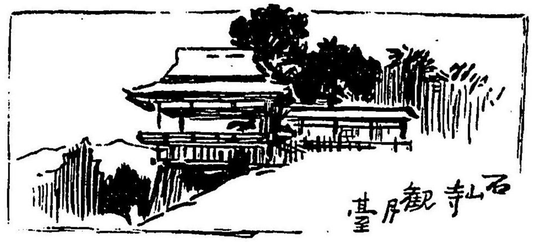
兼平の墓に一礼して元の粟津の松原に立ち戻り次第に一街道を進み行けば、早くも瀬田の唐橋は近くなりぬ。其途中に右石山道、左江戸道といふ石の標わりしが、是等皆古の驛路の有様を偲ばしむるものあり。程なく瀬田の長橋に着きしが、窓にて見たる如く、橋梁の長さ數町に亘り、而も構造の堅牢なる事は素人目にも首肯かれぬ。此處より宇治までは六里わりといふ、長橋は諺にも歌にも最も多く引るゝものにて、彼の「田村」には「瀬田の長橋ふみならし、駒も足なみやいさむらん」と、シテが葛桶に掛けて足拍子を踏む事わり。又古歌には「みつきもの絶えずそなふる東路の、瀬田の長橋おともとゝろに」とあり、此等に依つて見ても古へ此橋の上を往き通ふ人の繁かりしを思ふ可し。

此橋より矢橋に廻らむとせしが、をりふし渡りに舟もなし、一人して行かんには方外の船賃を要する故に斷念して漕船に乗りて漕笛一聲湖上を大津へと向ひたり。漕船の上に一人謠を解する人わりしが、予を見て打ち微笑み「是は又浮世をわたる蒸漕船の吐き出す煙も水馴棹の見馴れぬ人なれど旅の人にてましまさば、諸

共に語らばやと存じ候」と、こゝはるゝとの嬉しきに暫し其人と話してありしが、やがてボーイを捉へて一場の問答を試みぬ。花月「いかにボーイどのに申すべき事の候ふ、見えわたりたる浦山は、皆名所にてぞ候ふらん、御教へ候へ」ボーイ「さん候ふ、皆名所にて候ふ、御尋ね候へ、教へ申し候ふべし」花月「まづ向ひに當つて一きは大きな山の見えて候ふは比叡山候ふか」ボーイ「さん候あれこそ比叡山にて候へ、麓にチョンボリ疎松の見えて候ふこそ、戸津坂本の人家にて候へ」花月「まことに遠くより眺め候へば、箱庭の如く、此の上もなき眺めにて候、又此處彼處に當りて、山々の見えて候は何と申し候ぞ」ボーイ「まづ後なるは石山、是こそ石山觀音にて候へ、其に續きて東に當つて大いなる禿山は田中山、是こそ田中不動にて候へ、又遙かの東にわたつて雲より高きは膽吹山、是は艾の名所なり。此膽吹の前を長蛇の如く匍ひ候ふは百足山、近きは矢橋の浦、前なるは三上山、其より近江富士、比良山、今日は雲がかゝりてさだかには見え難く候、比良山より比叡山、それより膳所の山を過ぐれば又元の石山にて候、是にて一巡仕り候」花月「御物語を聞くにつけ謠の兼平を其儘に思ひ出し候間、某の申す事をもお聞きあれかしと存候」ボーイ「謠の御話の前に申したきは、近頃祇

園町にてはやる近江八景のサノサ節に候」花月「聊爾にてはなく候、お止りあれかしと存候」ボーイ「イヤ聊爾にてはなく候、故人の紀行にもよく俗謠を記したりと申候、まづお聞き候へ

本調子堅い石山れーしのびゝ
て瀬田まで來たら、な膳所にあ
はない、あはづに歸れば堅田の
たより、比良の暮雪とれーいは
しやせぬぞえ、怨みは三井寺唐
崎なんだの夜の雨、サノサゝ」
兼平も亦た修羅能の一つなり。前
段には笑尉の面に尉髮、龔斗目、水
衣の老翁出で來りて、湖上に舟を
棹す、是れ漁翁にてシテなり。乘り
たるは僧にてワキなり。予は曾て
寶生會にて野口政吉氏の兼平を
見たりしが、同氏の圓熟せる技藝は今に忘るゝ能はず、
底强き謠ひ振にて「麓に止觀の海をたゝへ」と謠へば、ワ
キは之を受け須臾にして地となる。地は寶生九郎、松本
金太郎、松本長にて謠ひければ妙音法に叶ひ、かの佛の
國にありと聞く迦陵頻伽の囀るも斯くやと覺えて面
白かりき。政吉氏は「さゞ波の水馴棹」と棹に手をあて「遠



かりし向ひの浦波の」と向方を見込みしが、能く精力加はりたるため、能の面なれど宛然生くるが如き心地せり。其時には近江の海は只想像にのみ止りしが、今は嵐船の上より其實景を心ゆくばかり眺め得て、歡喜感歎時を久うせり。

湖上の風景は先人既に之を言ひ盡せり。嵯峨天皇の詩あり、星巖の詩あり、其の他山陽、茶山、栗山等の妙句擧げて數ふ可からず。故に末世の花月がなまなかに賢振るべきにあらねども、身は甲板の上に在りて、涼風に吹かれ、目に青葉の山の綠を映じ、耳に濺々たる細波の音樂を聞くの快は、何物か之れに若かん。

行く〳〵矢橋の浦を見る時は、人家疎にして稚松點々、宛然繪の如く峻州の興津の海より三保の松原を望むにも似たり。をりしもあれ白帆一つ、順風に趁はれて、山浦を走せ行く風情に至りては、愈々以て畫中のものならざるはなく、景も玆に至りて盡せりと云ふ可し。

かくて嵐船は三たび四たび湖岸に寄港して後、やがて大津に着したれば、上陸して、逢坂山をも過ぎ、追分に來り、前の茶屋に立寄りて預けたる自轉車を受け取りし

も元より損じたることなれば、乘る事能はず、疲れたる足を引摺り〳〵、二町歩みては石に腰掛け、一町歩みては草原に仆れ、又た起ち上つては「本より一騎當千の秘術を顯はし大勢を、粟津の原に追ひ詰めて、磯打つ波のまくり切り……」と謠ひながらやう〳〵戻りしは日も早や暮れて夕月の輝く頃なりき。

（其十）東北院『東北』

……軒端の梅……道長の木像……

六月下旬の某日、予は謠曲に謳はれたる東北院を訪へり。

謠曲の「東北」は二百番中にて、最も目出度きが故に、舊幕の頃の、將軍の御謠初式にも先づ四海波を謠ひ、次に高砂及び此の東北と老松の三つの囃子を謠ふを以て永世不變の吉禮と定めたりとぞ。能にては、前段は小面に唐織つけたる美人あらはれ、ワキ僧と問答ありて、和泉式部たる事を告ぐるにてもなく、告げぬにてもなく「われこそ梅の主よ」と左の袖をあしらひて開き、「夕ぐれなゐの花の蔭に」と右へ廻りて開き、其儘中入する所艶麗限りなきが中に又云ふ可らざる雅致あり。「われこそ梅」とは和泉式部の植ゑ置かせられしと言ひ傳へたる軒端梅の事にて、如何にも老木なり。それより後段に至れば其中入したる女は、天冠を戴き、緋の大口を穿き、紫の長絹腰帶等すべて和泉式部に扮したる粧ひにて出で來り、ワキ僧の經讀む聲に耳を傾け、暫らくありて面を直して「思ひ出たり閻浮の有樣」と、過ぎ去りし昔の事ども語る事あり。

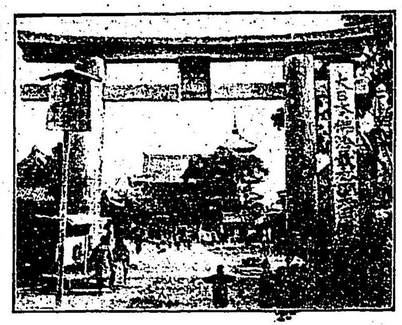
「庭には池水をたゝへつゝ、鳥は宿す池中の樹」といふ其の池は察するに今もある雲井の水の事ならむ。傳説には惡氣邪氣を拂ふ靈水にて、同じく辨財天の威力に因るものなりと。斯くの如く謠曲の本文を東北院と對照する時は、現今の寺こそ其眞跡なれと思ふ人のあらむも計られざれど、こは引緞きの舊蹟にて、さことは此前の所なり。それ時移り物變るは自然の理にて、一條小川の東北院は、高倉院の御宇承安元年に燒失し、其れより京極に移されしが、此時も亦廣大なるものにて、東は川原切西は寺町、南は廣小路北は今出川に亘りけり。此東北院をば謠曲の作者が採りて作りたるものにて、軒端梅も皆轉じて傳はりたるなり。何より確かなるは、今の東北院の記錄に謠曲にまでも作られたり云々とあり。斯くばかりの東北院も元龜二年彼の織田信長が、叡山を燒きたる時に、同じく其の厄を蒙りて灰燼となり、久しく廢寺となり居りしが元祿に至りて始めて今の吉田には假に建てられたるなり。恰かも三度の變遷あり と雖も、本尊辨財天の厨子は變る事なく、金箔の莊嚴は慥かに一願の値あり。又上東門院の御父藤原道長の木像も辨財天と共に安置せられたり是は今の近衛公爵家の先祖なり。

予は寺僧の案内にて、彼を見此を看るにつけ懷古の情に堪へざるものあり、猶も導かれて庭内を此處彼處と歩む中に、賴山陽自筆の碑文なる覩山松本君墓といふを認めぬ。少らく立ちて碑文を讀むに其人は醫師なりきと察せらる。猶は有栖川宮家の醫師たりし森田蕉窓氏の墓もありき。既にして辭して家路に急げば山氣模糊として群雀塒にいそがはしく遠寺の鐘の音陰に籠りて濕を帶びぬ。

（其十一）大阪四天王寺『觀法師』

……石の華表……五重塔……七不思議……大梵鐘……

……龜井の水……



（四天王寺）

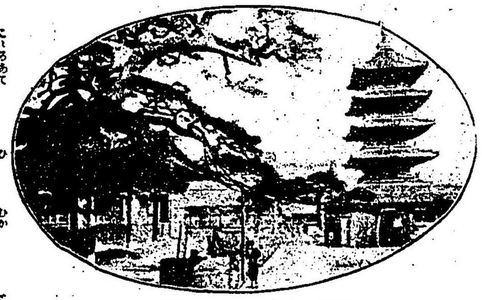
七月六日、大阪市南區なる四天王寺に詣づ。關西線の天王寺驛を出でゝ荒涼たる部部野を一瞥の中に走せ過ぎ、二三町行けば人家櫛比して街路四通せる所に出づ。此邊西南を天王寺大通一丁目と稱し、北を天王寺椎寺町といふ。東は即ち天王寺にして佛法最初の石の鳥居は西方極樂に向ひて千古其容を改めず。

予は第五回博覽會見物の際に此寺に來り、案内者まで儆ひて隈なく拜み廻りしが、例の滊車の時間の爲めに行手を急ぎて石の華表を失念したりき。然れども、たゞ願望滿ちて正門に來りぬ。佛法最初の靈地はこゝぞ、あら尊の御寺やと徐ろに華表を見上ぐれば、中央に銅の額かゝり「釋迦如來轉法輪所當極樂土、東門中心」と明かに鑄られたる。是ぞ誠に聖德太子の御親筆にぞありける。又其側には一丈にも餘る立石ありて「大日本佛法最初四天王寺」の十一字を刻めり。

能に「弱法師」と稱するものあり。舟は俊德丸といふもの父に捨てられて盲目となり、天王寺までさまよひ來りしが、ゆくりなくも父高安通俊に會ひ、共に歸國する事を作れり。先づ弱法師の俊德丸は、黑頭に弱法師專用の面をかけ、水衣をつけ杖にて探り〳〵橋掛に來り「佛法最初の天王寺の、石の鳥居こなれや、立ち寄りて拜まん」と、舞臺のシテ柱を石の鳥居としてカチリと杖の先を當つる形をなす。但し此杖の先にて石の鳥居を探り當る所は諸流區々に別れて、大に好能家の目を付くる所なり。

其より案内者を儆ひ、石の鳥居を入れば納骨受付所あり、親鸞聖人舊跡あり、見其堂あり、尊き念佛堂あり、聞くに聖德太子御年四十九歲の時、百日百夜此堂に籠りて

念佛を稱へ、先帝の年忌を勤め給へりとなり。既にして西門を入れば義經の鐘掛松あり、輪藏あり、覗き見るに六角形の走馬燈の如きものあり、是には抽斗幾つとなくありて、經文を納めたり、昔時、佛に厚き人は之を善く廻したるものなれど、今は年經たれば心の軸木も脆かるべし、かまへて動かす事なかれとなり。



（四天王寺鐘掛の松）

弱法師の謠曲には「げにげに日想觀の時節なるべし、盲目なればそなたとばかり、心當なる日に向ひて、東門を拜み南無阿彌陀佛」何東門とは謂なや、こゝは西門石の鳥居よ」「あらおろかや天王寺の、西門を出でゝ極樂の東門に向ふは僻事か」と、弱法師と父の通俊と問答する事あり。今其西門は目前にありて美術とやらの辨なき予等までも、其構造の尋常ならぬを察せらる。實にも此門には三尊の彌陀かゝりぬ。門は西門なれども極樂よりは東門に當るよしにて、謠うたふ人の此門に來て始めてハタと膝を叩く所なりかし。

程なく西重門の中に入りて四邊を見るに、まづ第一に尊きは金堂なり。杵行十間、梁間八間にして、結構の莊嚴は目を驚かすものあり。弱法師のクセにもある如く本尊は如意輪の佛像なり。さて此金堂と相對して五重塔あり、是又當寺に最も由緒深きものなり。某書には此塔の本尊は釋迦佛のやうに記しあれども、予が實際見し時には四天王を安置せられたるなりとて塔を守る人は四天王の像を一々指し示したり。

予はこゝに若干の金を喜捨して此の塔に上りしが是は此邊に隱れもなき大建物にて地を拔こと百三十三尺の高塔なれば、大阪市中は勿論遠くは淡路迄も双眸の裏に集むるを得て、展望頗る廣し。先づ東を見れば河内一圓は手に取る如く、平野の紡績所も遠からず、又舍利寺の白堊は目前に佇みて、呼べば答へんとす。更に東南を見れば茨城、金剛の二山天を摩して雄大の姿を横たへたり、其より次第に眼眸を南に轉ずれば住吉の森あり、次に葬場あり、阿部野あり、更に西に向へば堺は近く淡路島は遙に遠く築港は正面にありて、船の碇泊する景色も明かに見ゆ。神戸は言ふも更なり、築港より右に當つては六甲山の蜿蜒たるあり、まことや能にてはシテが淡路繪島須磨明石、紀の海までも見えたり〳〵と、遙かに遠く見廻はす所あるが、實際を見ると見ざると

は趣味に於て蓋し大なる懸隔あり、又難波の浦の致景の數々南はさこそといふ、波の、住吉の松蔭と、脇正面を角へかけて南の心にて見る形あるが、今此の塔に上りて見れば同じく住吉は南に當れり。其れより、又西北を望めば大阪府廳あり、次第に北に至れば大阪城あり、兩本願寺の御坊あり、遠くは丹波も見え初めぬ。是れて一周したれば、暫らく目を休めて、つら〳〵思ひめぐらすに、當寺は南北朝の時數々兵馬の屯所となり、兩軍爭奪の燒點たりき。その後又織田の軍兵が當寺の西北の地に塞を守りたる事もあり、或は德川家康が目の前にある茶臼山にて幸村に追はれて、散々の體に擊ち惱されたる事もありて、古は劍戟硝煙の修羅道たる觀ありしが、今は物換り星移りて幾歲の春秋を迎へ、雲靜かにして民の竈の賑へるを見るこそ難有けれ。されども茲に一場の物語あり、今より十年前の事なりしが、平野紡績所の職工中にて男女互に相愛するものあり、男は妻子まである身なるに、過世如何なる業報にや女の事を忘れかねて、暫はるまじとぞ誓ひける。女も亦た男の情に絆されて、割なく契り交はしゝが、逆も添はれぬ因緣ゆゑ、未來で夫婦になつてたもと、互に手に手を取り交して、此塔より落ちてけり。をりふし晝の事なりしかば人數多駈け集りたれど、如何とも詮術なくして、女は即死し、

男は虫の息なりしが、是も病院に運ぶまでの間にて息絶えたりとなり。又先年は南區新町邊の或家に下女奉公せし者主人より休暇を得て、此寺に來り五重まで登りて、四方八方の風景を眺めてありしが、如何なる拍子にや、五重より落ちて四重の瓦に帶の後が引懸て、鞦韆の形に吊下りしかば、アレヨ〳〵と寺男の騷ぐを聞きつけ、所の者大勢寄り集つて辛うじて助け卸せしが、餘りに驚怖せし故にや、其女は程なく病死せりといふ。斯の如き事ありしより以來、五重塔の頂上には金網を設けし由にて、今も嚴重に圍まれてありき。また塔内の梯子も今あるは第五回博覽會の時に多くの人の參詣に誤なきやうにと修理したるものにて、其以前は極樂梯子、地獄梯子と兩樣あり、地獄の方は一つ躓けば直ちに墜落するが如き、いと〳〵危きものなりしといふ。猶此塔の軸になりたる柱は頂上より下の邊まで釣しあるに由にて、自から風にも耐へ地震にも動搖がざる工夫なりとはさても古の工匠は善くこそ考へたるものなれ。少時ありて塔を降り、また下より仰ぎ見るに五重の層樓燦然として金碧滿ち、豔然として雲漢に聳ゆるさま實にも天下の偉觀たり、而も屋根の隅々は悉く三面大黑の瓦を以て葺き、屋根裏に雲水の模樣の彫刻あるに於ては、誰か其美に驚かざるものあらむや。弱法師のクセの文に「塔婆の金寶に至るまで、閻浮檀金なるとかや」とある誠に其の如くなり。

其より西重門を見るに、門の周圍に廻廊ありて、延長百五十間に亘り、十一の門を有す。此邊は當寺案内者の眼目とする所にして盛んに附會の說を述べ、言ふ所甚奇怪なり。今茲に其一二を擧げんに「客人御聞き候へ、此廻廊の中には七ッの不思議あり、以て天王寺の七不思議と申し候まづ第一には此の廻廊の中は蜘蛛が巢を喰はず候又斯樣に門ども多く御座候へども、何れも樋の無きは、此處に限りて雨垂の落ちぬ故に候さて第三には蛙が居らず候第四には雀が飛ばずして足を拾ふて歩み候猶又佛法最初の石の鳥居是れを發心門と申候、是れなる二王門の前に石燈籠あり候へども、眞中に只一つより外になく候總じて石燈籠といふものは皆二つ對したるものなるに、眞中に一つを置くとは不思議に候と、辯じ去り辯じ來りて滔々懸河の如し。予は指折りて數へしに未だ一つ足らざれば、コレ案内殿今のは一つ不足せり、六不思議ならずや、如何にや如何にと敦圍けばげに〳〵誤り申したり、不思議一つ殘したらんこそ口惜しけれ、茲に山水四石と申すもの有之候四石とは四の石にて形は眞四角なり、其一つは金堂の前にある此石に候聖德太子は朝毎に此上に坐して如意輪

を拜まれ申候、又あの二王門の前にも同じ形の石あり候が、太子は此上にも坐して遙かに熊野權現を禮拜なされ候、又西門の前の石の上にて極樂を拜み、六時堂の前の石の上にて四天王を拜し、勤行更に怠りなかりしと申候」と、いひて七不思議のいはれを長々と語り聞かせぬ。つら〳〵按ずるに當寺は荒陵山と號し、天台宗の古刹にして、今を距ること一千三百餘年の昔、聖德太子が玉造の岸に一寺を建立し王ひしに始り、推古天皇の元年今の地に移し、爾後天正元和の二回兵燹にかゝり て燒失したるを、寛文四年德川家綱の命により再築の工を起し、爰に全く元の美觀に復し七堂伽藍悉く具り、境内の廣さ東西八町南北六町堂舍の數四十餘宇、ありがたくも亦た尊き靈地よと、左視右眄時を過しけるが、寺男の來りて廻廊の門を閉さむとするを見て、コレハ仕たり、締め出しを喰ひては叶はじと、あたふた二王門を出でゝ、虎の門を入り、獅子の門を横目に見て、猫の門を出でたり。

虎といひ獅子といふも門の軒に其形の彫刻物を取付けわる故に此名あり、見るにいづれも工藝の極致なるが、取別け猫の形尤も勝れたる故案内者に問ひしに、左甚五郎の作にて日光にあるものと對したるなりといふ。猫の門を出づる前に太子堂を拜せしが、こゝには聖

德太子の十六歳の時の像を安置したり、また無常院といふには世界無比の大梵鐘あり、此鐘一たび音を發する時は遠く數里に響くといふ、實にさもあるべし能に「難波の寺の鐘の聲異浦々に響き來て」と、いふ所にて、シテが耳を傾くる形も、此の鐘を見て始めて其眞情を悟るを得たり。時しも暮色迫り來て心急がるゝまゝ、二才堂も鋭の池も好き程に看過し、頻りに歩む中に龜井の水に來れり。此龜井の水といふは地より湧き出づる清泉をば鎖製の大なる龜が吹き出だし居るものにて、井の如く周圍に石を繞らしたり。此水其昔聖德太子の御姿をうつしたるによりて影向の井とも云ふ由後三條院は延久五年二月此寺に行幸わりて、萬代をすめる龜井の水やさは、富の小川の流れなるらむ」と、詠ませられ、其の御歌後拾遺集に載れり。また謠曲の作者は「萬代に澄める龜井の水までも、水上きよき西天

（四天王寺龜井堂）

の、無熱池の池水をうけつぎて」と、書き流して文辭の妙を盡せり。いづれにしても並々ならぬ由緒ある靈水ぞかし。

さて此の龜井の水を去れば直ちに龜井の池あり、此池は六時堂の前にありて池中に放たれたる龜は幾千疋といふ數を知らず、或は嬉々として水に潜るあり、或は石に縋り付きて甲羅を干すもあり。而も佛の擁護を信じてか、人を見ても自若たるは不思議なり。池の上には長さ六間幅四間の石の舞臺あり。毎年二月二十一日には此舞臺の周圍に花を供し、舞樂を行ふ由古は源氏の舞等ありて、帝の御幸もありしとぞ。其より彼岸堂を過ぎ三面大黒天をも拜し、石の釋迦佛の側にある大なる楠をも賞し、猶又梅の古木を見て弱法師の能を思ひ出しつゝ、やう〳〵廻り行けば、水戸の浪士高橋多一郎、同莊左衛門の墓あり。是は父子にて、親の多一郎は正四位を子の莊左衛門は從四位を贈らる。事の次第を尋ぬるに、古は如何なる大罪人たりとも此天王寺に逃げ込む時は、縄打つ事を許さるゝが法にて、此高橋父子も井伊掃部を殺害して後此寺に逃げ入り腹を切り、臓腑を引出し、其の血を以て辭世を認したる由にて、今も其血汐の染りたるものを保存しありとぞ。

（其十二）河内國道明寺

『道明寺』

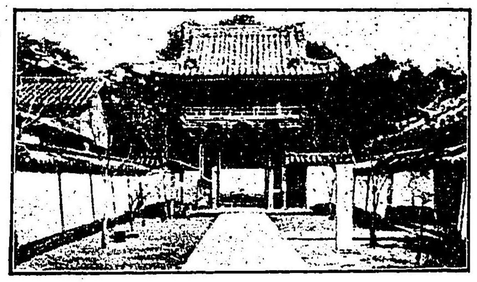
……經塚……木患樹……

（道明寺山門）

天王寺を一巡したる後、天王寺驛より淡町に出でゝ道頓堀の旅宿に投じ、さて明朝は流車にて王寺驛に行き、其より大神神社に詣らんものと思ひ、一睡すれば夏の夜の明けやすく、はや東雲の道頓堀筋ばしやりはしやりと川蒸氣の水を蹴る音ぞ勇ましし。此處の堀には名所がざる、一に中座二に角座三に朝日座四に辨天座、ようい〳〵とナ。ヤア、こりやモウ七時だ、大變々々、オイ、姉さん、急ぎだ〳〵と、さら〳〵〳〵と朝飯を喰ッ込んで。走らす自轉車の急速力、淡町にも駐け付くれば、今ンまの先流車は出た後、あの燈がそれぢや、どりや追ッ付いて只ッた一乘といふ譯にもゆかず、あけらかんと一時間待つ馬鹿臭さ、斯る時には新聞も、論説より小説雜報相塡欄と殘らず讀むこそ不思議なれ。時に構内騷然として人多く徘徊す、何事ならむと二等室より出で て見れば、昨夜八時に柏原王寺間の隧道と隧道との間

にて瀧轢車顛覆し、貨車も五輛ほど破碎したりとのことにて、是がため湊町より發するものは全然柏原に止り、又奈良方面よりの瀧車は、悉く王寺にて停車せざるを得ず。されば旅客は一般に柏原王寺間三里が道程を或は腕車或は徒歩にて通行せざる可からずと聞き、如何はせんと思ひしが、イヤ待て、柏原に何ぞ有るまじきかと、旅行案内を繙けば、あるぞへ〳〵、道明寺々々しかも東京牛込の觀世會にて、清廉が脇能に此能を勤めしことさへ思ひ出でぬ。行くべし〳〵と次の瀧車にて、柏原に來たり、其より數へられたる道を走れば、忽ちにして僻村を離れ、一望限りなき沃野に出でたり。見るに大和川流れて新大和橋といふもの架りぬ、橋を渡りて更に堤防を進めば、道平かにして壯快言ふ可からず、東を見れば、亂山高下して一廓をなし、林麓披けて野家煙を生ずるといふ有樣。行く手に當つて遙かに森一叢の間より白堊の見ゆるこそ道明寺にて、其れに隣りたる天滿宮なれど知るに至つては、勇躍禁ずる能はず、身は鞍上にありながら、宛然天馬空を斬るの思ひあり。寔に此邊は稀なる絶景にして名工の手して畫に書きしならば嘸かしと思はれぬ。

程なく道明寺に着き、先づ門前を見れば、菅公御自作、國寶十一面觀世音といふ標の石立てり。さては此寺の本尊は觀世音なるかと察して門内に入り、本堂を拜し、そこゝ見廻したれども寂寥として人音なければ、引返したるに、傍に京都府華族六條照傳といふ標札ありて、由緒あり氣に見えければ、玄關に立ちて賴む〳〵と音訪ひしに、やがて一人の尼公が瀟洒たる腰衣を着けて出で來れり尼公を見るや否や、予は先づ丁寧に一禮なし、はる〳〵京都より此御寺を慕ひ來りし由を述ぶれば、尼公も來意を諒して、茗を運び、道明寺の緣起を語る事甚だ親切なり。當時聖德太子は尼僧の伽藍を建立せむとし給ひしが、そりから土師八島なる人此事を聞き大に喜び、己が邸宅を喜捨せしかば、直ちに一寺を起して土師寺と稱せしが、後に菅公の因緣よりして道明寺と改めたり。謠にも「是より河内の國土師寺へ參らばやと思ひ候」とあるにても知る可し。此土師といふ人は、野見宿禰の後裔にして、又菅公の祖先なり。抑も當寺は眞言宗にして人皇三十代欽明天皇の御代に草創せられたる古刹なり。當時聖德太子は尼僧の伽藍を建立せむとし給ひしが、そりから土師八島なる人此事を聞き大に喜び、己が邸宅を喜捨せしかば、直ちに一寺を起して土師寺と稱せしが、後に菅公の因緣よりして道明寺と改めたり。謠にも「是より河内の國土師寺へ參らばやと思ひ候」とあるにても知る可し。此土師といふ人は、野見宿禰の後裔にして、又菅公の祖先なり



（道明寺樓門）

とぞ。

由緒既に斯の如くなれば、當初は東西百六十間、南北三百二十間の境内にて南大門、山門、五重塔、金堂、講堂其他何れも美を盡し、寺領をも宛行はれたる由。又菅公は祖先の緣故よりして仕官の餘暇には、當寺に來つて修禪讀經總て佛門の事を研究せられしが、時しも元慶四年の夏の頃、一刀三禮して御丈三尺なる十一面觀世音を彫刻せられたりと。是れぞ今に至るまで當寺に傳はるものにて、予も本堂に於て禮拜せしが、實にも十一面にして光明赫灼たる尊體なるには、自ら頭の垂るゝ思ひあり、斯く道眞は當寺に心を傾くる事專らなりしが、越えて元慶八年御年四十歳に至りし頃、又も國利民福の爲なりとて、一夏九十日の間當寺に於て、大乘經五部を書寫して此經を納ひ可き所やあると尋ねし後講堂の西を堀りしに、其所より一つの石函出でければ、乃ち其石函に經卷を納め

(道明寺境内)

たるに、年經て其經塚より木患樹生ひ出で、枝葉常ならず、一枝に十八粒の房あり、一房に六個の實を結びたりと言ひ傳ふ。此事は謠にも引用せられ、既に道明寺の前段のワキの詞にも「又天神は一切衆生現當二世のため、五部の大乘經を書き供養して埋まれたり、其軸より木患樹の木生ひ出たり」と、あり。是によりて見れば原作者も此邊の由緒を能く調べたるものと覺ゆ。

道明寺の能の前段は多く木患樹の問答なり。されば予が清廉の演じたるを見たる時にも、舞臺に木患樹の作物出でたり。東京には木患樹の木は少なき故、大方其時は他の木を代用したるなるべきが、京都にては東福寺に此木ありといふ、何を云ふにも此能は稀に演ずる者にて、予も清廉のを只一度見たるのみなれば、深くは案じ出でざれど、シテは尉髭に小尉の面にて箒を持ち、ツレは武田宗次郎にて、熨斗目に水衣なりと記臆す。總て是れ宮人の體なるが、シテ其者はまことは白太夫の神なり。後段に至ればシテがシテ柱の手前の橋掛に安坐して笏拍子を打つといふ珍妙なる形わり。まづ例によりて天女出で、樂を舞へば、シテは其間安坐するにて、初段までは天女が舞ふなり。其れより後段のオロシに至ればシテは笏拍子を捨てゝ舞臺に出で、天女に代りて樂を舞ひたりき。後シテの裝束は鼻癇惡尉の面に烏兜

を冠り白垂をつけ、袷狩衣に厚板半切等なりき。予の爲めに此寺の緣起を語られたる尼公は、茶菓を饗するのみならず、更に木患樹の實をば三寶に載せて持ち來り、當寺に來りたる人は皆此實を持ち歸りて珠數になす故御身にも亦た呈す可し。珠數は百八が定數なれども半分の五十四にても然る可しとて丁寧に選り出し給ふたる忝なさ、實に佛門に入ればこそ斯かる優しき心は發るなれ。つらつら尼公を見るに、年は二十の上を二つ三つも越へたるむか豐頰蛾眉にして柔和忍辱の相貌は自ら衆生を濟度するの力ある可しと思はれたり。猶當院の住職は御年十六歲にして京都寺町なる六條家より來られし由なり。十六歲の尼公が院主なれば、予に應對せられし人は或は執事の如きものなる可し。さるにても十六歲の身を以て、花の朝も月の夕も讀經三昧に耽り、浮世を渡る風を外に眺めて行ひすましたまふ心の殊勝さよ、それも御寺に古の壯觀あらばともあれ、足利末世の戰亂に寺產傾き、元龜三年には兵燹に罹りて烏有となり、其

後豐公之を再建せしと雖も、明治六年神佛分離の令によりて殿堂坊舍は取毀たれぬるを、斯くても志厚くして當寺に歸依したるは敬すべし。あはれ、院主の清き御姿を拜したけれ、との念頻りなりしも、深殿風冷かにして、凡夫の身の遂に値遇を得ざりしてそ口惜けれ。

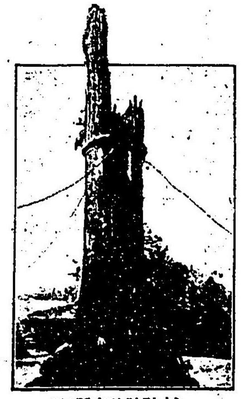
道明寺といふは實は稱呼にのみ止るにて、寺內にある松濤院の外には本堂の存するばかりなり。又道明寺糒は其名高く、今も製して參詣者に給與せらるゝ由、後に聞きたれども、其時は唯謠曲の事蹟にのみ心を傾けしため心付かざりき。姓氏錄を見るに土師氏の祖先に乾飯根といふ人あり。或は之に關係ある事にや。

再び本堂の方を一巡せしが、堂の一隅に三井家の位牌あり。此寺往時は三井家より心を添えられし事もありといふ。斯くて寺を出づれば前には天滿宮あり、境內廣くして能舞臺等もあり。聞けば此舞臺にて京都の役者が道明寺を演じたる事ありと、此の社は古は道明寺天滿宮と稱せしが、神佛分離より以來、道明寺とは全く境を異にせり。天滿宮を出でんとする所に「木患樹之塚」と記せる碑石あり、其奧に一社ありける故入りて見しに、如何にも尼公の教へし如く、春日太神、皇太神、八幡太神を茅葺の小社に合祀し、一廊を作りあれども、頽敗甚だしく農夫が社內に入りて麥を敲きたる跡の狼藉た

るも淺猿し、又眼目とする所の木患樹の塚の石は、頭首所を異にして四方に飛散せるゆゑ、社を出でゝ農夫に問へば、村童が、社内に入りて相撲を取りたるが故なりと、さりとは心無き業かな。大乘經の納せりたる經塚も今は荒れ果てゝ雜草の茸々たるを見るのみ、吁、されども木患樹のみは獨り空しく繁茂して、悠々相顧みる所なきが如し。

（其十三）大神神社『三輪』

……石川……衣懸杉……檜原……



（大神神社衣懸杉）

道明寺も濟みたり、木患樹の塚も見たり、いざ是よりは勇を鼓して櫻井に向はむと蕭然に駈け出せば、一帶の流水宛轉として芳郷を遶り、橋ありて之に架せり。須臾にして至り見れば石川橋といふ。さては聞き及ぶ石川なるべし。絶景なる哉と自轉車を下りて流に臨む事久しかりき。此川は源を南河内郡高向村藏王嶺に發し、葛城金剛の澗水を併せて北流するものにして、當郡第一の大河なり。長さは八里にして道明寺村に至りて大和川に

合す。此川桂川よりは幅狹なれども磧ありて、水勢急ならず、仰げば葛城金剛は勢猛にして衆山自から來朝するの觀あり、見渡せば田園遠く綠を疊んで清輝を發するあり、又清流の潺湲たる處輕舟に棹して、一縷の綸を投ずるあり、此等の景色頗る妙なるに、寧ろ櫻井行を止めて、此邊に清遊を試みむかと思ひしが暇なき身なれば名殘は盡きねど暇申さむ、さらばとて又も走れば、一旦村落に入りしも、忽ちにして大和川に出でたり、此川の綠を只一筋に傳ひ行けば、王寺の停車場に出づる由、豫て敎へられたれば、其れを賴みに益々精力を奮ひたりしが、如何にせむ、時は午を過ぐる事一時なれば、炎熱燬くが如く、目も眩かむばかりなり。幸ひ道の側に清水湧き出でゝ樹蔭涼しき所ありければ、飛び下りて嚙み付く如くに鯨飲し、手拭を浸して火の如き顏を拭ひたる時の心地善さは今に忘られず。

其より大和川の滔々たる激流を眺めつゝ河畔三里の間を駛走して王寺驛に着きしかば、停車場前の料亭に入りて午餉を濟ましやがて王寺を發して櫻井驛に下車せし時は、ハヤ午後の四時なりけり。

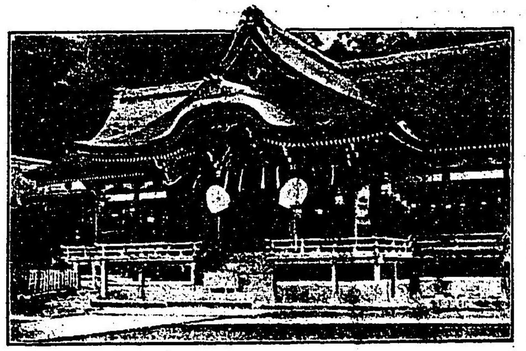
されど夏の日の暮るゝには未だ間合あれば、なほ一ト走りと全速力を出せば忽にして櫻井の町を離れて畦路に出づ見ればハヤ三輪山の孤峰は眼の前に聳てる

にゃ「三諸つく三輪山見ればこもりくの初瀬の檜原おもはゆるかも」と、萬葉集の歌を口吟みながら、行けば程なく大神神社の神橋の前に來りぬ。其より自轉車を下りて境内に入りしが、何より先に目に着きしは、數丈の巨杉の雷に討たれて半ば裂けたるが、仁王立になりて本社の前に屹立せる狀なりき。此杉に注連繩を張りて、「衣懸杉」といふ札を立て、猶玄賓僧都ノ遺跡ナリ、詳細ハ三輪謠曲ニアリ」と小書せられたり。さては是が能にて作物になし謠にても能く謠ふ「杉立てる門」なるかとなつかしさは又一入なりしが、あさはかなる身は忽ち心狂し「不思議やな是なる杉の二本を見れば、有りつる女人に與へつる衣の懸りたるぞや寄りて見れば衣のつまに金色の文字すわれり」と謠ひながら、幾かゝへもある枯れたる杉の周圍を一巡せり。聞けば此杉は嘉永五年七月二十五日午後八時の落雷の爲めに胴中より裂かれたるなりといふ。

三輪の能は明神が假に里の女となりて、玄賓僧都の庵室を音づれ僧都より衣を請ひて歸る所にて前段を終り、後段は明神が出でゝ神樂といふ一種の舞を舞ふのみなり。シテは明神にて、ワキは玄賓僧都なるが杉の木の作物は前後押つ通しに出づるものにて、先に僧都より受けたる衣を其杉の上に懸くれば、やがて僧都は近

寄り見て驚き「不思議やな是なる杉の二本を見れば」と謠ひ出づるなり。斯程の靈木も落雷の爲めにあたら枯木となれるぞ遺憾なる。

此衣懸杉の後なる石段の側にも一の小なる杉ありて、印の杉といふ札を立てられたり。古は此石段の兩側にありしが、今は其一をのみ存せる由。どかくして神殿の前に跪けば、實にも和州第一の神社にして、位は固より官幣大社なれば、只何となく崇敬の念を生ずるも畏し。仰ぎ見れば神扉の前には御鏡二個、唐獅子二個、釣燈籠二個より外になく、他社と比すれば寧ろ簡略なるが如くなれども、其略儀の内に當社の威嚴は備はるなれ。そも當社は人皇十代崇神天皇の御代より創りしにて大己貴命を祀り、大神神社と稱へ奉れり、古は社殿なくして只山に向つて拜をなせしが其後華表樓門拜殿のみ立て、同じく本殿は建てざりき。かくて



（大神神社拜殿）

漸く近年に至り、兎角の論起りしかば始めて本殿を造營したりとぞ。或る書にも、大三輪の祭日には茅の葉を三つ括りて嚴上に置きて祭るを例となしゝが、社殿のなきは口惜しとて一社を造りしに、百千鳥飛び來り踏みこぼちて去りけり。其れより神の誓なりとて、社は造らざりしとあり。また謠曲には「思へば伊勢と三輪の神一體分神の御事、今更何といはくらや」とあり。之が爲に能樂にても三輪は神事能の中にて最も重きものに數へられ、種々の習事あり。殊に金剛流の三輪の神道といふ習は道成寺以上の難事にして、寶生流の葛城の神樂と相匹敵する程のものなり此事は拙著「能樂大觀」の小書の部に記したれば就いて見るべし。

さて本殿の階を下りて當社の背後を見れば三輪山の松杉亭々として虛空に聳え、綠蔭影深き所山氣殊に冷かにして、神々しさ云はん方なし。先づは是にて參拜も滯りなく濟みたれば、神の御前を去りて字明神溝なる緒環塚を一見し元來し方の三輪村に出でたり當村の人々は古來神慮に依りて造酒を業とするといふ。されば淨瑠璃にある三輪杉の酒家も此等の事を種として作れるものなるべし。また素麵は此地の一名物なりと聞く。

「三輪」の能には劈頭第一に「三輪の山本道」もなし、檜原の

奥を尋ねむ」といふシテの謠あり此の能を見し人は知る如く、前段のシテが增の面をかけ、唐織をつけ、橋掛の三の松の所にて此一句を謠ひ出す所頗る幽邃の氣を含み、さも道なき山奥より出で來りたるが如き心地するものなり、されば檜原の奥は如何にしても探り呉れむと、折から來かゝりし里人に其途を問へば、其は此御社の裏の山道を八町ほど上りたる所なるが、險惡き路故案内者なければ迚も登れずといふ。されども見殘して歸るは如何にも殘念なれば、さま〳〵に苦心して終に一人の少年を捉へ、只管に案内を賴めば快く承引きたるのみか、忽ち雷同するもの出で來りて少年の同勢は四人に增加せり。かくて之に力を得て人も通はぬ惡道を傳ひ〳〵て登る程に行く程に、或は荊棘前途を塞ぐ所あり、或は水溜りて沼の如き所あり、或は下り或は上る、羊腸とや言はむ、崎嶇とやいはむ、而も道は八町にあらずして、既に十數町を歩みたりと覺ゆ。されども少年隊は少しもたゆたふ色なく、遊びつ戯むれつ進み行くにぞ、予は之に引かれ〳〵て、たど〳〵しくも歩みを運ぶ途すがら「お三輪はいきせき走り入り、エヽ、此おだまきの切くさつたば

ッかりで道からトント見失うた、もうしお清殿とやら年の頃は二十三四で色白にくつきりとしたよい男はまゐりませなんだか〳〵と、いふ淨瑠璃の妹脊山を絡環の繰返し〳〵思ひ浮べて、猶も進むといへども道遠くして目指す檜原の影も見えぬにあき〳〵して大音を發し、三輪の山本道もなし」と、謠ひ出せば、少年はキョロリとして予の顏を眺むるにぞ、是は米國の大統領が寢しなに謠ふものにして、名づけてウタヒと稱すといへば少年はへゝエと言ひて怪訝顏なり。噂に聞けば、先年片山能樂堂新築の際、京都に來れる觀世清之は當時風邪にかゝれる身をも厭はずして、事を驅りて鞍馬貴船を實見せりといふ。是れ等は尤も感ず可き事ながら、かく十數町の嶮路を冒して檜原の奥を尋ぬる勇氣ありや否や。

既にして屏風の如き急阪に掛りたれば、衆皆曳々聲して、草の根に縋りて攀ぢ登れば、又道は平坦にして茶畑あり、其より行手に當つて幾町にも亘りたると覺しき杉の森あり。あれこそ檜原なれと少年の叫ぶに、予も喜びて駈け出し、やがて近付いて見れば、檜原にはあらで松と杉とを以て一廊をなせる森林なり。木立の中には只一基の石燈籠ありて「檜原社」と刻み、猶ほ下に「岩田村、箸中村」と割書せり。察するに兩村の有志の者が寄附したるなるべし。此處は伊勢太神宮を祀りし跡なるが年經る儘に石燈籠一個となれりとぞ。假令石燈籠一個たりともいかで神の在さぬ事あるべきと、一拜して後木の根に腰打掛くれば、晩雲低く垂れて遠山模糊の裏に包まれ、炊煙一帶麓の村に當つて搖曳く景色又なく寂し。懷の時計を見れば七時にも近き故名殘は盡きねど復た四人の少年に嚮導を賴みて、此度は平らかなる道を選び、迂回して、さきに自轉車を預けたる家に立寄り、四人の少年に厚く禮を述べて、ハンドルに手を掛くるや直ぐと韋駄天の如く走せて櫻井驛に駈け着くれば、幸にも京都方面の終列車に間に合ひぬ。

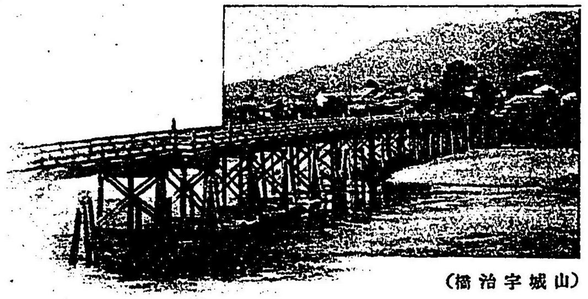
（其十四）宇治平等院

『賴政』

……宇治橋……通圓の茶舗……橋寺……興聖寺……

……扇の芝……鳳凰堂……

七月十九日は珍らしく天氣晴朗なりければ、朝よりくさ〳〵の用意をして平等院へと志しぬ。京都より平等院に向ふには、七條、伏見、桃山、木幡等を經て宇治に至り、其より東南へ七八町の道を歩むべきにて、此間の鐵道線路を七條王寺線と稱す。能にては角帽子に襞斗目を着けたる僧が例の道行と稱して、天雲の、稻荷の社ふしをがみ、なは行末は深草や、木幡の關を今こえて」と二足三足摺足をすると思へば、ハヤ宇治の里に着することになるが、實際行いて見ればさる短時間にては事濟まぬものにて、まづ停車場まで駈付けて、其より各驛を過ぎて宇治の里に着くまでには、約二



（宇治橋）

時間以内を要すべし、山の姿、川の流れ、をちの里橋のけしき、見所多き名所かなとわるる如く、まづ宇治停車場を下りて四五町跡に戻り、宇治橋に着すれば、四邊の風光佳麗にして宇治一郡の秀は全く此所に集められたる如し。欄干に立ちて橋下を覗けば、奔湍岸を洗て、水勢箭よりも急なり。上流を見れば山麓して兩々相擁したる間より激湍怒りて突出する所、大堰川の上流に似たる所あれども、彼は幽邃此は閑雅、又同一の境にあらず、對岸には桐原山、佛德山の諸山脈々として斷續せる景色頗る雄大なり。

宇治橋の袂に狂言にて名高き通圓の本家ありと云ふ事は、豫て聞及ぶ所なれば、第一に此家を訪ねむと思ひて橋を渡り畫せば、果せる哉、四間間口ほどの一茶廛ありて、通圓といふ暖簾掛れるに、先づ立寄りて少許の煎茶を購ひ、偖々店頭を見るに、通常の葉茶屋と異りたる所はなけれども、側に通圓の木像を安置したるは、是ぞ此家にとりて最も貴き商標なる可し。聞くに是れこそ能狂言にて演ずる通圓にて、此家の先祖なりと。又木像は一休の作にて狂言も同じく一休が作りたる由。且つ通圓の先祖は源三位頼政に茶を點てゝ献じたりといへば、實に無慮八百年の老舗なりけり。

通圓の狂言は山脇元清、茂山忠三郎等の演せるを見た

りしが、至極ヒチリたる狂言にて斯道にては智事の中に入れたり。裝束は八丈小縞の裾斗目にへんどつといふものを着て、通圓頭巾に此狂言專用の面(通圓の面と稱す)をつけ、團扇と柄杓とを持ちて葛桶に掛り「去程に入亂れ、我も〳〵と飲み居れば通圓が賴みつる茶碗火入もうち破れば、シテ「是迄と思ひて地「平等院の緣の下、これなる砂のうちにうちはを打しき」なべ〻、種々滑稽の形をする所中々面白きものなり。猶此家は古川通圓と稱し、元祖は一休和尚とも交りたりしが、今は通圓を姓として通圓甚左衛門と稱する由、予が打語りし時には親子と覺しき七十ばかりの老人と四十ばかりの若き男と二人居りしが、尤も著るきは其老人の顏の目の細き工合皺の多き圓顏の遊宛然狂言にて演ずる通圓の顏に生寫しなる事にて、予は心中に一驚を喫したり。息子らしき男の顏はさのみにはあらざりしが、是れも亦年寄れば追々狂言の如き面に變ずならむ。曾て狂言師某予に語りて曰く、小生も一度通圓の店を訪ひ候が、毎度先祖の事を演つて下されて難有く候と禮を申候と、あゝ此茶塵は斯の如くにして座し

て能狂言に新聞に廣告をせらるゝなり。さても果報めでたき通圓なる哉。

通圓の茶塵を辭して半町程裏手に廻れば橋寺あり。此寺は又放生院と稱し、律宗に屬し、地藏尊を以て本尊となし、宇治橋の碑銘あり、開基は宇治橋と同樣孝德天皇の御時なりといへば、由緒いと古き寺なるに當時の有樣は何事ぞ、恰かも素人下宿の如く寺內に書生どもの集合せるは、例の間貸をなすものと察せらる。維新以後の改革にて已ひを得ざれども、歷々たる寺院の斯くまでにして經濟の道を立つるかと思へば、嘆息せざるを得ず。橋寺を去りて三四町も行けば「式內宇治神社」と云ふ大なる石の標立てり。當社は延喜式に擧げられたるやんごとなき神社にて、祭神は菟道稚郎子なりと聞けど、華表前より拜みたるのみにて止め、其より朝日燒といふ燒物を渡世とする家をも見過して只管に川緣の平地を駛走すれば、忽ちにして日本曹洞宗最初の靈場たる興聖寺に着きにけり。此寺は佛德山の半腹にあるが故に、參詣の徒は琴坂といふ約二町の長坂を登らざるべからず。予は賴政の謠にある「名にも似す月こそいづれ朝日山〳〵」と、いふ文より推て、其朝日山を一見したく欲したれば、ともかくも此琴坂を登らんとて、頻りに歩みを運びて支那風の樓門の所まで近寄り、南を見

れば一際高き山に緑の松の翁然として茂りたるがあり。是れこそ豫て慕ひたる朝日山なる可けれと察すると共に、ゆくりなくも頼政の謠の原作者の趣向をも窺ふを得たり。楼門を入れば本堂、開山堂、書院、方丈、侍者寮、賓頭盧等流石に皆荘厳にして、一見目を驚かすものあり。實にも山城有數の伽藍と謂つべきなり。小野の隨信院の如き謠に關係ある寺なりせば、方丈を叩いて熱心に問ひ試むべきなれども、此處はさる縁故もあらざれば、やがて門を出で琴坂を下りしに、此度は先に心付かざりし温泉のある事をも知れり。これは宇治温泉と稱し、硫黄泉にして河畔より湧き出づるものゝ由、あゝ暇あらば一浴せんものをと名殘惜しくも跡に見捨てゝ元來し道を走り、通圓の前より宇治橋を渡りて橋姫の社の前にて暫し憩へり。

（宇治興聖寺）

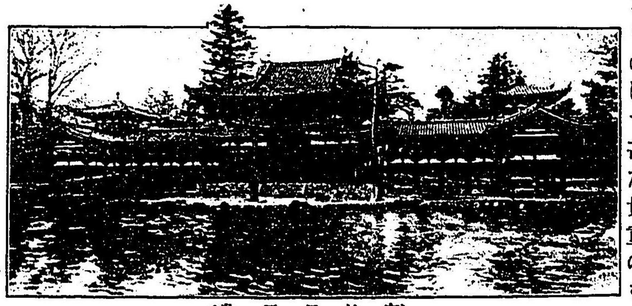
橋姫の社といふは路傍にある小祠にして、住吉社と並び立ちて、玉墻を繞らしあれども、是といふ見所もなく

極めて麁末なるものなり。其より平等院に入れば先づ第一に目に付ものは扇の芝なりけり。是は六坪ばかりの芝生にして小高く土を積み、上に松を一本植えたるのみにて、普通の家の庭園にある芝生と少しも異りたる所なし、然れども治承の昔源三位頼政が宇治川の合戰に打負けて、此上に扇を敷き自害し果てたることを思へば、古名將の最期の有樣が朦朧として眼に浮ぶ心地す。頼政は射術に巧みなりしかども、又和歌にも長せし故に、矢竭きて刀を胸に當てながらも、猶一首を遺したるにて「埋木の、はなさく事もなかりしに、身のなるはては哀れなりけり」の歌は普く謠曲家の知る所なるべし。此處は頼政の能の終りの邊にて「刀を拔きながら」と扇を刀として出し見て、今の辭世を謠ひ、悄然として俯向く所情迫りて哀を催すものなり。あはれ英雄も時に會はされば骸は草原に臥して首は都に梟せらる。蒲はしき限りにこそ。扇の芝より更に進みて當院の裏手の土手の上に上れば、宇治川の急流又も、眼前を遮りて、先きに見たる宇治

神社、朝日燒、興聖寺、桐原山、佛德山、扨ては朝日山の邊、悉く皆指呼のうちにあり。能にては前段は尉の面をかけ、尉髮、翼、斗目、水衣等凡て名も知れぬ老翁の體にて旅附と問答し、「名にも似ず月こそいづれ朝日山、〳〵やまぶきの瀬に影見えて」と舞臺の脇柱の方に向ひて月を見る所あるが、今し其の景色を眼前にするを得て、感興湧くが如し、山吹の瀬といふ所は今は其跡なけれども「山も、川も、おぼろ〳〵として是は、能く實地を穿てり。是より先き、通圓を訪ひたる時、興聖寺より奥に五十町の山道を傳ひたる喜撰ケ嶽には喜撰法師の庵の跡ありと話されたれば、行きて見ばやと思ひしが、時間に制せられて果す能はざりき。

斯くて堤防の上に立ちて能樂を思ひ、治承の合戰を案ずる事約半時の後當院の本堂なる鳳凰堂へと足を運べり。さるに此堂は二三年前より普請中と見えて、足場掛り、葺簀にて覆はれ伐木丁々の音頻りなれば、建築事務所を訪ひて、來由を述べしに、建築主住川村文吉氏の語る所左の如し。

鳳凰堂とは中堂を胴とし、之に左翼右翼あり、又尾樓ありて宛然鳳凰の如き形を作すものにて、總計三百坪程のものなり。もと此鳳凰堂は藤原頼通公が宇治の關白の權勢を以て建築したるものにて、結構の華美は正に藤原時代の美術の中心と稱す可きなり。屋根の上に立つ番の鳳凰とてもどきんと唱へ、唐銅の如き地金に金を置きたるものにて甚だ貴重のものなり。此鳳凰も長く日光に曝露せられたる爲めに少しく剝げたる處あれども、當代にては之を修繕する程の技術なき故に、依然元の儘にて据うる事とせり、又金物、壁畫は勿論木材とても使用に堪ふるものは再用する方針なり。修繕後は天晴日本一の美術品と仰ぐべく、野州の日光よりは一頭地を拔くべき計畫なり。固より國庫支辨にて是迄費しゝ金額は約五萬圓に達すべく又去る三十五年に工事に着手して以來既に足掛五年の日子を費せり。昨今毎日使用する職工は、大工、木挽、鐵材、塗職、石工等にて五十名ばかりなり云々。


（宇治鳳凰堂）

其より事務員に導かれて工場を一覽せしが可笑しき

ば本尊の彌陀如來の坐像の其長一丈ばかりなるが、綿もて隙間もなく覆はれたるに、人間が繃帶せられたると少しも異る事なし。是れ尊體に疵の附くを防ぎたる爲とはいへ、予の如き廻國修行者に取りては蓋し空前の奇觀なりき。其より別院に行き鳳凰を見て後、元來し道に引返し、寶物拜觀をなし、賴政の墓を弔ひ、香華を供へしが、是は又餘りに麁末にて英雄永眠の地とは思はれぬばかりなり。其より再び宇治橋迄走り、道を左方に取り、堤防の上を傳ひ行けば、やがて槇島村といふに來れり。此村は人家疎にして物寂しく、村童獨り活動して岸の淺瀨に嬉々として游泳せるを見るのみ。想ふに賴故の謠に「またあれに一村の里の見えて候は槇の島候か」さん候、槇の島とも申し、又宇治の河島とも申也」とあるは此處の事なるべし。猶昔は此邊に小島が崎と稱するがありしかども、今は其れと名指すべき地なしといふ。是にて宇治の探勝も大略濟みたれば、いざや歸りなんとて京都行の瀧車に搭じぬ。

（其十五）三井寺

『三井寺』

……金堂……鐘の由來……觀音山……

（三井寺金堂）

八月二十八日の朝は、朝暾赫々として快晴を示したれば、勇み喜びて自轉車にうち乘り、日向岡をも過ぎ、山科村に至れば、道は固より坦々たり、加ふるに涼風徐ろに來りて快言ふ可からず、かくて追分と稱する上りの所に差懸りしが、日外「兼平」の謠に關する近江紀行の時に護謨を破裂さして困じたるを思ひ出し、何となく心臆したれば、下車してトボ〳〵と道を拾ひたり。京都近江間にして若し逢坂古關の坂道だになかりせば、約三十分時にて自轉車なら易々と達するを得べきに、返す〴〵も口惜しき限りなり。蟬丸の「謠にある「上り下りの旅衣」といふ文は、當に此街道を

上下する旅人の謂のみならずして、坂に上り下りの頗る多きをも意味するぞかしされば心あらむ人は一度は京都より手前の大谷驛に下車して此道を歩み給ふも一興なるべし。東京の九段には立ン坊あるが如く、此逢坂古關にも其連中多くありて、腕車の跡を押すを業とせり。中には又女が脚絆掛にて竹杖を持ちて、例の東京にて謂ふ差引に立つもあり。曾て記しゝ如く、追分は山城近江の境界にて、此處に石標立てり、見るに「右は京道左は伏見」とあり、又裏には「柳綠花紅」と刻せり。又道知るべの杭立ちて、此處より京都三條大橋まで一里二十八町大津迄三十三町と記せり。故に三條より近江までは僅々二里二十五町に過ぎず。

大谷のトンネル影見えて、今や曳くなる自轉車の車輪の歩みも近づきて、名も走井の茶屋の前杉の木立に鳴きしきる蟬の宮の、謠の名所伏し拜み、關寺の町よそにして、八景見ゆる近江の海やがて暮雪の比良の山嶺の音ひゞく三井寺に着きにけり。三井寺に早やく着きにけり。

抑も三井寺は日本四大寺の一にして、東大興福叡山と共に結界清淨の靈場たり。天安二年僧圓珍の開基にして、天台宗に屬し、彌勒菩薩を安置せり。古は七堂伽藍善盡し、美盡し、僧房八百五十の多きに及びたりしが、今は

世の變遷と共に僅かに五十坊程となれり。予は當寺は曾遊の地とて案内知りたれば、先づ仁王門を入り、金堂に至りて彌勒菩薩を外より拜みたりしが、此遊參詣人は極めて少なく、只だ見る境内は大津第九聯隊の兵士を以て埋められ、左右前へ！と大叫するかと思へば、五百メートル！三百メートル！と下士官が兵に發砲を敎ふる事甚だ嚴なり。

其より金堂の廻廊を一周し見るに堂扉は樂書を擅にし、周圍の羽目は剝落して割れ目を生じ、宛ら野中の古堂の如き光景なれども、此處に御本尊の安置せらると思へば、自から腰屈みて堂前に額付きたり。斯くて此堂の後を見れば阿伽井と云ふものあり。傳へ聞く天智弘文天武の三帝御降誕の砌は此井の水を採りて產湯を召させ給ひしといふ、さる尊き由緒ある井とて、屋根を葺き祠を立てあれども是れすら雨露に曝されたる儘にて、修覆を怠りたるは嘆はし。それ榮枯盛衰は世の習とは言ひながら、此寺の本堂はど物寂びたるはなかるべし。彌勒菩薩とても元は支那の陳の世の南岳大師禪堂の本尊なるをば、用明天皇の御宇我邦に渡來ありて、終に此堂に安置せられたるなるが、佛法末世の今日にては只々痛はしき事の限りなり。

本堂の前に鐘樓ありて中に梵鐘一つ懸りたり。能の時

に出だす作物の鐘は即ち此鐘に擬したるにて、「三井寺」の謡曲は實に之を中心として作れるものなり。此鐘高さ五尺六寸、徑四尺一寸五分、厚四寸二分ありといふ、但し今あるは慶長四年、恰も朝鮮征伐の終りたる其の翌年に、照高院門跡が先の破れたる鐘を模鑄したるなりとぞ。謡曲の文に「まことや此鐘は秀郷とやらんの龍宮より取りて歸りし鐘なれば」とあるにても、其以前の鐘は秀郷が三井寺に納めたる事は確かなる可し。

（三井寺梵鐘）

茲に又いと面白きは「三井寺鐘の由來」といふ一書に載せたる譚なり。お伽噺に類する物語なれば、大人ならぬ少年諸君の爲めに其の梗概を左に書き記さん。

昔俵藤太秀郷といふ武士あり。此人大和國田原を領するより人呼て俵藤太といふ。平將門を亡ぼして鎮守府將軍となりしが、延喜八年の頃、江州勢田の唐橋に怪物出でゝ人を惱ましければ、七ッ過ぎには誰も恐れて通るものなかりけり。かくと聞きたる秀郷は悠ッくき妖怪の振舞よなゝいで物見せて呉れんづと、弓箭をたばさみて橋の上に立ち、偖々見てあれば、尾

は湖水にありて胴は橋上に蟠る大蛇なり。秀郷之を見てシャ何程の事のあるべきぞと、蛇の胴中踏み散らしてゆらり〳〵と過ぎんとす、然るに跡より一人の男追ひ來る故振返りて尋ぬれば、吾は誠は龍神なるが此頃江州三上山の大百足來りて屢々眷族を苦しむるゆえ、人間界より勇者を得て之を亡ぼさんと思ひ、さてこそ蛇に化け唐橋に臥して多くの人の强膽を試めしたるなり。あはれ願くは是れより龍宮に行きて其百足を退し給へと言ひければ、秀郷一議に及ばず、龍宮に行きて襲ひ來る百足に一矢を酬ゐるしが矢は通らざりけり。秀郷思ふやう、傳へ言ふ、人間の唾は百足には熱湯の如しとわれば、此度は矢に唾付て射て呉れんと其如くなしければ、果して百足は仆れたり。龍神大に喜びて數々の寶を贈りける中に、釣鐘あり、こはこれ釋迦如來が說法に用ゐる鐘にして、百八煩惱の眠をさますとありければ、秀郷は其の儘之を三井寺に納めたり。後宇治川の戰の時に、叡山と、三井寺との僧は高倉宮に味方しけるが其時叡山

の衆徒は裏返りしたりし爲め、後に至りて三井寺の僧は叡山に攻め登らんとしたりしが、却つて叡山の衆徒の爲めに先を越されて、戰敗れ、一山悉く燒き拂はれたり。此際鐘は叡山に奪はれて山上に於て撞かれしが、音は出さず三井寺へ行かう〳〵と鳴りしより、荒法師等は大に怒りて千仞の谷底に突き落したるより、さしもの鐘もガン〳〵と音して破れたりと云ふ。

[三井寺]の能は、前段先づ深井の面に唐織を着流し、水晶の珠を手にしたる女が[南無や大慈大悲の觀世音さしも草]と清水の觀世音を念じ、後は其裝束の上に水衣をつけ、笠を冠り、笹を持ちて狂女となりて出で來るにて、ひとゐはれのものなり。此能は實生九郎も得意なれども、梅若萬三郎も大に見る所あり。萬三郎は六尺豐の大兵なれども、巧みに兩足を內輪に拾ひて一の松の所に出で[雪ならば幾たび袖を拂はまし]と謠ひ出だし、ながめの末は湖の鴨照る比叡の山高み]と琵琶湖に映る比叡の山を見上ぐる邊など實に千萬無量の味わり。前にも述べし如く此能は鐘が中心なれば、從つて鐘の段と云ふ者あり。是は狂女が子を思ふ情の次第々々に昂じ來りて鐘樓の鐘を撞く所にて地入相は、シテ[寂滅]地爲樂と誓きて、菩提の道の鐘の聲]と、謠ひ、其より鐘樓の前

に行きて鐘に附きたる綱を持ちて、「月も數添ひて、百八煩惱の眠りを」と鐘を撞く邊優美とやいはん凄愴とやいはん、迚も能見ざる人には這般の興味は語り難し。かく正物の鐘と能の鐘と交々聯想しつゝある間に側にある兵士の一隊は駐足の練習を始めければ、ハッと思て心附き、鐘樓の前を去り、兵士屯集の間を縫ひて、一切經堂、灌頂堂、祖師堂、三層塔其他を經廻しが、いづれも荒凉として雜草殘墻を埋め、此處に廢苑あれば彼處に空漠わり、鳥悲みて風弔す。寔に花も涙を灑ぎ、月も面を蔽ふとは此寺の今の有樣にて、昔を照す影だにもなし。

（觀音山遠望）

もと三井寺は、南谷、北谷、奥の院と三つに別たれ、此金堂の邊は奥の院と稱し來れり。北谷は今は荒刹とてもなく全く其迹を失したり、さて奥の院を過ぎて蓊鬱たる森に入り、石燈を登りて小高き山に達すれば、此處は近江の海を前に控へて眺望絶佳なり。曾て見たる田の上山、近江富士、唐崎の邊まで皆目睫の間に迫り、脚下なる大津の街衢は人家櫛比して殷盛を極め、今更に志賀の都の古事までも思ひ出づるなり。凡そ國々所は多けれども、此大津の如く青山碧水相映じて流車流

船の機關備り、月雪北にいづれも缺くる所なきは又多幸の地と稱すべし。此山上に一宇の觀音堂あり。此風景に面したる事とて參詣者常に多しといふ、往昔は女人は奥の院に詣づる能はず、此處を界としたるものなれば、其爲に觀音堂を設けたる由にて、畢竟女人の爲の佛閣とこそ稱すべけれ。若し予をして忌憚なく言はしむれば此觀音山は三井寺中の最たるものにして、當日遠來の情を慰むるものは一に茲にあり。謠曲中にある「月落ち烏鳴て霜天に滿てすさまじく江村の漁火もほのかに」と云ふクセの文も全く此處に來て始めて其情を味ふを得べく、又蕭々たる雨の夜に、一竿を携へて湖上に舟を泛べなば「蓬窓雨したゝりて馴れし汐路の枕」の邊の景も、善く捉る事を得べしなど、樣々の事ども想ひ起すに至れり。程經て此山を下り大津の町に出たる時には未だ日沒には間のありしかども、歸路を慮りて都の方へと引返せり。

（三井寺より琵琶湖を望む）

（其十六）奈良

……博物館……大佛……二月堂……春日神社……
……三笠山……猿澤の池……

『春日神社』『野守』『大佛供養』『采女』

九月十一日晴れて風なく、秋とはいへど炎威燦くが如き中をば腕車を驅りて七條に向ひ、其より王子行の滝車に乘込み、伏見の里や、宇治の郷、玉水上狛過ぎ行きて、急げば程なく木津の町、見かへるひまもあらばこそ、早くも奈良に着きにけり。

停車場を出づれば、驛亭旅館軒を駢べたるが、店頭に人走り出で頭を下げて頻りに客を招く事、彼の山田停車場前の旅舍が、伊勢詣りの信者を引付くると少しも異る所なし。但し山田よりは旅館の數繁く、其間には名物

（春日本社）

（春日本社樓門）

の奈良墨賣る家もあり、奈良漬を陳列する店もあり、鹿の角細工は又格別にて、別けて女の頭の物多し。奈良に鹿、近江に大津繪、高雄に紅葉餅、伊勢に二見ヶ浦、信州に蕎麥、いづれも所の名物なるが、取別け奈良は鹿先生を崇め奉る地とて、飲食器物皆鹿づくしにて、八ツ橋の煎餅にまで鹿の形を用ひたり。

當所は曾遊の地なれば案内を備ふ要もなく、興福寺を左に見て行くこと數町、やがて南圓堂に入りしが秋の日の暑さ堪へ難ければ、暫し涼を容れんと足を芝生の上に投げ出して、遙かに春日神社の方を見てあれば、森々たる老杉は地を拔くこと萬丈、翠葉は直に天堂を摩するが如く、而かも又近きに當つて博物館あり、洋式の高樓にして輪奐の美は、東京、京都の博物館と其趣を一にせり。此妙なる配合に加ふるに例の神鹿は天下晴れて放し飼なれば、人を見ても恐るゝ色なく、老いたるは眠り、若きは群を作りて無邪氣に所嫌はず走せ廻る有樣、實にも南都の一奇觀と謂ふ可し。獨逸の皇族カール、アントン殿下は京都よりも更に奈良を賞して止まざ

りしとは寔に故ある次第なり。斯くて悠々として心を靜むれば身は宛然仙境に遊ぶが如く、上界天人の快樂も妬ましからず、大臣縉紳の果報も羨しからず、俗界の輩は何が爲めに躁ぎ狂ふぞ。それ睡眠の閨には曉の鐘近く、慾界の彼方には罪業の山聳えて、十八の惡鬼が猛火の薪を燒きて叫び惑ふ。是れをしも悟らざるものは眞に憐むべきなりと思はれけり。

思仙頻りに下界を睥睨してトロ〳〵とすれば、耳の邊にて何やらむ呻く聲の聞ゆるに、驚きて刎ね起きれば、例の鹿先生、其れも年長けて犢の如きが、四五尺にも餘る角を振りて辭義をして予に物を乞ふが如し。さては傍にある包の中の糠煎餅に氣付きたるなるべし、よし〳〵施さむとて包を解きて投げ與ふれば、群鹿は皆飛び來りて麕集し、頭を垂るゝ事前の如し。まことや、春日龍神の謠に、「春日山野邊の朝立つ鹿までも皆ことごとく出で向ひ、膝を折り角をかたぶけ、上人を禮拜する」と云ふ文章は、此の邊の風情より來たりしものならむかげに百聞は一見に如かず、旅行はすべきものなりけり。

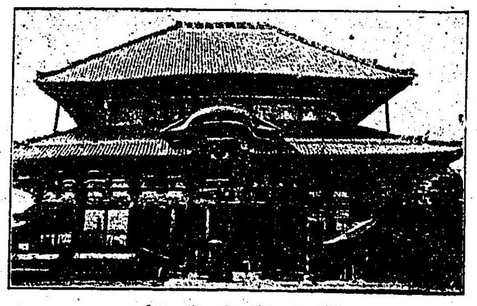
時に俯して考ふれば、今宵は十三夜にて、月の色も嘸なし面白かるべし、三笠の山に登り見んと思ふ心の切なりしにぞ、悠然と構へて日の暮るゝを待ちたりしが、フト

心付きて博物館に入場せり。見るに出品物の配置、其他の構造も京都の三十三間堂の前の博物館を其儘にて、大半は佛像を以て充されたり。觀音、彌勒、韋駄天、緊那羅王、種々の諸佛の其中に只獨り大日如來のみは其形小山の如く、館の中央に端坐し給へり。猶ほ館内隈なく巡見するに、流石舊都の名所とて美術工藝孰れも古代の粹を集めたりと覺しく、就中目に留りしは能の面なり。既に人も知る如く、奈良は能樂の本源にて、春日に四座の太夫控へし事もあれば、假令幾千の年を經るとも其餘音の遺るべきは是自然の道理ならずや。

（奈良帝室博物館）

舞樂の面と共に各種の美術工藝品を陳列する事、京都博物館の如くなるが、品は、彼より優りたるもの多し。侯爵德川國順氏の出品に係る物最も多きが中に當館所藏の生成の面は拔群なり。こは鐵輪の能に用ゐるものにて、若し名手をして此面をかけしめなば嘸かしと、甲斐なき事も思ひ出でられぬ。山姥の面も妙なりしが、又是閑の作の若男の面も面白し。暫くして此處を去りて道を左の方に取り、東大寺の門を入れば、音に聞えし大佛殿は目の前に現れたり。

仰ぎて見れば殿堂高く空に聳え、巍然として一廊を象ると雖も、現今修繕中にて足場掛り、屋根の一部は亞鉛を以て葺かれたり。入場料を納めて中に入れば、五丈三尺の金銅盧舍那佛は端然として亂れず、千古曾て物言はず、左に如意輪觀世音、右に虚空藏菩薩、儼然として控へ給ひ、各自動かざる事泰山の如し。予は三佛に一拜して後事務員に就き、修繕の事ども問ひ試みしに、其人の語る所大要左の如し。



（東大寺大佛殿）

當大佛殿は今より二百年前德川綱吉公の時に公慶上人の勸進に依りて成りたるものなるが、今又修復を要するに至れり。其重なるは柱の根繼ぎ、屋根の手入、堂の歪み等なるが、殊に其歪みは甚だ危險にて、大なる地震にてもありしならば、容易ならざる災に遭はんも知れず、恰かも前の方に八尺程傾きたるあり。此處の掲示にもある如

く修繕費總額は四十七萬圓の豫定にて、内三十三萬五千圓は政府の下賜金と定まり、殘り十三萬五千圓は寄附金募集と云ふ事になり、既に大佛會會長九條道孝公も配慮怠りなかりしが、都合あつて一時見合せ單に政府の下賜にて工を起せり。着手せしは一昨年の夏の頃にて、下賜金も最早十七八萬圓にも及びたるなる可し。修繕期限は八年間なれども下賜金の都合によりては或は十年以上にも亘るならむ云々。

この物語により案外の大工事なるを知るものから、猶ほ能く三佛を拜せんと暫く立ちて復た熟〻〻と眺むれば、大佛は度々の兵火の爲に銅色を呈したれども、後光の十八佛は金色燦爛として人を射るものあり。虚空藏菩薩も是又光明赫奕として、長に衆生を濟度せんとするものゝ如し。

さて偖々此大佛の由來を考ふるに聖武天皇の勅願によりて天平勝寶三年といふに佛像殿堂共に落成せるを抑もの起原とす。後ち治承四年に平重衡之を燒き、右幕下頼朝修覆せり。是れ能にて演ずる大佛供養に關せり。後ち永祿十年松永彈正久秀又之を燒き、爾來百十餘年の間佛體は雨露に曝されたるを、公慶上人大に嘆きて、綱吉公に請ひて勸進の法を以て再建したるなり。されば此大佛の首は前後三回繼ぎ替へられたるものと知る可し。今此の大佛の體格表を記せば左の如し。

總體　五丈三尺五寸、顔の長さ一丈六尺、廣さ九尺五寸、眉五尺四寸五分、目三尺九寸、鼻穴の周圍三尺、口三尺七寸、耳八尺五寸、肩のわたり二丈八尺七寸、胸腹の長さ各一丈八尺

（奈良大佛）

錺料　熟銅七十三萬九千五百六十一斤、錬金一萬四百四十六兩、白蠟一萬千六百十八斤、水銀五萬八千六百二十兩、炭一萬六百五十六石

茲に又公慶上人に就いて一場の物語あり。抑も當寺東大寺は三千五百石の知行寺なるが、其塔頭たる龍松院に公慶上人ぞ在しける。然るに、上人未だうら若き身の悲しさには墨染の身にあるまじき濁世の塵にうち交り、木辻の廓に通ひそめてはなか〳〵に、紫摩黄金の玉の肌、是れぞ生身の菩薩なりと、世の沙汰人の爪彈きも厭はぬまでに通ひけり。さるほどに或る日、木辻よりの歸途に、踏む足元も四途路にて、龍松院へと戻りしがをりから小雨降り

出でゝ吹く風いとゞ身に浸むにぞ、上人は首を縮めて立止り、行手の方を眺めしに、薄一叢生えたる中に、卑廬舍那の濡れ佛世にも淋しく立たせ給へり。上人之を見て、毒と心に感じけん、恐ろしやゝ〳〵と忽ち迷ひの夢覺めて、大發心の兆を現し、静に思ひ廻らせば、己れ寺中の塔頭といはるゝ身をも打ち忘れ、歌舞絲竹の遊興に耽り、酒池肉林の逸樂に流れ、至尊勅願の靈像をしも雨露に曝しゝは誠に此上なき罪業なり、良辨僧正何者ぞ、彼も人なり、我も人なり、假令末世に生るゝとも、やはか大佛殿堂再興の志を仇にはせじと、後ともいはず其時より身を雲水に窶しつゝ、一紙半錢の勸化を請ひて廻りし、寺中の僧は嘲笑ひ、生臭坊主の公慶が、廊の遊びに手支へて、うま〳〵狂言書きたりとて、誰が受け付くる事のあるべきぞと、却つて上人を罵りたり。去れども寺代官後藤某と云ふ者、獨り公慶の雄志に感じて力を添へ、共に江戸に至り、護持院に便りて御免勸化の本意を遂げんとて身心を摧きたり。然れども此處にも亦奈良表より隱密來りて、生臭坊主の狂言お取り用ゐあるにぞ、可惜大發願も何時果まじきやうと申し入れあるに、さんをりもなかりけり。斯かりしほどに、年毎の嘉例として一歳將軍御上覽能の催しあり、其番組の中に「大佛供養」あるにぞ、之を聞きし公慶上人は今の我身に思ひ

合せ、如何にもして御能拜見の願を遂げばやとて、將軍の覺えめでたき護持院の僧正に取り縋り、首尾能く棧敷の上に列りて、己が思ふ所の「大佛供養」をば、今や遲しと待ちたりけり。

[忘れば草の名にきゝて、しのぶやわが身なるらん]のシテの次第の出は、昔も今も變る事なく、笠眼深に冠り、紺地に千鳥模樣の掛直垂白大口に小刀を佩きたるは、惡七兵衛景清の假の姿と知られたり。公慶上人之を見て覺えず双眼に涙を湛へ、仰ぎ見る事さへも叶はざりき、かくて定めの如くシテと母との問答ありて後「いつしか親心悲しむ母の門送り、景清も跡を見かへりて」と、シテは橋掛の一の松にて舞臺の母を見返へれば、母も立ちて見送り、互にシオリ(泣く事)して前段を終り、程なく一聲となりて、頼朝並にワキ立衆共に舞臺に居並びて[世に隱れなき大伽藍佛の供養いそぐなり 頼朝]「抑も是は源頼朝とは我事なり」と名乘り連吟も終れば、後段の景清は、翁烏帽子に狩衣を着け、大口を穿きて、春日の宮人に裝ひて頼朝を狙はんとす。

是れなん建久の昔、右幕下頼朝が大佛の供養に詣づる所にて、景清の爲めには優曇華の花待ち得たる時節なるべし。上人偖々之を見て、今惡七兵衛景清が敵を狙ふ一心に優りこそすれ、劣りはせざる我發願、などか空し

くなすべきやと身を引締めて嘆きしが、思はずアッと聲を揚げて棧敷の上より轉び落ちたり。時も時とて此日は將軍家御上覽の晴れの場所なり、陪覽せし大名達綺羅星の如く居流れ、滿場水を打ちたる如き中なるにぞ、皆人驚きて、われ見よ、出家の泣きに泣きつゝ擽とばかりに棧敷の上より落ちたるぞと彼かに騒く聲喧しかりき。將軍綱吉公此態を御覽として何者なればかく狼藉するぞと氣色ばみ給へば、近侍の面々狼狽して、事の由を糺問せしに、公慶有りし次第を申聞き、大佛殿兵火の後、凡そ百十餘年の久しき年月尊き御佛の雨露に曝されたる事の勿體なさに、あはれ、曩日の有樣に復し奉らんと、殿堂再建の發願を齋しつゝ東下りの甲斐もなく建久の昔を偲ぶ仇し心ゆくりなくも御龕拜見に及び、大佛殿の御供養光りかゞやく春の日のありし事ども思ひやりては、身も世もあられず、斯くの仕合に候と憚りもなく言上せり。將軍綱吉之を聞き、徐に口を開き、さても末世にありがたき大發願の善知識、などか今まで其志を伸ぶる術のなかりしぞ、並居る諸侯を始めとして、高百石に付き金百疋の寄進然るべしとありて、即座に御免勸化の御沙汰に及ばれたり。これを聞きたる公慶は喜びの涙せきあへず、世にも有難く御受けをなし、寶永元年八月十九日には、早や薩摩國より木を伐

り出して、大虹梁二本をば山城木津の河邊より奈良の町へと曳き入れたりされば大佛殿は日ならず其工事に着き、貞享元年五月勅ありて公慶上人を大勸進職に任せられ、越えて元祿六年に大佛像を修治し、同十四年三月將軍綱吉を大檀越とし、寶永二年目出度く殿堂再興の工事を終りたり。

大佛に就て、よしなき長物語を記したるは、讀む人にとりてさこそ憂たてき事なるべけれ。されば此より元の紀行に戻らんとす。さても予は大佛を拜して後、猶そこらを隈なく見廻しゝが、端なくも虛空藏菩薩の後に當りて柱拔のあるを見出したり。これは堂の中に建てられたる大なる柱の下の方に些かなる穴の明きたるを稱するにて、其中をば參詣の人が苦みに苦みて拔ける事なり。何ぞの利益と言はゞ言へ、固より兒戲に等しきものまづ地に伽ひて辛うじて首を突き込み、漸く其首の向方に拔くれば、此度はギュー〳〵と身體を締め付けて、吾と吾身を押し出さゞれば叶はざるにて、予の如き物數寄すらも此柱拔けのみは一目見たるのみにて立去れり。

とかくするうち閉扉の時刻ともなりたれば、匆々此處を辭して二月堂の方へと志したり。程無く近づき見れば此邊には法華堂あり、開山堂あり、少し離れて手向山

八幡宮ありて、身は益々淨域に引き込まるゝの感あり。時に日暮れには未だ間ありければ、二月堂の前にて夕飯を喫し、只管月の出る刻限を待ち構へたり。

やがて食終りければ、二月堂に登りて見しに、此處は清水の舞臺の小なるが如く、今來し方の森羅萬象悉く一眸の中に入りて、遠くは攝河泉より、近くは奈良の都の舊蹟と聞く一叢の木立さへ明なり。更に此堂の正面に當りて高く雲際に聳ゆたるは名高き生駒山なるが、をりしも夕陽は將に此山の端に隱れんとして、急轉直下、宛然火輪の如く、嘯々たる光を放ち、爛として大千世界を射る有樣は何に類ふ可くもなく、又なく尊し。此時予の傍に居たる老婆は、手を合はして日輪を拜み珠數さら〳〵と押揉んで、頻りに經文を誦し、やがて堂を下りゆくにぞ。殊勝の婆樣と予は其後姿を見送りぬ。程もあらせず世は夜の幕に近づかんとして、手向山の森の邊愈々黑くなりまされども、眼のあたりなる良辨

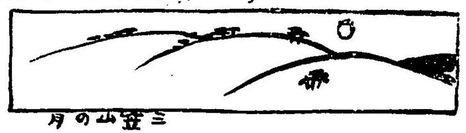
（東大寺二月堂）

杉は秋風を起して枯葉を捲き古へ良辨僧正幼なかりし時、大然に抓まれて此杉に掛られたりといふ物語を獨り自ら誇るが如し。更に開山堂、若狹井の邊を見るに模糊として秋晩の眺めいと物凄し。時しもあれ山僧の東より西に歸らんとして堂の上を仰ぎ見つゝ過ぎ行くも又風情あり。さて又此二月堂は十一面觀世音を安置したるものにて信心の霊殊に多く、晝夜參詣の跡を絶たずと聞きしが、現に今も此堂の廻廊を二三の人の孜々として廻るあり。御圖の如き小さき竹を幾本となく持ち、一度廻る毎に堂前の箱の中に其の一本を投じ、又怠りなく廻るにて、其數百に滿つれば即ちれ百度なりといふ。中に病みはうけたる若き人が、杖を突き同じく竹を持ちて廻るもあり。是全く病の爲の故ならむが、さるにても信心と云ふものは恐ろしきものよと暫しは其人の後影を打目戍りたり。程なく此堂を去り、此處彼處に聞ゆる幽なる溪水の音を賞して數十の石磴を下り、法華堂より手向山八幡宮の前に來りて一拜せしが不圖目に留りたるは奉納金の札ども夥多ある中に、金一圓李容翊と記しある事なりき。よし其心を問はずとも奉納施行等は見ても心地善きものなり、手向山を出でゝよりは森々たる檜樹の間を過ぎ行きて、或は飛瀑の音を聞き、或は怪禽の羽音に驚き、或は遠く鹿の

鳴く聲に暮れ行く秋の哀れを悲みしが、思はずも又空を見れば亭々たる杉の木の間より、十三夜の月の淡く輝きて雲の帷之を圍めり。あゝ、夜は來りぬ。如何に諸曲の爲めの廻國なればとて、本社を拜まざる可らずと只管に急げば忽ち春日神社の前に出でたり。見るに社殿は南面し、本殿拜殿樓門前殿等ありて廻廊之を繞り、數千の燈籠階下に列なり、而も境幽にして世塵を絶ち、地靈にして神威の嚴かなるは畏しとも畏し。時に暮色も茲に至りて全く竭き、刻一刻光を加へたる嫦娥は烟々たる群星と相待つて春日の野の山を白日の如く照し出したるにぞ、之れを見たる予は勇躍して三笠山の麓に至りぬ。

をりから山麓なる旅館の裏手に當りて賑かなる木遣の聲の聞ゆるを耳にしつゝ次第に三笠山を俯ひ上り、山上に生えたる只一本の松を目標として、早く彼處迄と勤めたりき。然れども此山元來木なくして芝山なれば自ら悔る心生じて靴の儘にて登りたれば、殊に足の運び惡しく、疲勞を覺ゆるにぞ幾度か引返さんとして、は休み、二足三足下り掛けたりしが、一旦斯うよと思ひ立ちし事なればと、又も氣を張りて次第々々に頂上に近きたり。時は恰も九月十一日なれば、草叢にすだく虫の音は唧々として秋の名殘を惜むが如く、而も夜滴滾

滾として月に向つて玲瓏たる光を放つ景色は、實に秋夜の風景を畫き得て妙と云ふべし。木遣の聲も漸く幽なる儘に、つと足を芝の上に投げ出して、向ひを見れば、低きやうに見えても山は山なり、二月堂より生駒山を望みしよりは更に遠大にして、眼界最も濶く、奈良の市街は、悉く掌中に集りて耿々たる燈火は星の如く、點々相斷續して坐ろに市の殷盛を偲ばしめぬ。折しも月は全く岫を離れ、皎々として清輝を發するにぞ、更に元氣付きて又も登りしに、忽ちにして頂上に達したり。見るに茶店の小屋の如きものありける故其傍に腰を掛けて餘念なく月を賞したりしが、固より滿山寥々として、隻影なく、虫語切々として夜色殊に凄し。此處に至りて語らふものは只月のみなるが、生憎にも此夜は斷雲簇々として、散じては又集り、集りては又離れて、可惜明光を隱す事あるにぞ、こは長く居るべきにあらずと思ひながらも、又獨りそこはかとなく歩み廻りたり。野守のサシ謠に、「有りがたや、慈悲萬行の春の色三笠の山に長閑にて、五重唯識の秋の風、春日の里に音づれて」といへるが、まことに春日のどけき時に、優々と此山に遊びしなら、さこそ樂しき事ならめと

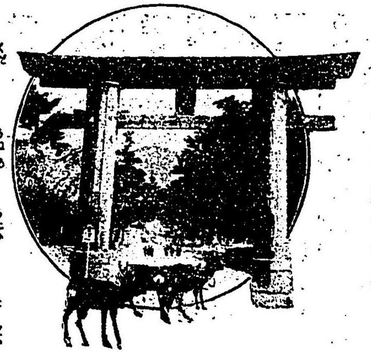


三笠山の月

思はれたり。暫くして一度雲に蔽はれし月、又も姿を現しゝが、心の故か先に見たりしよりは更に美しく、玉盤の如く研ぎ澄されたり。此明光に對して思ひ出づるは、古安部仲麿が唐土に使しゝ時、わが日の本を慕ひわびて「天の原ふりさけみれば春日なる三笠の山にいでし月かも」と詠じ、美名を後世に傳へたる事、此事は同じく野守の謠に引用せり、又た地質學者理學士比企忠氏か此三笠山を安山岩の山種の中に數へられ同じ大和の二上山、攝津の兜山、讃岐の屋島山、飯野山等と同類なりと言はれたる事どもなり。兎角する中に八時五十四分發の時間が氣遣はしくなりたれば、蒼皇下山して、又もや杉の木立の中に入り、月に追はれて歩み行けり。

程なく一條の大路に出づれば、春日第一の華表は夜目にも明に見えたり。ハヤ來りしかと又も歩を運びしに片側の森の中より足音して何やらん大なる物が予の前を通り過ぎたるにぞ、驚きてよく〳〵見れば、こはそ

も例の鹿先生にて今のは道の傍の巨杉の下に立ちて、首を此方に向けてありしが、驚くべし其處には又四五匹群をなせり。何れも角長く生えて、大さ犢の如きものばかりなる故、如何に柔和なる獸とはいへ、人氣無き夜なれば小氣味惡く感じて、得近づかず、スタ〳〵と通り抜けて鳥居の處まで來りて振り返り見れば、件の鹿は木の間洩る月の光の下に餘念なく歩み廻れり。鳥居を出づれば上等の旅館三つ四つ五つ、いづれも清げなり。かくて餘所ながら興福寺、五重塔、花の松を見てダラ〳〵と坂

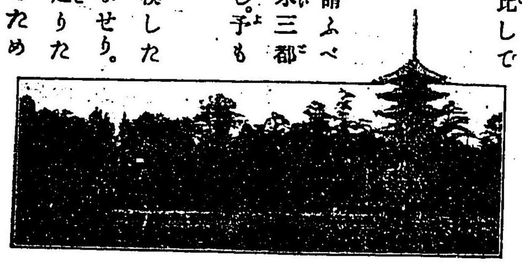

（春日神社一の鳥居）

を下れば「采女」の謠にて名高き猿澤の池わり。

元來「春日龍神」「大佛供養」「野守」等の謠はいづれも奈良に關したるものなれども、其文章は物語にのみ偏し、春日の風景は極めて乏しさされども、此池は「采女」に將又「春日龍神」にも引用せられて、面白く書き綴られたり。「采女」の末文に、「猿澤の池の面に、水滔々として、波又悠悠たりとかや、石根に雲おこつて」とあり。又「春日龍神」に「龍神は猿澤の池の青波蹴立て〳〵て、其丈千尋の、大蛇

となつて、天に群がり、地にわだかまりて、池水を返へして失せにけり」とあれども、實はさのみの池にあらず東西五十間南北四十間、周圍百八十六間の小池にて、奈良公園に於ける園藝的のものと見て可なり。京都の圓山公園東京の淺草公園の池に比して稍大きく、水深きばかりなるが、其れをば池の青波けたてけたてゝとは、詩人作者の筆致も亦た誇張に過ぎたりと謂ふべし。采女の能は恐らく十年以來三都に於て勤めたる人なかるべし。予も固より未だ知らず。

抑も此池は天竺獼猴の池を模したるものゝ由にて「乃」の字形をなせり。獼猴と云ふ所より、猿澤の名起りたるにて、昔は水の代謝る術なきために異臭を放ちしが、近來率川の流れを引きてより、晝夜間斷なく疏通し、爲めに魚は肥えて、水七分に魚三分といふ噂もあながちに爽てられず、殊に鯉魚多しといふ、只見る此池の邊には楊柳の夜風に靡きて、勝景いはん方なきに、月は此處までも追ひ來り、水の面を照して其形銀盆の如し。をり〳〵は又細波動きて漣漣たる光を



（猿澤の池）

放つ風致は、有繋に所に住む人も他かすやあらん、老若男女多く集ひて嬉々として樂めり。されば池の附近には甘酒屋、饂飩屋、大福餅等の露店さへ散在して、なかなかに賑やかなり。又遙か彼方の池畔に當つて數丈もある高き柳の影に大光燭の電燈の光るを見て、わな美觀なりと思ひつゝ瞳を向くれば、旗亭の二階の障子に影法師映りて、藝妓の賑かに三味を引く音も聞えたり。豫て此池より近くに花街のあるを聞きしかば、煩惱を起してはならじと、東の方の岸に行き、采女が奈良帝を怨じて十二一重を柳に掛けて池中に身を投じたりといふ其柳の下に憩ひしが、實にも枝葉長く池中に垂れて、底深く、水の色黑く、見るからに物凄き有樣なり。此柳を衣掛柳と稱して、今に遊客の眉を顰むる種となれり。猿澤の池終れば最早用なしとて、奈良停車場に急ぎ、驛前の蕎麥屋にて空腹を充たし、京都行の滊車にて七條に着き、其より一里許の道を徒歩して我家に歸りし時は

（其十七）嵐山『嵐山』『小倉』

附たり洛陽の秋色

……黒谷……熊谷敦盛の塔……若王子……永觀堂……
……千鳥ヶ淵……藏王大權現……小督局墳……
……野宮……

（黒谷山門）

洛陽の秋色次第に熟して遊心漫ろに催すが故飄然として蝸廬を飛び出しぬ、時は十一月の十日病後のことゝて自轉車は（黒谷）思ひ止り徒歩路を辿りつゝ聖（門）護院の町を過ぎ東を志して進めば、やがて日本淨土宗最初の本山たる黒谷の光明寺に着きたり。

傳へ云ふ開祖法然上人此地を過ぎり給ひし時紫雲光明を拜みたる靈異に感じ、こゝをば本宗最初の道場となし、光明寺と號すとかや、寔に此處は比叡山の西麓にして、東北院のある神樂丘の東南に當り、鹿谷の西に位したる閑寂の地なれば、上人が此地を選んで法雨を降らし給ひしも故ありと謂ふべし。

先づ總門を入れば、亂松の間に巍然たる山門立ち「淨土宗最初門」と記したる扁額の金光燦爛たるを掲げたり。

折ふし鐘樓にて撞き出す梵鐘の音を聞きつゝ山門を入りて石磴を上れば本堂の方に當りて、木魚の音頻りに聞へて、松籟之に和し、心耳爲めに俗塵を掃ふの心地すされば謠曲にある「恐痴の我等をすくひ給へ」といふ文章も思出されていと〳〵尊し。行き〳〵て鐘樓を右に見、經藏阿彌陀堂を左に眺め、熊谷の鎧掛松に昔を偲び、紫雲の松の枝長く垂れたるを望んでは、江州唐崎の松を思ひ出し、かくて本堂の前に至れば「紫雲講金四千圓」「永續費金千圓」といふ二つの札立ちて、いづれも大阪御門中十九寺、傳法二ヶ寺と署名しあるにぞ、愈々此寺の尋常ならぬが察せらる。「靴ノ儘昇降スベカラズ」といふ例の制札のある所より本堂に上り、疊の上に跪いて一禮し、正面を屹と見れば、彌陀如來の御厨子は金襤燦煌として珠玉を鏤め、壯麗言語に絶し、仰き見るをさへ憚るばかりなり。又中央より天蓋の下れるを見れば、是亦た金を以て細工されぬ。其左右に銅盤と稱するもの垂下り「南無阿彌陀佛」の六字を紫の色もて現したり。更に前の方には華鬘と名づくるもの五つ垂下れるかゝは金屬にて花の形を造り、其れに瓔珞を下げたるものなり。茲に又左右の柱に掛けたる偈の文を見れば右には、

天下和順日月清明風雨以時災厲不起

又左には、

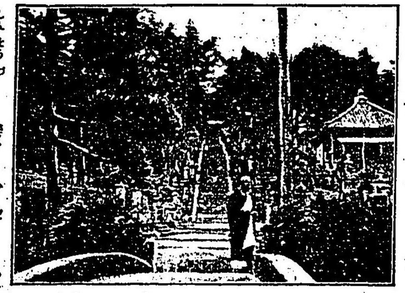
國豐民安兵戈無用崇德興仁務修禮讓

とあり。こは是れ三部經の文句なり。

是等の結構に心を奪はれ暫し呆然として御堂を拜する中、老婆二人ツカ〳〵と上り來りて、予が前を會釋してツト前に進み、跪きて、合せたる兩手を頭の上まで上げて、又忽ち屈みて拜する事凡そ三度にして其より念佛を稱へ始めたり。後より其態を見る時は恰かも唐土の人が貴人に謁する時の形の如くにて、さても殊勝なる事よと感じたり。不圖向方を見れば寶物拜觀の札掛りし故、立ちて其方に行き、拜觀料を拂ひて案内を乞ひしに袴を着けたる老人は唯々として予の前に立ち、是れが上壇の間」これが熊谷さんのお姿此處にあるのは法然上人が六十三歳の時に御自分のお姿を鋭に描して書かしやつたもの」なぞと其物言ひの早き事は恰かも小坊主が經を讀むに等し。これは京都に遊びたる人の能く知る所にして、金閣寺、銀閣寺等持院等いづれに行きても寶物案内の口上は申合せ

たるが如く早くして、落付いて見る事能はず、寔に心なき所業と云ふ可し。

其より心を籠めて仔細に巡覽したりしが、當山第一の寶物は開祖法然上人の一枚起請文なり。そは上人が入寂の日の三日前に往來の素願を眞筆にて認めたるものにて、是に對して恭なくも人皇百三代後柏原天皇御宸筆の添書あり。勿論軸に表裝てたるにて一段高き所にあり。其起請文は極めて簡單にて人は只南無阿彌陀佛とさへいへば、疑なく往生するといふ意味なり。之に次いて顯著なるは熊谷直實の姿を掛軸にしたるものなり。此人の身長を七尺五寸と傳ふ、猶麒麟の間あり、又緑の障子を開けば池ありて橘を架し、四邊の風物凡ならず。此池に熊谷が鎧を棄てし故鎧棄の池と稱するとは能く〳〵直實に緑故ありと覺ゆ。麒麟の間には古器物あり、更に東面して虎の間、鳳凰の間、龍の間あり、鳳凰の間には惠心僧都の作の彌陀を安置したり。



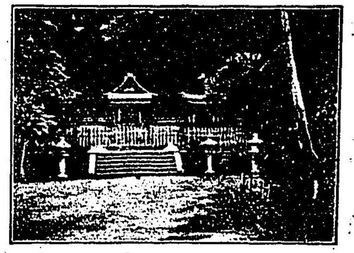
（黒谷極樂橋より熊谷堂）

程なく本堂を辭して唐門の前を過ぎ、庫裡の白壁を跡

にして極楽橋を渡れば熊谷堂あり、「起世願主といふ額を掛け厨子を安置したり、是はこれ直實の籠りたる堂なりと云ふ。此邊より遙の山上に至るまでの間無數の墓際間もなく羅列し、荒涼の景寧ろ秋晴を弄ぶの慨あり。其間には椎の木ありて風わたる毎に婆娑として葉を落すも中々哀れなるが樹下に寺男の落葉を掻き集めて燎くところ、冷煙頻りに上りて烏西に飛び、風光更に蕭々たるものあり。また墓の蔭より水桶を提げて出で來る老婆の眼に涙あるも悲し。詩には「此翁白頭眞可憐伊昔紅顏美少年」といふ句あれども、何ぞ獨り白頭翁のみを憐びべき、老少不定と聞くときは若き命も頼まれずと、謠曲藤戸の作者も言ひけるよと寂しき感想に囚はれつゝ、山上の道に出づれば、敦盛の塔と熊谷の塔とは睦まじく相向ひ合ひて、其前には圓光大師即ち法然上人の御廟所あり。敦盛の塔には「太夫敦盛空顏琦莊大居士」と又熊谷の塔には「熊谷法力坊入道蓮生法師」と誌されしが、能樂は兩氏に尤も緣故深き事なれば、一揖し、其より南門を出で間道を拔けて、若王子の紅葉を見んと志せり。

若王子山は永曆年間、後白河天皇が紀州の那智山を此處に象り熊野權現を勸請し給ひし所にて、慈仁の亂に一度は荒れたれども今猶ほ帝の遺跡あり、而も四時の

風景に富み、殊に紅葉を以て名あり、先づ途を急ぎて其麓に至れば、南畵の大家田能村直入翁の邸あり。畵神堂と名づけて專ら行人の目を惹けり。其れより一條の小河に架りたる橋を渡り、徐ろに首を上ぐれば紅雲靉靆として山腹をめぐり、首を垂るれば綠樹影沈んで魚木に躍るの景掬すべきの雅趣あり、程なく羊腸たる山路を登れば彼方には潺聲聞えて、坐ろに盛夏の頃の逸遊を思ひ出さしむ。寔に此處には一ノ瀧、二ノ瀧、三ノ瀧とありて、直に河



（若王寺）

瀉數千灣とまでは行かざれども、とにかくに涼を覺ゆるに足る。かくて山腹に至れば一の平地ありて池水を湛へ、紅葉せる四邊の梶樹に風の渡る毎に紅波嫋々として峰を震ひ、梢を動かして茲に晩秋の美景を描き出したるの觀あり。池を廻れば小亭あり、毛氈を引いて客を待てり。

凡て是等の茶屋の小婦として人をさへ見れば「お掛けやす」「お休みなすつてお呉れやす」「此邊はホン景色が宜ろしうございます」と只管に媚を呈するが常なれども、これに氣を許して突然腰を掛くれば、東京とは違ひて

席料と稱する者を取らるゝなり。即ち飲食物の外に又幾分を徴するにてツマリ二重になるなり。京都人の常として物見遊山には、必ず引越しの荷物はどの飲食物を捉げて歩き、茶屋に來て其れを擴げてムシャ〳〵と食す、此故にもや席料と云ふものを徴するなり。牡丹に唐獅子、竹に虎、梅に鶯、京都人にお重のお荷物是れは離れられぬ因縁と知るべし。能芝居等にもヤハリ此お荷物は伴へり。

予は元より手ブラなれば、茶屋に命じて麓の旗亭より午食を取り寄せ、したゝか腹を肥やして、さて一吹すれば山靈の秀氣骨に徹し、仙藥身を輕くするものわるにぞ、辭してそこら邊を徘徊せんと起ち上るをりしも、今まで一人なりし茶屋に例のお荷物携帶の老婆連三四名打連れてドカ〳〵と入り來りぬ。乃ち此處を去りて、更に西面したる小高き處まで登り見れば、疎松の木蔭に妙見宮を安置しあり。遠く西山と相對して眼界頗る廣きに、暫らく打ち眺めてありしが、やがて山を下り麓に至りて當山の神の宮居を拜したり。抑も此若王子は舊皇居の正東に位するを以て古へは正東山と稱せしに由にて其起原は前にも記しゝ如く後白河法皇が紀州熊野の那智のお山を象り、又四社の神を置かれしに始まる。即ち東なるは國常立尊、中は伊佐那岐尊、西は伊佐

那美尊、幷に若宮天照皇太神なり。四社とも皆祠の如きものなれども、社務所は式の如く控へたり。此日は是にて病後の試を終りたれば、いざとて腕車に扶けられて、又塵寰の中に入りぬ。

十六日、天氣いと長閑なり。嵐の山にまゐらんと思ひしかども、今一度ひんがしの山の紅葉を探らばやとて、例の永觀堂に至りぬ。此邊景色いと雅びて紅楓松蘋野家牧童、いづれも皆な我心を慰さめざるはなし。

抑も當寺永觀堂と申すは、文永年中の草創にして淨土宗西山派の本山なり。眞は來迎山禪林寺と云ふ名なれど、昔し花山天皇の皇子深觀僧都の御弟子に、永觀といへる沙門あり、道心堅固なる爲め、或は彌陀佛の靈驗あり、或は聖衆の來迎ありし故人其德を尊びて終に永觀堂と稱するに至れり。さて先づ「みかへり阿彌陀如來」の石碑を見て門を入れば忽ちにして周圍百間に餘る池あり、中央の嶼に辨財天の祠ありて橋之に架し、池畔には黄葉、錦楓、相參差して、池水に映ずるの狀譬ふるにものなく、實にも洛陽隨一の紅葉名所なりけり。秋は紅葉の永觀堂と唄にさへある程なるは全く此寺の

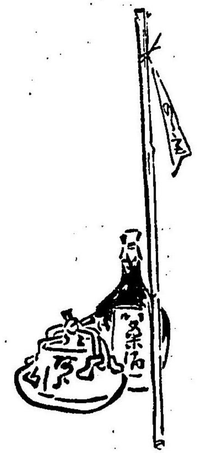
紅葉の他に、比して勝れたると、又一つには塵俗を離れて閑靜なるにも因るぞかし、忍びねも音なかりけりはとゝぎすこや靜なる林なるらん」と既に永觀律師も詠まれたり。此の寺は本堂方丈庫裡いづれも莊嚴にて、墻壁には白き線のあるあり。こは皇族に縁故ある證にして、永觀の師の深觀が花山天皇の御子なりし故にもやあるべき、本堂に入らんとする門の柱に聯の掛りたるを心して見れば、右には「洞開眞門通萬衆入法界判」左に「高曜佛日振宗風轉無垢輪」とわり。眞門を洞開するも妙なるが、高く佛日を曜かして宗風を振ふとは流石に佛家の筆なりけり、扨猶も此處彼處紅葉の影を縫ひて、後山の石段を上れば正面に阿彌陀堂ありて善光寺四十八願所第三十四番永觀堂といふ額を掲く、傳へ云ふ此彌陀は横向き故横より拜まざる可からずと、其次第は永觀律師在世の頃或日彌陀佛、壇より下り、永觀のひれ伏すを見返り、永觀來る事の奚んぞ遲きやと曰ひ、其儘左を向きて動かざりけり。是等より寺前にも、特にみかへり阿彌陀如來と記せる石を立てしとなり。

阿彌陀堂の前に菩提樹といふ植物あり。永觀よりよは也以前の法師にて、當山第二世宗叡僧都が唐土より傳來せしものゝ由にて五月雨の頃に咲く花を見れば、蓮華の花に酷似して大きさは小指の頭ほどなりと聞く、かくて秋には實を結ぶと云ふ。又來迎松あり、悲田松あり、これは兩つながら永觀に關するものとて當寺に取りては貴重の物なり、此邊の高地より池の周圍を見渡せば、紅樹青松錯々綜々として對照の妙を極むるにゝ、叶ふべくは一枝請ひて林間に酒を煖め、東京の知友を雲に載せて此處に下ろし、共に風流を語らまほしくそ覺ゆれ、其より眞如堂の紅葉をも賞し、踵を回らして歸途に就きぬ。

十八日は朝の中霧深かりけれども、やがて拭ふが如く晴れたれば、何はさてをき、急ぎ嵐の山にと志せり。今日も自轉車は止めて、電車にて二條の停車場に着し、其より、嵯峨まで瀧車の便を借りたり。自轉車ならせば二條、四條、いづれの道より行くも皆一筋道にて、やはり三條、四條、我家より四十分も掛らば容易く着すべきに、今日は不便なる事よと、行きも歸りも只其事のみぞ口惜しかりける。

嵯峨停車場を出づれば、ハヤ嵐の山は青き帳に錦の屏風を立廻して、方に遊客の節を待つが如し、此邊は畑中

に大なる廣告の杭そこゝに立ちて、あたら勝區を傷くるの憾みありしが、中に健胃下腹丸などは、一丈程の脊高き仲國が笛を吹く處の繪を畫きたり。嵯峨野故に仲國を利かしたるなどは、同じ廣告とはいへ、又何となく殊勝しくこそ覺ゆれ。嵯峨納豆、天龍寺納豆、桑酒、櫻花漬、嵯峨だんご等數々の物貴る店を通り過ぐる頃には何時しか天龍寺の門前をも後にして、只ひたぶるに渡月橋の方へと急ぎたり。



かくばかり夥多の土産物の貴店の中に野宮の竹杖といふ札の付きたるものあり。見るに分の厚き竹をば美くしく剝ぎて艶を付けて杖にしたるものにて、青山白水等の文字を彫付けあるなど、なかなかに風流氣あり。やがて渡月橋の上に立ちて心靜かに眺むれば、櫻の頃花を以て全山を埋めたりと思ひしものが今は又滿峰錦楓ならざるなく、爛紅天を燎くところ、亭々たる青松も翠を奪はれて、僅かに其隙を縫ひ、千本の櫻の有無をさへ疑はるゝばかりなり。よりて謠曲「嵐山」の文章と對照するには些と困じたりしが、思ふ事こそあれ先づ向ひの岸に渡り、ボートを借りて大堰

川に漕ぎ出でばやと、船賃を問へば、一時間十錢なりといふ。善しと言ひて、獨り櫂を執りて中流に出で、仰いで見れば、錦霞益密にして五歩に移り十歩に變じ、紅あり、淡紅あり、褐色あり、紫色あり、燦爛目を奪ふにゞ、茫然自失漕手暫く止りて、船南に流る。思ひ出して又上へ〳〵と漕ぎ行けば、山の麓を歩む人も又予と同じく進み、陸と川と未知の人同志相呼應するも、窓に名所の賜物なり。時に一條の飛泉淙々としして峰より麓に落るものあり。しがこれぞ即ち戸無瀬滝にて、水躍つて白花を散すの狀は、彷彿の紅葉と相待ち相待ちて幽趣限りなく、謠曲の文の「轅も西にめぐる日の影ゆく雲のあらし山、戸無瀬に落つる白波も散るかと見ゆる花の滝」といふ形容は、實に善く其情を穿ちたりと謂ふべし。

此所能にては未だ前段の始めにて、シテとツレとが立ちながら謠ふなり。本來此能は神事能の中にても花やかなれば、目出度き時に演ずるものにて、或時は又一日の能のキリに至りて祝言と稱し、半能に畧してなしたるをも

（雨の嵐山）

記臆せり。一番の能としては、予は喜多の舞臺のと、又野口政吉のを見たり。

で、蓋し其深さの幾百尋なるを知る能はず、見るからに悚然たる思ひあらしめ、岩に木の根、蔦葛伸ひまつはりて、峰に聞ゆる鳥の音も茲に哀を諸ふが如し、しかも白雲來去し風下つて、冷氣身に染むを覺えぬ、それ嵐山に來りて山の美を稱する人は多けれど、千鳥ヶ淵の水の面を見て能く人生の苦悶を味ふものは尠かる可し。況してや船賃を惜みて舟にも乘らず、或は淺瀬に立ちて單に皮相の嵐山ばかりを見、或は岸を傳ひて温泉に行き、千鳥ヶ淵の上を通りながらも、此碧潭の景色を知らで、過ぐす人に於てをや。ペテロは其始めは淺瀬にのみ戸無瀬瀬より猶上流に遡れば、此の度は千鳥ヶ淵に臨みぬ。此はこれ、古建禮門院の侍女横笛が戀のために身を投げ空しくなりたる處にて、只見る巖巖削りたるが如き、其下は碧潭水を疊ん

漁りしが、キリストの言葉に從ひて中流に網を打ちしに非常なる獲物ありしかば、其より基督を信ずる念深くなりしと云ふ。是に付けても人は名所舊跡に對して其小口のみを賞せず、宜しく深く穿鑿して詩藝を富ます事を心掛く可きなり。

千鳥ヶ淵より温泉の邊までも潛ぎ登りしが、時間の都合にて復た引返せば、此度は櫂を離しゝのみにて、舟は自然と獨り下流に歸れり。其間三軒屋の前と温泉との間を渡す渡船に幾度か行き會ひしが、いづれも皆な凡骨の徒のみにして、兼平を乘せて矢橋を渡る程の船頭もなく、又兼平ほどの乘手も見受けざりき。甚しきは船中に只二人の客あり、一は醉眼の紳士、一は銀杏返に黒縮緬の羽織といふ婀娜者にて、口に手巾を啣へながら男の膝に凭れて峰の紅葉を見上げたる風情又なく艶なり。又其後なる舟は藝子四人に客三人の大酒宴にて、ヂャンヂャカ〳〵三味線の音を微に響かして、飲みつ歌ひつ浮かれ行くにぞ、イヤ何れを見ても己れ程の賢者あらじと、獨りよがりて益々下流に向へば、峰の屏風は刻々に開けて幽邃限りなし。

嵐山の能のシテは老翁と言ふ事なれば、小尉と稱する面を掛け、尉髮をも着け、白大口を穿きて杉箒を持つ事諸流共に異る事なし。かくて先に記したる「散るかと見

ゆる花の瀧の邊の文章も濟みて「春の風は空に滿ちて、庭前の木をきるとも、神風にて吹き返せば、妄執の雲も晴れぬべし」と云ふ所に至れば、老翁は舞臺の前に出で、空を見上げて其れより更に此山の櫻花の盛を見る形あり。實に櫻の頃の峰は又格別にて、香雲繚亂して一望の彩霞に宛然四條派の繪畫を其儘の景なり。もとより妄執の雲も晴れすしておくべき。

やがて端廷より上りて其店に憩へば、今來し方の大堰の流は潺湲として微風徐にわたり、遙かに天龍寺の裏門より有名なる三軒家を見渡し、玆に晩秋の情を專らにす。又渡月橋の上の邊よりして、河中に蛇籠を置きて瀨を造りたるが見えし故人に其故を問ひしに、是は此嵯峨の農夫が田に水を引く爲めに流を二つに仕切りたるにて、一は桂川に、一は用水の方にと引込むなりといふ。かくて此山の麓に古りたる華表立ちて、傍に藏王大權現と云ふ石燈籠ありを見し時には、さてこそ御參なれ、是ぞ嵐山諸山の主人公なるぞと、屹となりて峰の彼方を望みつゝ「おの〳〵嵐の山によぢ登り、花にたはむれ梢にかけつて」とある末段の文章を思ひ浮べつ、此鳥居と石燈籠の側に「無用ノ者入ルベカラズ、大阪大林區署」といふ制札のあるにぞ、やゝ躊躇したるも、念の爲めボート屋の男に尋ねしに單に藏王權現ばかりに參詣のお心なるに何の差支あるべきといふ、さらば如何程の道なりやと問ふ、答へて、眞直に二町登り、又横に外れて二町の程なりといふ、之に力を得て先づ一町ばかり岩根に攀ぢて登りしが、流石に山の名に負かず、青嵐峰より落ちて梢を拂ひ蹈條として零露道を覆ふ。時に目を放てば、下は洞然たる幽谷にして一道の飛瀑粼々と音して四邊の樹木悉く震慄す。さても變れる哉、大堰川の岸に沿うて遊ぶ時は此處は一の歡樂鄕にして、山の美と川の清との外に想像すべくもわらざるに、一歩峰に攀づれば、ハヤ深谷畫暗くして嶮阻甚し。されど彼の制札だになくんば全山を極めて萬古の秘を見出すべきに、さりとは生僧のことよ、遮莫、ためらふには及ばじと猶も勇を鼓して登らんとせしが如何せん、和服に麓靡下駄なれば足の運び悪しきが上に行手を見れば谷間と峰との間に僅かに犬の通ふはどの道ありて、然かも其所甚だ嶮しく一歩を誤れば崖の中に落ちんとする有樣なれば、さしもの子も勇氣挫けて、探檢を斷念し、復た岩根を俯ひて元の麓に下り、ボート屋の男に其事を話せば、如何さま、登り口は谷間の所少し急なれど、其より先へ行きて横に曲れば忽ち平地を行くに異らずといふ、總じて所の人は常に馴れたる道なれば嶮阻も嶮阻ならず、從つて他に敎ふるにもいと輕々と話す

は予と同じく旅を好む人の能く知れる所なるべし。

歳王櫛現を拜せざるは遺憾なりし故更に其樣子を問ひしに、麁末なる祠にて固より宮守る人もなしといふ。さらば大凡は推せらるゝなり、措く可し〳〵とて渡月橋の方へ歸り掛けしが、尙ほしも飽かずして上流を見渡せば、嵐の山の錦楓は言ふも更なり、遠くは船山より近くは小倉の山下つて嵯峨野の青郊川の浴々たる景色、そも何物にか比ぶべき、諺に曰く「青根が峰こゝに、小倉山も見えたり、向ひは嵯峨の原、下は大井川の、岩根に波かゝる、龜山も見えたり、萬代と、はやせ〳〵神あそび」と、寔に此處は諸人の憂を拂ふ神境ぞかし。

稻あり て橋を渡り、豫て案内知りたる竹藪の中なる小督局の墳を一覽せばやと足を進めしに、其竹藪は昨今開墾中と見え、土工ども頻りに鍬を入れ居るにぞ、さては小督局の墳は早や取拂はれしかと思ひて目を皿の如くにして其方に急げば、殊勝なり村の人、墳の周圍に墻を繞らして境界を立てたり、近づき見るに、樫の木の下に石の塔の頭ばかりなるが二つあるなど、元の儘にて少しも動かしたる形迹なし。其又墻も竹の墻

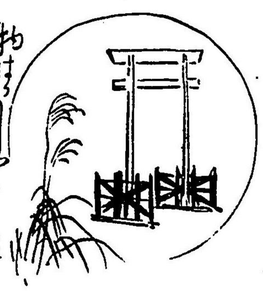
ならずして、低き小柴垣になしたるは猶々奥床し。之を見ては曩昔小督の侍女が仲國の訪ね來りしを告げて仲國御目に懸からざらん程は歸るまじきとて、あの柴垣のもとに露にしをれて御入り候ふ」と言ひける時の有樣が偲ばるゝぞかし。

所の人の殊勝なるは太く嬉しけれども、もと此墓は好事家の作りたるものを其儘傳へたるものなり、眞の小督の墓は此にあらずして、歌の中山清閑寺なる高倉天皇の御陵の中にありと云ふ說あり。既に平家物語源平盛衰記等にも小督の局は高倉院の深く愛させ給へるを、平相國清盛己が娘を强ひて後宮に納れ、小督を逐ひしかば、小督清閑寺に入りて尼となり、嵯峨野にすむ。されども帝は尙も思召し忘れ給はず、御なつかしくわたらせられて、御臨終の其際にも「朕をば必らず清閑寺に送り納めよ」と御遺言あり云々とあれば、是等より推しても此說據所あり。其故に予は清閑寺にも行きたり。

局の墓を去り竹藪を出でゝ、三軒屋の前を過ぎり、さて天龍寺の裏門の方に行かんとする所に、渡船場ありて頻りに遊士を挑めり、此處より船に乘りて溫泉まで行き、其れより又二町許り山を登れば大悲閣と云ふ高樓あり。これは金峰寺といふ寺中に屬し、崖に沿うて建てたるものにて、石山寺の月見の臺、三井寺の觀月樓、信州

姨捨山長樂寺の月見樓と同趣のものなり、此處よりすれば龜山も眺められ、又大堰の上流にも臨めども、幾度も遊びたる所なれば更にとも思はず、其儘天龍寺の裏門より入りて、寺内そこはかとなく歩き廻はりしが、秋の音訪は此處をも洩さずして、鐘樓のあたり紅葉を散らし、禪房の夕愈々寂びたり、間もなく表門を出でしが未だ暮ざりし故、程近き野宮の舊跡に向ひぬ。

天龍寺より野宮までは、僅かに二町許なるが、其間は嵯峨の町にして、土産物賣る店兩側に軒を並べて、人を呼ぶ聲頻なり。本來嵐山の地は松尾村大字上山田に屬し、渡月橋より以東を嵯峨村とす。さるにても仲國が小督局を尋ねんとして、明月の夜に此里に來り謠にある如く「嵯峨野の方の秋の空、さこそ心も澄みわたる片折戸をしるべにて」と徘徊せし頃の有樣は如何なりしぞ、高倉帝が二十一歳にて御早世あられし時が養和元年なれば、其より僅ふれば實に七百二十四年前の事なり、即ち天龍寺も未だ無き頃なれば或は一目荒凉として只虫の音ばかり茂かりけむかも知れず。袖中抄に嵯峨野は葛野とて紫野に續けりとあるを見る時は、猶々思ひ半ばに過るぞかし、天龍寺の表門の側に沿うて釋迦堂の方へと足を向け、一町も行けば、路傍に竹藪ありて中に一つの間道あり。其の入口に「齋宮舊跡野宮神社」是より二町」と記したる石の標立てり、其より其道を入れば竹樹密生して晝尚は暗く森々として鳥の聲さへも全く絶えたり。忽ち道廣くなりて竹影疎なる處に出でしに、果せる哉黑木の鳥居、小柴垣等すべて能に出づるが如き形のもの立てり。其奥には古びたる祠四つあり。勿論周圍の墻とてもなく、只だ榁の木のみ生ひ茂り、いとすさびたる景色なり。そも當社は天照太神を祀りたるものにて、昔伊勢齋宮に住み給へる内親王が、此處に來て三年の間潔齋せられし遺跡なるに、今は宮守る人も無く荒れ果てたるは畏し。此時予は「野宮の森の木枯秋ふけて、身にしむ色の消えかへり、思へば古へを何と忍ぶの草衣」の文章を思ひ出して、吟情抑へがたく、早くも「うらがれの草葉に荒るゝ野宮の跡なつかしきこゝにしも、其の長月の七日の日も今日にめぐり來にけり、物はかなしや小柴垣、いとかりそめの御住居」の段、唇端を挑むにぞ、人氣なき藪の中を謠ひながら逍遙すれば、竹葉片々として顔邊を掠め去り、冷風蕭々として肌膚を襲つて來り、宛ら空谷に入るの感あり、而も寒鳥鳴かず、猿猴叫ばず、いと心細きまゝわ



れ獨り大聲を發して、暫ばらく此の寂寞を破りぬ。野宮の神靈予を見て烏滸の痴者と笑ひ給ひしなるべし。遠文の士此を描かば此の單調寂寞の境を善く形容する事あらんも予は只謠にある野宮を江湖にひきあはすのみ。

謠曲の「野宮」は六條の御息所がシテにて全然彼源氏物語より取り來りたるものなれば、事實としては何等の據る所なし。予は此能をば神田の實生會にて九郎の演じたるを見し事ありしが、其時御息所が鳥居に片足入るゝ處が最も難かしきなりなど語りし人ありき。

（其十八）清閑寺『小哲』

……六條高倉二帝の御陵……郭公亭……

十一月十九日家を出でゝ加茂の河原を傳ひ、三條の橋を右に見て東に進み、又白河の清き流れを望み、其より智恩院に入り、圓山より高臺寺を拔けて清水に至りぬ。それ華奢風流は京都の特色なるが、わけて此頃は天晴れて氣のどかなれば至る所として衣香傘影の相往來するを見ざる事なし。須臾にして清水坂を登れば、音羽山の翠巒今や將に逆に垂れんとするが如く、しかも清水の舞臺は千古の技巧を此處に留め、入口には丹朱の山門立ちて「清水寺」といふ額を載す。實に此境は造化奇境を闢きて、頻に行客の杖を移すと云ふ可く、幾たび來たるとも目あれせぬ所なるぞかし。

山門を入りて普門閣に上りて見れば、遠くは愛宕の山續きより京の市中の蒼茫白堊は、皆一望の中に歸し、近くは當寺南園の紅葉の時を得て、濃粧紅彩數を盡せる其中に、瑤顏艶麗なる京美人の床几の上に圍居して、例

のお重を開くは他國の人の見て異とする所なるらめ。其より歩を移して清水の舞臺に上り、下の谷を見下ろせば黄葉、楓葉、真紅、淡紅とりく〳〵にて、活火の爛々たるさま、一目見て胸の開く心地す。此谷は新高雄と稱すれども漸く數年前に紅葉を植ゑ付けたる故、木の若きは如何ともせん方なし。扨本堂は言ふまでもなく、千手觀音にて參詣の老若昼夜其跡を絶たず、寔に萬代不易の靈場と云ふ可し。本堂の後にある金色水、又音羽の瀧は此の春既に見たれば、こたびは省きつ。

本堂の前には御膳所、納經所、御圖所等種々の札立てども、今日は心向かざれば餘所にのみ過ごして、うち通りぬ。奥の院は足場かゝりて、屋根の修繕中なれば詣らず、かくて石段を下り、音羽の瀧の前を過ぎりて新高雄に下りて、溪路に沿ふて徘徊すれば、音羽の青嵐の頂に當つて白雲浮動し、下つては錦霞滿谷を擁し、地には清流一條の泉をなせる景色、天然の好畫幅と謂ふべし。此邊茶亭多く、茶汲女は遠慮なく、人の鼻の先に立塞り「お掛けやす〳〵」と連叫し、躓けば捕虜になさんず權幕ばやさしくて、けしからず、捉へられては、一大事と慌てゝ走せ過ぎたる後に當つて、絃歌の音さへ聞えぬ。諸曲安宅の文に「よろ〳〵」として歩みたまふ御有樣ぞ痛はしさ」とあるは、恰かも此時の子を形容して餘りあり。其より

又も谷の細道傳ひ〳〵て登りしが、未だ日高ければ、道を横に外れて、歌の中山、清閑寺に向ひたり。

此間は山里なれど路滑かにして、平地を行くに異らず、やがて椎の林を越せば茶畑あり。又一つの草家ありて疎煙頻りに上る。近寄りて見れば、雛群呱々の聲を揚ぐる傍に、鎌を腰にしたる農夫が餌を撒きて、そを愛する事餘念なし。其より先は道せばまれ、落葉風に襲はれて空林に迫るのみ、又何等の風致なし。漸くにして清閑寺門前に至れば此處には二帝の御陵隣合せに並びて、一廓をなし、いと嚴かに構へられ、常人の入るを禁ぜらる。一は人皇七十九代六條天皇の御陵、一は八十代高倉天皇にて、掲示を見れば「二十九年三月宮内省」とあり。抑も六條天皇は二條帝の御子にして、永萬元年に御即位ありしが、其時御年二歳時は恰も平相國清盛が平治の亂の後を承けて、威權四海に洽く、御即位の翌年皇叔憲仁親王立ちて皇太子とならせ給ふに至る。此時皇太子六歳にして天子三歳なれば、彝倫序を失ふとて朝野普く誹りしが、尋いで五歳にして位を讓らせ給ひて、太上天皇となる。凡そ日本の史上に於て未だ冠せざるの上皇は只六條帝のみ、されば今此御陵を拜して無限の感慨を起しぬ。高倉帝は深く平相國の横暴を憂ひ給ひ、最愛の小督の局に御別れわりて遂に内禪す。あゝ御悼

はしき事の限りなる哉、一天萬乘の皇系を承け給ひながら、一夫清盛のために宸襟を惱ませられ、慷慨身を措く能はざる迄に至るとは、天下かくばかりの恨事なし。せめては今上皇帝の御運の御半にてもおはしまし給ひしならばと、返らぬ事を思ひ、數行の涙にくるゝと共に、又今更に淨海清盛の殘逆を憎む事甚し。

嗚咽時を久うしたる後、鞠躬如として徐に御陵を見上ぐれば、蕭然たる壇あり、白壁の屏墻連延して、末は清閑寺の裏の伊藤に盡きたり、而かも陵後は木葉秋に枯れて、山骨高く露はれ、風光蕭颯として哀れ一入身に泌む、又近く塋下には只一本の紅葉あり、今や氣滿ちて其色腥血の如く、是れのみ二帝の妄執を慰め奉るに足る。

御陵の横に續きて石段二つ三つ重ねたる上に柴門の立ちたるは、是れ清閑寺なり。此寺の本尊も千手觀音なるが、詣る人の少きにや、扉を閉ぢて、只覗き穴ばかりになしぬ。寔に此處は世外烟霞冷かに、壺中日月長しとや言ふべき、清水の潺湲に比して蓋し別天地の感あり。然れども金風はかゝる邊土にも隈なく來りて、庭前の楓樹は紅葉し、晩秋の眺め、凄凄たり、側に郭公亭の制札ありて、小高き徑路の付きたるを見たれば、上りて行きしに、閑雅なる亭ありて戸を閉せり。依て椽に腰うち掛けて憩へば、此處は眼界宏濶にして、遠く西山の翠黛を望み、市中の一廓をも見渡し、頭上には松の風颯々と吹きて冷氣頻に迫り、宛然仙洞に入るの思ひす。嗚呼この郭公亭こそは西郷隆盛と僧月照が、王政の復古を密談せし所なりけれ。

予はあからさまに言へば、小督局の墓が清閑寺中にあるを探らんとせしなるに、今來て見れば、そは高倉帝の御陵の垣の中にありと聞きて、迎も叶はぬ願ひと望みを絶ちぬ。

折角の望みも遂に叶はざれば、悄然として其處を辭し元來し道を辿りしが、折しも風颯々と吹きて遠寺の鐘聲緲に響き、椎の實一つバタリと落ち、帽の廂を打つにぞ、行く〳〵沈思に耽りぬ。思ひ出すは昔し清閑寺の眞燕僧都門前の乙女を見染めて煩惱を起し、言寄る術のなき儘に、清水はいづれぞやと問へば、女答へて「見るに

だに迷ふ心のはかなくてまことの道をいかで知るべき」と詠みて掻き消すやうに失せしことなり。是より歌の中山清閑寺の名高くなりしといへど、我は乙女にも遣はざれば、固より歌も詠みかけられず。閑雲野鶴悠々自適、獨り高節を抱きて、山下の道を辿りけり。

（其十九）夕顔の墓『夕顔』『狂言…因幡堂』

……五條橋……針金屋……因幡藥師……

（五條大橋）

夕顔といふ諺あり。餘り多く諺はず、又能にて演ずる事も少し。されど松原通堺町上る西側の富江といふ針金屋の裏に夕顔の古跡ありと聞き、二十七日午後ブラリ〳〵と出掛けたり。

元來此諺も前回の野宮と同じく源氏物語を種として作りしものにて、其又源氏物語が全然架空の話なれば固より事實にはあらずとは知れど、好事の情に引かれて尋ね行きたり。勿論所は京都市中の真ッ只中なり。家を出でゝ高瀬川の川端を傳ひ、松原通にかゝり堺町を上りたる所に至れば、果して西側に針金屋あり、電話など引きて相當なる商家なり。先づ店頭に立ちをりか

ら針金を手にする店員に就て夕顔の墓の事を尋ねしに、奥の方にて主人なるべし、見せてお上げ申しなど言ふ聲聞えたり。

夕顔の諺に「五條あたりのあばらやの、主も知らぬ所まで尋ね訪ひてぞ暮しける」とあり。猶ソキの詞に「急ぎ候程に、是は早五條あたりにてありげに候ふ」といふを見れば、所謂夕顔といふ女は五條の邊に住みたるべきに今この夕顔の古跡が松原通にあるは不審なりといふ説起るべし。されど是は一言にて氷解す可し。即ち古昔の五條通は今の松原通にして、彼の牛若が辨慶と戰ひたる五條橋も、今の松原通に架りたるなり。されば今の五條橋の所を以て、牛若辨慶を回想するは誤りなり。畢竟豐臣秀吉が五條橋を二町下に移したるより以來元の五條は松原と稱し、新五條を以て永久の稱呼とはなせるなり。牛若の時代は今より七百三十年前、豐臣は三百二十年前なれば忽ちにして五條の橋の因緣を解せらるべし。是れ橋辨慶の諺曲にも關す。

五條と松原との區別は堺の如くなるが、今の夕顔の古跡のある所は高辻通萬壽寺通と隣り合ひ、人家櫛比して殷盛を極めたり。源氏物語夕顔の卷には、

この家の傍に、檜垣といふもの新しうして上は半蔀四五間ばかりあけ渡して、簾などもいと白う涼しげ

なるに、

とあり、又謡曲にも「こゝは又もとより所も名を得たる、ふるき軒端の忍草」とあり。箇程の淋しき所が今針金屋となるも妙ならずや。なほ又「いざゝらば夜もすがら、月見がてらに明かしつゝ、法華讀誦の聲絶えず」と言へど、斯かる町にて何しに座して月見をなすべきぞ。又「氣疎き秋の野らとなりて、池は水草に埋もれて、古りたる松の蔭くらく」とあれど、何處に池や松の有る可きや。

假りに京の四條通を東京の銀座通とすれば、松原通は銀座より二町離れたる八官町邊の市街にて、固より松原など更になし。惟ふに源氏物語の作者紫式部が世に在りし頃は、此界隈は人家なくして淋しき所にてありしなるべし。

針金屋の店員に導かれ針金屋の奥に入り、土間を傳うて行けば、庭の一隅の板圍ひをしたる中に大切に夕顔の墓を安置せり。見るに五輪塔を据ゑ、上にはむめの木にて藤棚の如きものを作り、又塔の側に木犀の木を一本植ゑたり。どりから此家の老主人とも覺しき人の來りて語るには、予のみならず、幾人も夕顔の墓を見に來る人あり。されど此墓は何時頃より此處にありしものにや更に分明ならず、或古物好きの人來りて墓石を鑑定せしに、百年前のものなりといふ。猶當所は維新の際の戰亂に類燒せしなりと。予は此老人の言より察するに例の好事家が源氏物語、又は夕顔の謡より此處に夕顔の墓を作りたるを、昔の人は正直故眞と思ひて堅く保存し、其より其れと傳へて、終に今の持主にまで至りたるなるべし。然れども今日となりては取毀つよりも當家に於て保存するこそ却て床しき事なるべけれ。

一見して後叮嚀に一禮して同家を出で、松原通を西洞院の方に行かんとせしに、圖らずも同じ松原通の烏丸に因幡藥師としたる石の標立ちて、宏大なる御堂のあるを見何心なく立止りて考ふれば、是は能狂言にて多く演ずる因幡堂の名所なりけり。此狂言の筋は大酒飲みの女房のために亭主はほとほと困じ、其れとなく妻を里の家に送り、新に五條の因幡堂に妻乞をなせしところ、「靈驗ありし故喜びて被衣を冠りたる其靈驗の新女房を我家に連れ歸り、さて熟〳〵見れば、ヤハリ以前の酒飲みの妻なりと云ふ頗る面白き狂言なり。

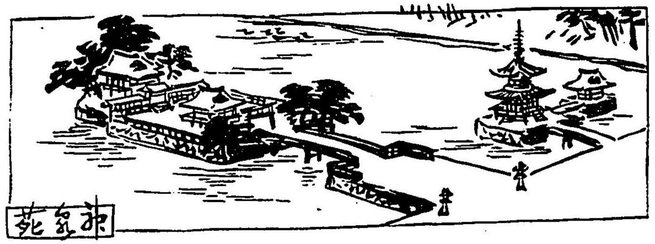
因幡堂の濫觴を尋ぬるに、人皇六十六代一條天皇の長保五年從四位上因幡守橘行平卿が靈夢に感じて建立

せられたるものなり。一歳行平卿勅使となりて、因幡國に下向し、事終りて將に歸らんとして重き病に罹りし時、靈夢に從ひて、同國賀留津の海中に光り物を探りしに、やがて取り出せしは御丈五尺の藥師如來なりけり。行平驚き喜びて其藥師を信せしに、程なく病氣平癒せしにより、歸國の後、此處にありし己が邸宅を改造して本堂となせり。始め藥師の尊像は因幡より京都に來り、行平の邸の南門を叩きしに門番が明けざりし故、西門に廻りて飛び込みたり。故に明治の今日にも其南門の通を不明門通と稱するとは奇も又極れりといふ可し。かゝる緣起あるが故に善光寺の阿彌陀如來、因幡堂の藥師如來、同じく京都嵯峨の釋迦如來を以て日本の三如來と稱し、歷朝帝王の御尊崇を辱うし、高倉天皇に至り平等寺と名づけられぬ。されば御歷代崩御の際には此寺の住職が獻經御燒香を仰付けらるゝ事になり、先帝孝明天皇崩御の時も其事を勤めたりざる寺格なるにより、御厨子も金を鏤め、又正面に「因幡堂三條寶美書」と金字にて書きたる額を掲げ、猶ほ弘法大師と地藏菩薩とを堂の兩側に安置したり。緣日は東京の諸藥師と同じく八日と十二日なるが、頗る賑て、六角堂の緣日と並び稱せらる。此外春秋二回、彼岸の終の日に厨子を明ると言へば、狂言道に志ある人は往きて拜するも、一つ

は藝道の修行になるべし。かくて此處も程なく去り、其より西洞院に出でゝ神泉苑にと志せり。

（其二十）神泉苑『雅』

……法成就池……



謠曲の「鷺」は平安舊都第一の古蹟たる神泉苑を叙したるものにて、重き習事の中に加へたり。此苑上古は東は大宮、西は壬生、北は二條、南は三條の間に亘りて敷地八町にも及びしといへど、今は縮少して東西三十五間、南北四十六間の中に池あり、浮島あり、堂ありて僅かに古の面影を偲ばしむるのみ。此池は法成就池と云ひ、形面白けれど、永觀堂の池と同じく溜り水なり、苑内には松多く、又椋の大樹あれども、時は今冬の始めなれば、枝は大方裸となりて落葉地に舗けり。先づ正面に廻りて善女龍王の祠に詣で、石に腰を掛けて四邊を眺むれば、千年の荒苑霜色を帶びて、うら悲し氣なる風情なるが有繋に池

は往時の風致を遺して、坐ろに桓武天皇以來歴世御遊の池とぞ知られける。謠曲の文には、「おもしろや孤島そばだつて波悠々たるよそはひ誠に湖水の波の上」と、あれど、如何にせん、溜池なれば水濁りて青萍を浮べ、あたら風致を損ずるの憾みあり。「鷺のゐる池の汀に松ふりて、都にも似ぬ住居はおのづから、實にめづらかにおもしろや」とは能くこゝらの風景を叙したりと謂ふべく、今も池の汀に古りたる松の枝を長く垂れたるは、いと〳〵めでたし。謠曲にある天子の御遊といふは、醍醐帝の時にして、鷺の敕を奉せしを御感あつて、それを捕へし藏人と共に五位を賜はりたるとは、何ぼう奇特なる事にてはなさや。五位鷺といふは或は此時より始まりたるなるべし。

鷺といふ能は、十歳以下七十歳以上の人が勤むる例なり。先年觀世の舞臺にて梅若實が此能を勤めし時は、頭に鷺の立物を載せて舞ひしが、其姿其形いと優美なりき。實に能になす如き神泉苑の昔は如何なりしか。「或は詩歌の船を泛べ、又は糸竹の聲あやをなす曲水の、手まづさへぎる、盃も浮ぶなり、わらおもしろの池水やな」とは言へど、今見る所にては船の用意もなく、池の中央までも突き出でたる椋の大樹に、いたいけなる小兒が頻りに木登りを試みるの外、見る物とてはなく、風光太

く荒びて面白の池水と迄は認むる能はず。吁、箇程の仙境をば何とかなさまほしと、及ばぬ心にも右見左見しつゝ、其れとなくみくじを出す所に往き、其人と話しゝに、曰く、以前は一屑荒廢したるなれども、土地を購ひ堺を廣めて、大に面目を恢復せり。池水も前の二條の堀より水を疏通し度く、其れが爲め宮内省に三度願書を提出せしが許可にならず。又堀河の水上より疏通して鐵管を敷くには五萬圓を要する故着手する能はず、されど時機を待つて追々に修補す可しと。予は只管に其機運を待つものなり。

天子の遊園も時經れば斯の如く荒廢するなれば、況して其他の古跡の年と共に衰頽するは固より已むを得ざる事なるべし、されど幸に當苑は護國寺と稱し、東寺の所管なれば、他所の社寺の末路とは自ら異なるものあり。例年八月二十八日より九月二日にかけて祭禮あり賽者夥し。

（其二十一）高野山『高野物狂』

……極樂橋……不動坂……南院の一宿……金堂……
……三鈷の松……奥の院……常燈明……

二十五日、朝來天晴れて氣朗かなれば、初冬とは云へど宛然初夏の若葉頃の如し。滊車紀州の和歌山驛を通過し、やがて高野口の停車場に着きし時は早や午後の一時頃なりしかば急がすんば日の中に登山する事能はじと思ひ、停車場前の宿屋に自轉車を預け其處にて午餐を喫し、急ぎ腕車を驅りて其處より一里半なる椎出までと命じぬ。

予を載せたる腕車は忽ち畦路に出でたりしが、仰いで見れば前面には高野の峻岳疊々として聳え、其態恰かも鋸の齒の如く信州の戸隱山に髣髴たり。車夫は山の姿を遙かに見て、あれ〳〵彼の眞黑なる山こそ高野にて候ふが、今日は定めし、寒き事にて候ふべしと語るにつけ、何となく心臆せしが、何の、おのれ、日頃鍛えし膽力を以てすれば何程の事のあるべきぞと、登らぬ先に高野を一呑にせんず意氣込みなりき。程なく車は紀の川の

棧橋に掛りたり。眺むれば水清冽にして、底には藍を湛へ、鰡魚も趨るかと思はれぬ。橋を渡りて、猶も車を急がすれば、此度は紀の川の局面一變して、大象の如き形したる巨巖駢立して、遠く微かに淙々たる流水の音を聞くなど、崖下果して何丈なるやを疑ふばかりなり。此處の通路は山壁の爲めに狹められて僅かに車の通り得るばかりなるに而も石高道なれば折々車は傾斜して、何時紀の川に眞倒に落つるやも計られず、魂を冷す事數々なりき。茲に於てか君子危きに近よらずの言を思ひ、車夫に向ひて、此邊は甚だ危ふし、如かず下車せんと思ふは如何にと言へば、車夫は平然として耳にも掛けず、年來此所を往復するを渡世と致し候なれば旦那さへ緊乎と召され候へば、決して過失ある事なし。御安心あれといふにぞ、今は男の意地としても下りる譯に往かず、車の兩脇に力を籠めて氣を張れば、折から高野通ひの郵便脚夫は車の跡を押しながら、未だ〳〵此先き尙一倍嶮しき所ありと言ひたるは何となく予をさみするが如く覺えたり。斯くて郵便脚夫は暫く車夫を助けしが、間道より登山するものと見えて、天秤を肩に掛け、草鞋穿きの甲斐々々しき姿をやがて沒し去りぬ。其より行く事僅かにして椎出に着きたれば、車を棄てゝ驀然に駈け出せしが、如何さま此處よりは登りばかり

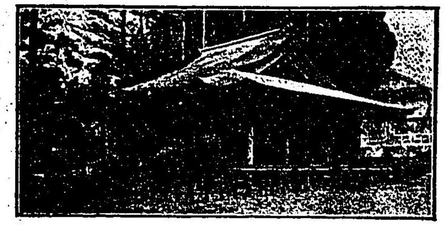
にて、路頗る嶮し。始めての登山なれば、如何ほど高き山なるかと心配したれど、未だうら若き女の二人連が杖を突きて下山するに遭ひしかば、扨は行先も大方は知られけりと、大いに心を安んじたり。人は高野は這つて上るが如き所ありと言へども、其は言を飾りたるにて、眞は左程の高山にもあらず、剛れたる僧は下駄穿きにて上下するといふ。其より親子連の板運びの人足と、凡そ一里の餘も同行せしが、一ッ二ッ語を交はせし後は駕籠を勸めて止まず、あれ御覽候へ、彼の向うに見ゆる眞黑なる山こそ高野にて、此處は地續きの山なり、始めての登山なれば、日の中に高野へは迚も難かしく候、我は夏の中客のある時には駕籠を舁ぎ、霜枯になれば山より下に板を運びて世を渡るものなれば、是より先の溜りにて駕籠を仕立て進ずべしといふに、代は何程なりやと問へば、最早歸り故一圓なりと答ふ。されども其時持合はしたるは僅かに一圓五十錢にて其中五十錢は今宵泊るべき山上の寺に包まざるべからずと思へば、中々に常の如く有れば有り從ひと云ふ無分別も起らず暫しためらひ居たるを見て、板運びの男は終には八十錢に負け、果ては持合はせが少なければ七十錢では如何に候貴公の事故さらして上げますとまで迫りしが、子は此上げますと云ふ言葉が、太く癪に障りた

れば最早一言も物言はず、心中にて屹と思案し、此上は倒るゝまでも駈足にて登り呉れんと、途々の茶屋にて呼ぶを耳にも掛けず息急き疾走すれば、何時か神谷と云ふ所も通り抜け、一際恐ろしき杉の森に差し掛りたり。實にも麓にても又今來し道にても眞黑に見えしも理や、是よりは見上ぐる限り森々たる木立にて些の日の目も見えぬなりき。

扨は愈々高野なるべし。去りながら誰ぞ來よかし、道程を問ひたけれと思ふ折しも向うより袱布を着けて草履穿きなる篤實らしき老人來りしゆゑ、言葉卑く問ひ掛けたるに、其老人曰く、是よりは杉の木立ばかりに候が併し一里もなき位なれば樂々と日の中に着けます と、此時の嬉しさは譬ふるにものなく、我にもあらず小躍りして又疾走する事一町計りにして、極樂橋といふに來れり。

「極樂はいづくのはぞと思ひしに杉葉立てたる又六の門」と云ふ一休の歌はあれど、實にも此橋よりは誠の淨域に入る心地して、潺湲たる谷川の響きは無量の詩情を惹き起しぬ。橋の袂に茶屋ありて、駕籠舁と客と憩ひ居るをも餘所に見做して、又も曳々聲して駈け上れば、程なく急坂に來りぬ。此處は名に負ふ不動坂とて徑險嶮の間を曲折して、益々嶮しきに或は木の根に躓き、或

は岩角を蹴返せしが、嬉しや、又も年若き美人の二人連にて下山するに遭ひたりしかば、道程を聞くに託けて遠慮なく言葉を交はしたり。やがて其過ぎ去りし跡を目送すれば木葉片々として風に落ち、深林の冷氣肌に泌みて寒し。先年横濱野毛山の舞臺にて、見たる實生九郎の「高野物狂」は侍烏帽子に直面にて、掛素袍に大口を穿きたるが其時同氏が笠をかたげて「是や高野の山深み茂みの木蔭分け行けば、こゝも筑波の山やらんと、吾方を思ひ出の」と舞臺の角の所より遙かに遠く橋掛りを振返りたる優美の形は今の我が身の實地に當るなれば、何となく其時の事が思ひ出さるゝにぞ、山中人なきを幸ひ、大音揚げて且つ謠ひ且つ歩みぬ。やがて八町の不動坂も登り盡して、平地の如き所に出づれば、外不動として二間半四面の堂あり。予は之に向つて一拜し、又も歩みなりて猶も、こゝは何處高野山に來て見れば、貴とやなる或は念佛稱名の聲々或は鳧鐘鈴の聲」と謠ひながら登り行きぬ。兎角する中に後より高野へ歸る僧と覺しき



（高野山不動堂）

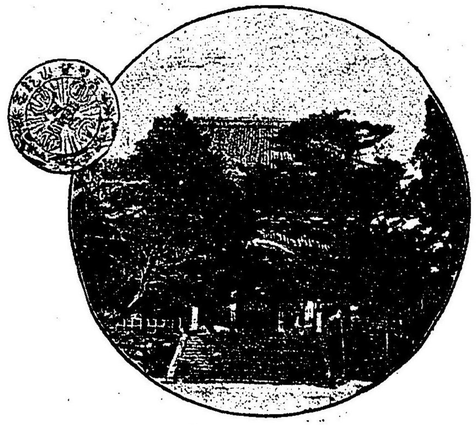
人來りければ、此人とも又物言ひ交はし、共に連れ立ちて花折坂といふを過ぐる頃、苦しからずば恐僧が庵にて一夜を御明し候へと言ふにぞ、コハ有難き御諚にて候ものかな、某豫てより山中の寺院にて旅人の宿を許す由承はり候が、圖らずも貴き御僧の御供致し、今宵の宿を得候は、是れも偏に大師の御導きにこそ候はめと厚く禮を述べ、足も輕氣に僧の後に從へば程なく女人堂の前に來れり。此時日は全く暮れて薄闇くなりしかど、今はハヤ親船に乘りたるが如き心地して女人禁制の柵を過ぎ、一心院谷の南院と云ふ寺に入りて、始めて疊の上に坐りたり。程なく暖かき火鉢も出で、湯にさへ入る事を許され、やがて予の前に据ゑられたる膳部を見れば、般若湯一本、人參の白合、柴の浸物、白味噌の豆腐の御汁、湯葉に百合の實の汲物時に取つて山野の珍味なれば、忝なしと一禮して例の大食をなし、グッと一寢入すれば忽ち夜は明けて、又も

（高野山女人堂）

膳部は出でつ。

蒟蒻の白合、大根の酢漬、白味噌の御汁、雁モドキに少し生姜を臭せたる吸物、男衆の料理としては餘りに結構なれば、斯くは長く記憶に殘りたるなり。斯かりける程に寺よりして出入の珠數屋の小廝を道案内として付けられたり。

南院を出でゝ一ッ二ッ道を曲り、復た後に戻りしかと思へば忽ち廣々たる靈場に來りぬ。此處には數多の堂塔あるが中に、先づ目に付くは音に名高き金堂なり。抑も此堂は弘仁八年大師の創建し玉ふ所にして、本尊の藥師如來(御丈一丈六尺金色の坐像)も同じく大師の自作と承る。さて脇士には、東方に金剛薩埵、普賢延命薩埵、不動明王、弘法大師、



(高野山金堂)

胎藏界曼陀羅、西方に、金剛王菩薩、虛空藏菩薩、降三世明王、五大力明王、四所明神、金剛界曼陀羅、中壇には舍利塔を安置し、いづれも金色の光り眼を射り、結構莊嚴善靈し、美靈せり、宜なる哉、此堂は山中第一の珍寶なりといふ。堂の周圍には御影堂、西塔、鐘樓、孔雀堂、六角經藏等多くの建物あれども、特に予の目に止りしは墻を繞らしたる三鈷の松にして是は能にも出づるなり

聞說大師唐土より歸航せむとし給ふ時、密教相應の靈地を占はんが爲め、八祖相承の三鈷杵を明州の津より投げ給ひ、やがて歸朝の後、此山を奏請し、荒藪を刈り開く時に當り、彼の三鈷に掛れり。依つて益々靈地なることを感じ、此地に大塔を建て、松樹を移し植ゑ給ふとなり。高僧眠りてより幾十百年、松根苔蒸して葉早く落ち、應仁に枯れ、元祿に植

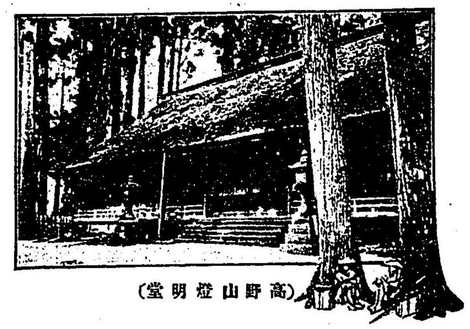
(高野山三鈷の松)

替へられたりと雖も、久しかれとの御誓願は空しからず、末世の今に至るまで、眞如平等の松風は八葉の峰を靜かに吹き、寔に結界清淨の道場たり。此邊一體を總稱して壇場と名付け、奥の院を裏院慈尊院を下院と稱すとなり。

此處を立ち出でゝ奥の院へと志しゝが、行けども行けども平地にして寺院羅列し、商估軒を並べ、宛然一の市街とも思はるゝ所あり。斯かる高山の上に斯くばかりの平地ある故に高野山と名付くるなりとは聞きしかども、去るにても是れを伐り開き給ふ大師の功德こそ尊けれ。暫らくして一の橋を渡れば貴賤道俗の石塔は立錐の餘地もなく、兩側に立ち並び、殊に諸侯の五輪塔の高く巍立せるは、一見目を驚かすばかりなり。此石塔を案内するは小厮の役と見えて、數ある墓を一一指示して事細かに說明する事甚だ親切なり。而も餘りに繁ければ聞くだも其煩はしきに耐へず。曰く「左は伊達政宗の墓」「右は熊谷次郎直實」「こちらは武田信玄の墓」「これは下野宇都宮の戸田家」「此れなる明智光秀の墓は、

（高野山一の橋）

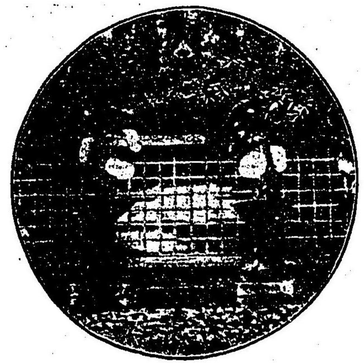
主を殺した天罰で、幾度立てゝも石が皆裂けて倒れます」と殆んど十町餘と云ふものは口の休まる暇なきにぞ、いぢらしく覺えて、持ちたる菓子の袋も皆與へ、首の襟卷も解いて其小厮の襟に卷き付け、只管に勸る心起りしも是れ皆法の導きならめ。兎角して中の橋より流汗地藏姿見の井なども通り過ぎ、御廟橋を渡れば是ぞ名高き奥の院なりき。仰げば天高く氣清く、密林の萬木は默して聲なく、加ふるに森々たる嵐氣は骨を寒からしめ、凄愴幽邃久しく居る能はざるを思はしめぬ。是に於てか諸の文にある「深々たる奥の院深山鳥の聲澄みて、飛花落葉の嵐まで、無常觀念を勸むる」云々の情趣の虛ならざるを悟りたり。あゝ、高野山に上らずして高野物狂を諳ぶ人は吾人寧ろ哀れなりと言はんと欲す。



（高野山燈明堂）

斯くてつら〳〵奥の院の燈籠堂を見てあれば北に日輪大師を安置し、東に明神壇を構へ、其北に献備の高机を据ゑ、西方に神壇を設け、其左右には常燈明充滿して、

數も知れざる夥しき有様は所謂萬燈と云ふものなるべし。就中中央なる一大燈は光明赫奕として諸燈を壓し威勢堂内に隱れなし。之を貧者の一燈と名づくとかや。思ひ出だすは故人永機翁が此處にて口吟みし「ともしびを浮世の花や奥の院」の句なり。誠に能くこそ穿たれたるものなれ、又堂の扉の所には一人の僧立ちて、信者に向ひ、頻りに燈の説明をなし、烏目を取りては御供に換ふるなりき。やがて辭して堂の裏に廻り、先づ骨堂に線香を立て、次に中央なる御廟の前に至れば、流石に跪かざるを得ず。大師は實に承和元年九月一日といふに自から此地を選び給ひ、同じく二年三月二十一日寅の刻、大日の印を結び、奄然として眠るが如く入



（高野山御山廟）

（高野山御廟橋）

定し給へるなりき。其後數多の星霜を經れども德は四海に普くて、雨の日、風の夜たりとも香煙の絶ゆる事なきは豈夫れ尊き事ならずや。夫れより一切經藏にも線香を立てゝ元の道に引返し、金剛峯寺に立寄りて暫し草鞋を脱ぎ、梅の間にある狩野探幽の筆を賞し、柳の間を覗きて、是は豐臣秀次の切腹したる所なりと説かれては眉を顰めぬ程なく此處を立ち出でゝ、南院に寄りて別を告げ、杖を片手に下山せし時しも悄くや一天掻曇りて雪は霏々として降り出だせり。されど麓に下れば日暖かにして手の先も冷たからず。

（其二十二）羅城門

『羅生門』

……應擧の墓……羅城門遺址……東寺……

十一月三十日は午前よりして羅城門に向ひぬ。

四條通を行きて、堀川に來りし頃川中を見れば男ども數多、水に足を浸して、染たる布を洗ひ居れり。素と此堀川は、源を鷹峰より發し末は桂川に入るものにて、水淺く常に底の見え透く程なれど、染物には類なき効驗ある由にて、一條戻橋の邊より水は早や染物洗滌の爲めに藍を湛へたり。西陣の不景氣の時は此水の濁り方が薄しといふ程ありて、堀川は實に京都繁昌の淵源と謂つて可なり。斯くて此の川の小橋を渡り、謠曲に「二條大宮を南がしらに歩ませけり」とある如く大宮通を南に折れんとせしに、北側に悟眞寺といふ寺ありて應擧の墓ありとの標木立ちければ、足の序に寺中に入り、墓地に行きしに、忽ちにして「源應擧の墓」を見出しつ、有繋は贋世の大家はぢわりて此墓ばかりは他と異り瓦屋根の雨覆ひある中に安置せられぬ。墓の裏書には寛政七年七月十七日卒、又戒名は圓擧無三一妙應居士とあり。さて悟眞寺を出でゝ、本

國寺、西本願寺、七條、八條を過ぎ、九條に來れば早や東寺にて、注文通り「九條おもてに打つて出で、羅生門を見わたせば」となれり。然れども明治の綱先生は敢て重代の太刀も佩かず、又固よりたけなる馬のあるべきやうなく、膝栗毛に鞭ちて遠路を來りしことゝて、少しく空腹を感じければ、何處ぞにて畫餉を食ふべしと思ふ折しも午砲響きて吾にもあらずタヂ〳〵とよろめきぬ。斯の如き弱虫にては、しるしの札を建つる事はさて措き、歸る道さへ氣遣はしければ、先づ一服と遊近き家に憩ひけり。

（東寺大師堂）

羅生門といふ諸は能にては切に出すものなるが、予は先年東京の歌舞伎座にても見たり。鬼女は故人菊五郎、綱は故人左團次にて慥に市川新藏も存命中と覺えぬ。やがて一休みして東寺の前を過ぎ松の木の間より突き出たる五重塔を跡に見ながら次第に進みて南側に府立第二中學校を見、なほも行けば往來に石橋ありて、其下を流るゝ小なる溝の畔に「羅城門遺址」と刻みたる大なる石の標立てるにぞ走り行